



Title	＜翻訳＞トゥルシーダース作『ラームチャリトマーナス』第5巻「スンドルカーンド」前半
Author(s)	竹崎, 隆太郎
Citation	印度民俗研究. 2026, 24, p. 3-81
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/104689
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

トゥルスィーダース作『ラームチャリトマーナス』

第 5 卷「スンダルカーンド」前半

竹崎 隆太郎

導入

§1. トウルスィーダース作『ラームチャリトマーナス』の第 5 巻「スندگانカーンド」（「美しいものの巻」）の前半、即ち冒頭から 5.34.5 までの訳を、ここに発表する¹。本来は、詳細な注（文法・韻律・文化事項、および、Vālmiki-Rāmāyaṇa・Adhyātma-Rāmāyaṇa・本人が著した Kavitāvalī・Gītāvalī 等々の他のラーマ物語作品との比較などを含む）を付した上で発表することが望ましいが、今回は紙幅の都合上、まずは訳の本体を最低限の注とともに発表することにした。詳細な注の発表は、後日を期すことにしたい。注釈・文法書として利用可能なものの情報は、本稿末尾の「一次文献などの情報」「工具書の情報」に記しておいた。

§2. Tulasīdāsa トウルスィーダース²（1532–1623 A.D.³）が著した多くの作品の中でも、Rāmacaritamānasa⁴『ラームチャリトマーナス』（訳：「ラーマの行いのマーナサ湖（精神的湖）」；以下 RCM と略す）は最も名高いといつてよいだろう。彼はラーマ物語を、伝統的文語であるサンスクリット語ではなく、当時の日常語（bhāṣā バーカー）の一つであったアワディー語（東ヒンディー語群に属する）⁵によって、アワディー語叙事詩⁶の形

¹ RCM のこの部分の読解を毎週丁寧に御指導いただいた長崎広子教授に深く感謝申し上げたい。無論、誤りがあればそれには私竹崎のみが責任を負う。

² 彼とその諸作品についての詳細は、GUPTA 1965; MCGREGOR 1984, pp. 109–117; LUTGENDORF 2012 など、およびそこに上る諸文献を参照。

³ MCGREGOR 1984, p. 109f. の記述による（但し cf. GUPTA 1965, pp. 143, 206）。ブラジ語の詩人 Keśavadāsa ケーシャヴダース（1555–1610 以降、cf. MCGREGOR 1984, pp. 126–130）とほぼ同時代人であるといえる。

⁴ この名称は、RCM 1.35.7.1; 35.12.1; 36.1.2; 120.s1.1; 7.113.9.2 で言及される。

⁵ ラーマ物語をサンスクリット語と対比される bhāṣā 「話し言葉」（この場合アワディー語）で語る、という作者の決意は、RCM 1.0.ś7.2; 1.9.4.1; 1.15.d1.2; 1.31.2.1 で表明されている。但し、話し言葉といっても、サンスクリット語からの借用語を多く含み、また叙事詩文体で書かれているため、日常用いられる口語・散文のアワディー語と完全に一致していたとまではおそらく言えないだろう。アワディー語地域の地図は、STRNAD 2023 を参照。

⁶ 先行するアワディー語叙事詩として、例えば Jāyasī ジャーエスィー（MCGREGOR 1984, pp. 67–71）による Padmāvata 『パドマーワト』などがある。

式で作詩した⁷。サンスクリット語からの借用語を多く交える一方、それに比してペルシャ語（その中に借用されたアラビア語をも含む）からの借用語⁸は僅かしか用いられない。その文からは、作者がサンスクリット語文学の伝統に通暁していた⁹人物であったことが読み取れる。その描写や文体は、先行するラーマ物語よりも、総じて短く簡潔である。彼が材を採ったのは、サンスクリット語による *Vālmīki-Rāmāyaṇa*（5~4 世紀 B.C ~ 4 世紀 A.D. 頃¹⁰）、および主として *Adhyātma-Rāmāyaṇa*（13~15 世紀 A.D. ?¹¹）¹²からであった。更に、部分的に Jayadeva 作 *Prasannarāghava*（およそ 1200 A.D.¹³）や *Hanumannāṭaka*（10~13 世紀 A.D.¹⁴）などの翻案¹⁵が見られることもある。

§3. 彼の生涯について歴史的に確実といえることは僅かであり、彼自身の著作中にある自己言及がおそらく最も確実な資料といえよう¹⁶：例えば、RCM 1.30.d1 では、子供の時分に、スーカルケート *Sūkarakheta*¹⁷（「野猪

⁷ 稀に、当時の主要な文学言語であったブラジ語の語形が混ざることもある。ブラジ語は、本来はマトウラーを中心とするブラジ地域で話されており、西ヒンディー語群に属する言語である。STRNAD 2023 の地図を参照。

⁸ STASIK 2009 により収集されている。

⁹ RCM 2.301.8.2 は Pāṇini 6.4.133 に基づく、tr. ŚYĀMASUNDARADĀSA, p. 616, n. 1。

¹⁰ BROCKINGTON 1998, pp. 377–397 を参考にした。

¹¹ ROCHER 1986, p. 159 による。

¹² MCGREGOR 1984, p. 112 を見よ。Cf. RCM 1.0.ś7.

¹³ Cf. 辻 1973, p. 22.

¹⁴ Cf. 辻 1973, p. 100.

¹⁵ 翻案元は、*Mānasa-pīyūṣa* の該当諸箇所；GUPTA 1965, pp. 286–289；VAUDEVILLE 1955（先行研究となる *Mānasa-pīyūṣa* 該当箇所を逐一明示せず）において指摘されている。更に、ed. CATURVEDĪ 1971 の最下段に、RCM と比較すべき文献箇所とその文言が挙げられている（e.g. “*Lomaśa-Rāmāyaṇa*”, “*Hanumad-Rāmāyaṇa*” etc.）が、それらの文献学的詳細について今回は精査できなかった。典拠について、RCM 1.0.ś7.1 に極簡潔な言及がある。

¹⁶ 彼の生涯については GUPTA 1965, pp. 38–140 などを参照。後代には、様々の伝記が書かれる過程で物語が増大してゆくが、その詳細は長崎 2011 を参照。

¹⁷ この地名が UP の Sorom を指す可能性が言われている（e.g. LUTGENDORF 2012, p. 430a など）が、確定的とは言えない（GUPTA 1965, p. 161）。

の地」)において、ラーマ物語を自分の師から聞いたことを述べる。特に重要なのは、RCM 1.34.4-5 で、この物語をヴィクラマ暦 1631 年（西暦 1574 年に当たる）、ラーマの誕生日であるチャイトラ月の（白分）9 日¹⁸、火曜日に、アヨーディヤーにおいて語ることを明言している¹⁹ことである。第 4 巻冒頭でカーシー（バナーラス）への讃辞が述べられることから、この時期までには彼がバナーラスに居住していたものと考えられている。

§4. RCM の構造について。RCM は、先行するラーマ物語たちと同様、7 つの *kāṇḍa* 「巻」からなる。RCM 1.36.1d では、四つの対話の枠組み (§5. に後述)が、湖の四つのガート *ghāṭa* に喩えられる。RCM 1.37.1.1 では、RCM の 7 つの巻が湖の *sōpāna* 「階段」に喩えられる。これにより、聞き進めるにつれて聞き手が一段ずつ *Rāmacaritamānasa* 「ラーマの行状のマーナサ湖（精神的湖）」へと降りて行く、という趣向になっている。RCM の各巻は、複数のスタンザから構成される。RCM の一スタンザは、この第 5 巻について言えば、原則として 8 行かそれより幾分多い *Caupāī*²⁰（稀に *Caupāī*）と、通常 1 詩節の *Dōhā*（或いは稀に *Sōraṭhā*）からなり、たまにその間に *Harigītikā* という韻律で書かれた部分が挿入されることもある²¹。

¹⁸ ラーマの誕生日 (*Rāmanavamī*) について、RCM 1.190.d1–1.191.2; BULKE 1950, p. 281f., §332; p. 332, §375; GOLDMAN 1984, p. 319, n. ad 5; GURUGE 1991, p. 234, §40; KANE 1958, pp. 84–88; BAKKER 1986, I, pp. 168f., 179 を参照。この *Rāmanavamī* に行われる催しの一つとして、他のラーマ信徒たちとともにラーマ物語を聞く、というものがある (KANE 1958, p. 87, l. 9–12; BAKKER 1986, I, p. 170 [cf. also LUTGENDORF 1991, p. 66f.]) ので、トゥルスィーダースはこの機会に自作のラーマ物語を披露して聞かせたのであろう (BAKKER 1986, I, p. 124)。

¹⁹ LUTGENDORF 2012, p. 430b など参照。

²⁰ *Caupāī* は、16 拍からなる一行の、脚韻を踏む二組を最小単位とする。本稿で底本とした ed. MĪSRA の *Caupāī* (/Caupāī) の番号付けは、その 4 行を一纏めにして番号を振る ed. VĀJAPEYĪ (ed. Gita Press) のものとは異なるため、注意を要する。たまに、*Caupāī* 行が、*Caupāī* 行（一行が 15 拍からなり、行末の二音節が短 [1 拍]・長 [2 拍] である）により置き換わっていることがある。

²¹ RCM 1.37.4.1; 5.1 には、RCM に用いられる韻律名として、*Caupāī*, *Charṇḍa*, *Sorathā*, *Dohā* がこの順に挙げられる。この順番は、実際の RCM の一スタンザの構成と一致する。

§5. 語りの枠構造について。RCM 1.30.1–5; 1.35.7–36.1; 1.120.sl の記述からは、『マーナス』をシヴァが作って妻ウマーに聞かせ、それをカーカ（「鳥」）・ブシュンディがガルダに聞かせ、それをヤージニャヴァルキヤ仙がバラドヴァージャ仙に聞かせ、それを最終的にトゥルシーダースが聴衆に聞かせる、という枠構造になっていることが分かる²²。本稿で、「ガルダよ」（RCM 5.5.3）、「ウマーよ etc.」（RCM 5.3.9; 20.3; 26.7; 34.2, 3）という、順にカーカブシュンディ、シヴァによる呼びかけが挿入される個所（おもに、ラーマの偉大さについて訓を垂れる文脈）があるのは、このためである。

§6. RCM 全体のあらすじは、主人公である、コーサラ国（その都はアヨーディヤー）のラーマ王子——実際は、信徒の救済のために肉体を纏って降下した神である——が、自分の妃スーターを掠奪した羅刹王ラーヴァナ（ランカー島の支配者）と戦って勝利する、というものである。これは勿論、先行する *Vālmiki-Rāmāyaṇa* や *Adhyātma-Rāmāyaṇa* と、細部はともかく²³、基本の筋に大きな違いはない。このことは、勿論、RCM がそれらの直訳であることを意味しない。RCM では、*Adhyātma-Rāmāyaṇa* に引き続き、神ラーマに対するバクティ（帰依）と、その名を唱えることによる救済²⁴がより更に強調される。また、RCM では、シヴァがラーマの信徒であり、ラーマもシヴァを崇敬している描写がなされており、両者をトゥルシーダースが崇拝していることは重要である²⁵。

²² Cf. LUTGENDORF 1991, pp. 24–26; GUPTA 1965, p. 287f.

²³ RCM の筋の、他のラーマ物語の筋との比較は TESSITORI 1911; TESSITORI 1912–1913; BULKE 1950 の各セクション（Index s.v. *Rāmacaritamānasa*）; VAUDEVILLE 1955; SINGALAVELU 1980; 坂田 1998, pp. 19–33 を、ヴァーリンとスグリーヴァのエピソードの比較については SRINIVASAN 1984 を、ハヌマーンのエピソードの比較については LUDVIK 1994 を、RCM 第5巻冒頭（本訳冒頭）で語られる *Surasā*, *Simhikā*, *Laṅkā* とハヌマーンが対決するエピソードの比較については PANDEY 1997 を参照。

²⁴ 特に RCM 1.19.1–28.2 を参照。

²⁵ ラーマ信仰がシヴァ信仰と密接な関係を持っていることについては、ECK 1991 を参照。

§7. RCM の第 5 巻のあらすじは、以下の通りである。RCM の第 5 巻「スンドルカーンド」は、内容上、二部に分かれる。ここに訳を発表する前半（冒頭から 5.34.5 まで）は、ハヌマーン²⁶が海を渡ってスィーターの居所を見つける、という主ラーマにより課せられた任務を果たし、ランカーに火をつけた上で帰還し、ラーマに労われる、という筋である。これは、Vālmīki-Rāmāyaṇa critical ed. と Adhyātma-Rāmāyaṇa 第 5 巻「スンドラ・カーンダ」全体に大方相当する。一方、後半（5.34.6 から 5.60.d1 [末尾] まで）では、Vālmīki-Rāmāyaṇa critical ed. と Adhyātma-Rāmāyaṇa の第 6 巻の冒頭に概ね相当する内容が語られる：ラーマたち一行が進軍の準備をする話が、海に橋を架ける直前の時点まで、ランカー内部の様子と並行して描写されることになる²⁷。前半と後半の切れ目を、VAUDEVILLE 1955, pp. 219, 228 は RCM 5.34 と 5.35 の間にあるとするが、内容上より厳密には、Mānasa-pīyūṣa ad RCM 5.34.5, 6 およびその目次²⁸による区分に従い、RCM 5.34.5 と 5.34.6 との間にあると考えたほうがよい。

§8. 用いたエディションについて。原則として ed. MĪŚRA 1962 を底本として用い、読みに問題がある場合は他の ed. および写本の読みも挙げた。他のエディション・写本・訳・注釈、および韻律研究・文法書・辞書等については、本稿末の略号・引用文献の前に配した「一次文献などの情報」「工具書の情報」という項目に情報を纏めておいた。

²⁶ ハヌマーンについては、LUTGENDORF 2006 などを参照。

²⁷ VālRām の北方版の第 5 巻は、ラーマの軍勢がランカー島に橋を架けて渡ったところまでを含み、第 6 巻は、VālRām critical ed. の 6.16 に当たるところから始まる（GOLDMAN / SUTHERLAND GOLDMAN / VAN NOOTEN 2009, p. 18, n. 2）。VAUDEVILLE 1955, p. 228 をも参照。RCM の 5, 6 巻の配分は少し異なるもののこれに近い、トゥルスィーダースが参考にしたラーマ物語の第 5 巻もこれに近い内容を含んでいたものと推測される。

²⁸ Mānasa-pīyūṣa は、内容を考慮して、RCM 各巻を細かい Prakaraṇa に分けている。各 Prakaraṇa の名称には、RCM 7.66–68 にある、カーカ・ブシュンディがガルダに語ったラーマ物語の梗概の中から、対応する文言が当てられている。

§9. アワディー語やヒンディー語のデーヴァナーガリー文字による原文を引用する際は、厳密を期するため、アルファベットへの翻字 (transliteration) を用いた。

§10. 訳語・翻訳スタイルの選択について。RCM 中には、*Hanūmāna*, *Hanūmarīta* (それぞれサンスクリット語 nom.sg. *Hanūmān*, acc.sg. *Hanūmantam* からの借用) といった、「ハヌマーン」を指す異なる複数の語形があるが、ここでは分かり易さのため、RCM 中で用例が最も多く、またヒンディー語などで一般に通用してもある *Hanumāna* およびその借用元であるサンスクリット語 *Hanumān* の音写「ハヌマーン」で統一してみた。一方、*Jāmavarīta* は、RCM においてはこの形でしか用いられないため、借用元のサンスクリット語 *Jāmbavant-*, acc.sg. *Jāmbavantam* に寄せた「ジャーンバヴァント」としてみた。*rākṣasa* 「ラクシャサ、羅刹」という本来の語は稀にしか用いられず、何らかの理由で原則として *nisicara*, *nisācara* 「(直訳：) 夜の徘徊者」が用いられるが、この訳では「羅刹」と統一した。「猿」を意味する複数の異なる語を全て区別して訳すことはしていない。pres. imper. と fut. imper. の意味差を日本語で十分に再現することも難しい。語りの時制としては過去 (p.p.) も現在 (原則として pres. ind.²⁹) も用いられるが、本稿では両者を訳し分けた。sg., pl. および尊敬の複数 (honorific pl.) を、日本語として幾分不自然に聞こえかねない場合であっても、明示的に訳し分けるように努めた。現代ヒンディー語と同様に、家族関係を表す語が、実際の血縁でない者に対しても用いられる(「子よ」「母よ」など) が、これは直訳のままにした。SAKSENA 1937, p. 244, §294(g), Note では、-*ēsi* で終わる 3.sg. の過去分詞が、RCM においてのみ 軽蔑のニュアンスを持つ、とするが、訳に反映させるには至らなかった³⁰。訳文のスタイルとしては、原文と照らし合わせた際に文法構造の

²⁹ 極稀に pres. part. が用いられることもある。

³⁰ SNELL / TIWARI 2023, p. 42f. は、「in some way aberrant, excessive, or rash」というニュアンスを持つとする。例えば、RCM 5.11.2 *sunāēsi*; 5.12.5 *samujhāēsi*, *sunāēsi*; 5.17.5 *nāēsi* には、軽蔑のニュアンスを読み込むのは難しい。全容例の慎重な検討を要する問題である。

理解を容易にするため、敢えて直訳に近いものを採用した。原文の描写は簡潔であるが、訳の上で誤解の余地を減らすために、野暮を承知で、特に人物名と動詞の主語について () による補足を多めに挿入した。

§11. 詩行番号の付け方について。この翻訳では、訳文の前に、底本とした ed. MĪŚRA 1962 原文の詩節に対応する番号を付けた：例えば、「5.1.7」は「RCM の第 5 巻の第 1 スタンザの第 7 Caupāi 詩行」を、「5.3.c2.3.」は「第 5 巻の第 3 スタンザの第 2 Harigītikā 詩節の第 3 行」を、「5.12.s1.1」は「第 5 巻の第 12 スタンザの第 1 Soraṭhā の第 1 行」を、「5.33.d1.2」は「第 5 巻の第 33 スタンザの第 1 Dohā の第 2 行」を、「5.0.ś3.2.1.」は「第 5 巻の冒頭 maṅgala 偈（サンスクリットによる）の第 3 節の第 2 行の後半³¹」を指す。

~~~~ ~~~

## 日 本 語 訳

\*\*\* 『ラーマの行いのマーナサ湖（精神的湖）』 \*\*\*

### 第 5 階段：美しいものの巻<sup>32</sup>

#### 5.0.<sup>33</sup>

5.0.ś1.1.1. 静まっており、永遠に在り続けており、測ることができない、罪を持たない、涅槃の寂靜を与える、

5.0.ś1.1.1.2. ブラフマー・シヴァ・コブラたちの王（シェーシャ）によって絶え間なく仕えられるべき、ヴェーダーンタ（ウパニシャッド）によって知られうる、遍在する、

<sup>31</sup> 半分を一行と数えると、第 3 行目に相当する。

<sup>32</sup> *Sundara-kāṇḍa* という章題名における、*sundara*-「美しい」という語が何を指すのかという問題があり、複数の説がある（*Mānasa-pīyūṣa* ad RCM 5.33.1; GOLDMAN / SUTHERLAND GOLDMAN 1996, pp. 75–78）。

<sup>33</sup> この冒頭の、ラーマとハヌマーンとを称える諸詩節のみが、サンスクリット語によって書かれている。

5.0.ś1.1.2.1. ラーマという名の、世界の主であり、神々の師であり、幻力によって人間となるハリを

5.0.ś1.1.2.2. 私は称える、慈悲の宝庫である、ラグ族の最上者、王たちの頭頂の宝石を。

5.0.ś2.1.1. 他の望みはない、ラグ族の主（ラーマ）よ、我々の心には。

5.0.ś2.1.2. そして私は真実を述べる：貴方は万物の内なる自己だ。

5.0.ś2.2.1. 帰依を与えよ、ラグ族の雄牛（ラーマ）よ、満ち溢れる〔帰依〕を、私に。

5.0.ś2.2.2. そして、〔私の〕心を、愛欲を初めとする欠点のないものとせよ。

5.0.ś3.1.1. 比類なき力の居場所であり、黄金の山（メール山）のように見える体を持ち、

5.0.ś3.1.2. 魔族たちという森に対する火であり、知者たちのなかで最初に数えられるべき者であり、

5.0.ś3.2.1. 全ての美德の居場所であり、猿たちの主であり、

5.0.ś3.2.2. ラグ族の主（ラーマ）の最上の使者であり、風〔神〕を父として生まれた者（ハヌマーン）に私は敬礼する。

## 5.1.

5.1.1. ジャーンバヴァントの素晴らしい言葉たちを聞くと、（その言葉たちは）ハヌマーンの心に非常に快かった。

5.1.2. 「君たちは私を待っていてくれたまえ<sup>34</sup>、兄弟たちよ<sup>35</sup>、苦しみに耐えて、球根・根・実を食べて、

5.1.3. 私がスーターを見て帰ってくるまで。為すべき仕事が成し遂げられるだろう。私には、特に、喜びがある」

---

<sup>34</sup> *parikhēhu* は、動詞 *parikhai* 「待つ」 < Pkt. *paḍikkhai* < Skt. *prātīkṣate* (TURNER no. 8620) の imper. fut. 2.pl. (未来における時の指定を伴う) である。

<sup>35</sup> dir.pl. (/voc.sg.?) *bhāī* (:: voc.pl. *bhāihu* RCM 2.190.d1.1 < Apa. °-*hō*, -*hu* [cf. OBERLIES 2005, p. 6, nn. 23–24; p. 8]) が、pl. の人々への呼びかけとして用いられているように見える。同様の例として、RCM 4.22.7.2 が挙げられる。

5.1.4. このように言って、全員に頭を下げ、喜んで行った、心にラグ族の主（ラーマ）を保持して。

5.1.5. 大海の岸辺に、或る一つの美しい山が [あった]。その上に易々と跳び上がって登った。

5.1.6. 何度も何度もラグ族の勇士（ラーマ）を想起して<sup>176</sup>、風 [神] の息子（ハヌマーン）は、大きな力で跳び上がった。

5.1.7. ハヌマーンが足を置いてから進んだその山は、パーターラ（地下世界）<sup>36</sup>へと即座に行ってしまった。

5.1.8. ラグ族の主（ラーマ）の必中の矢が [進む] 如くに、ハヌマーンは進んだ。

5.1.9. 海は、[彼を] ラグ族の主（ラーマ）の使者であると考えて、（言った：）「お前は、マイナーカ [山] よ、疲れを取り去る者となれ」。

5.1.d1.1. ハヌマーンは彼（マイナーカ [山]）に手で触れた。そして（彼は）礼をした：

5.1.d1.2. 「ラーマの仕事を為すことなしには、私にはどこに（どうして）安らぎがあろうか」（と言って）。

## 5.2.

5.2.1. 風 [神] の息子（ハヌマーン）が行くのを神々は見た。（神々は、ハヌマーンの）特別な力・知性を知るために、

5.2.2. スラサーという名の、蛇たちの母を遣わした<sup>37</sup>。（スラサーは）やって来て、彼に言葉を話した：

5.2.3. 「今日、神々は私に食事をくれた<sup>38</sup>」。（その）言葉を聞くや、風神の息子（ハヌマーン）は言った：

---

<sup>36</sup> 地下にある七つの世界、或いは、その地下七世界のなかでも最下層の世界を指す。詳細は、HOPKINS 1915, pp. 61, 111, 210; KIRFEL 1920, p. 143–147; KIRFEL 1954, p. 294a s.v. *Pātāla* を参照。

<sup>37</sup> アフディー語では、動詞語根  $\sqrt{bhēj}$  「送る」（TURNER no. 9603; RCM に例なし）は原則として用いられず、本個所のように  $\sqrt{pathāv}$  「送る」（TURNER no. 8607.4）が標準的に用いられる。

<sup>38</sup> Cf. RCM 4.27.2.2 (SNELL / TIWARI 2023, p. 365, note ad loc.).

5.2.4. 「ラーマの仕事を為しとげた後、私は戻って来る。私はスーターの無事を主に聞かせるのだ。

5.2.5. そうすれば、私は戻って来て、お前の口に入るであろう。私は真実を述べている（私はこのように誓う）。私を行かせてくれ、母よ。

5.2.6. （ハヌマーンの）いかなる尽力によっても、（スラサーはハヌマーンを）行かせない。「お前は食らわぬか（食らうがよい）、私を」[と] 言った、ハヌマーンは。

5.2.7. 彼女は口を（1）ヨージャナいっぱいにはげた。猿は体を二倍の大きさにした。

5.2.8. 彼女は口を 16 ヨージャナにした。すぐに、風 [神] の息子は 32 [ヨージャナ] になった。

5.2.9. スラサーが口を大きくするたびに、その二倍の姿を猿は見せた。

5.2.10. 彼女は口を百ヨージャナにした。（すると、）非常に小さい姿を、風 [神] の息子（ハヌマーン）はとった。

5.2.11. （ハヌマーンは）口に入ってから、また外に出てきた<sup>39</sup>。（彼は彼女に）別れを乞うた<sup>40</sup>。（彼は）彼女に頭を下げた。

5.2.12. 「私を神々がそのために遣わした<sup>37</sup>ところの、お前の知性・力の真髓を、私は心得た。

5.2.d1.1. ラーマの仕事を全てあなたは為し遂げるでしょう。あなたは知性・力の宝庫だ」[と]

5.2.d1.2. 祝福<sup>41</sup>を与えて彼女は去った。喜んで進んだ、ハヌマーンは。

---

<sup>39</sup> これによってハヌマーンは、スラサーの口に入るという誓い（RCM 5.2.5）を果たしたことになる。

<sup>40</sup> 本箇所 RCM 5.2.11.2 *māgā bidā* および 2.77.2.2 *bidā taba māgā*（もし *māgā* が *māga* pres.ind. 3.sg. でなければ）では、女性名詞 *bidā* と p.p. masc. sg. *māgā* の性が一致していないことが問題となる（SNELL / TIWARI 2023, p. 367, note ad loc.）。*bidā* √*kar* の諸例（1.62.d1.2; 1.102.d1.2; 1.103.2.2; 1.225.8.2; 2.102.d1.2; 2.104.8.2; 2.109.d1.1; 2.133.d1.1; 2.136.3.1; 2.146.2.1; 2.271.8.2; 2.286.d1.1; 2.318.4.2; 2.318.7.2; 2.318.d1.2; 2.320.1.1; 7.18.d2.2）にも、類似の問題がある。

<sup>41</sup> *āsiṣa* 「祝福」は Skt. *āsiṣ-* acc.sg. *āsiṣ-am* からの借用語である。なお、RCM では、それに並んで、本来語である *asīsa* f. 「祝福」も用いられる。これは、< Pkt. *āsīsā-* f. (PISCHEL 1900, p. 290, §411; CCDPL s.vv. *āsīsa-*, *āsīsā-*°; PSM s.v.

### 5.3.

- 5.3.1. 或る一人の羅刹女<sup>42</sup>が、大海の中にいる。(彼女は) 幻術をなして、空の鳥を掴まえる。
- 5.3.2. 空を飛ぶ生き物の映った影を水中で見て、
- 5.3.3. (彼女は) 影を掴まえる。(すると、) それは飛ぶことはできない。そのように、(彼女は) いつも鳥たちを食べている。
- 5.3.4. まさにその罠をハヌマーンに対して(彼女は) なした。彼女の欺計に、猿は即座に気づいた。
- 5.3.5. 彼女を殺して、風[神]の息子である勇士(ハヌマーン)は、海の向こうに行った、知性ある賢い者は。
- 5.3.6. そこに行つて、(ハヌマーンは) 森の美しさを見た：蜂たちは、蜜を欲しがってブンブン音をたてている。
- 5.3.7. 様々な素晴らしい木・実・花、鳥・獣の集まりを見ると、(それらはハヌマーンの) 心にとって喜ばしかった。
- 5.3.8. (ハヌマーンは) 前に一つの大きな山を見て、その上に走って登った、恐れを捨てて。
- 5.3.9. ウマーよ、(これは) 猿の偉大さでは決してなく、カーラ(死神・破壊神としての「時」)をも食らう<sup>43</sup>主の威力なのだ<sup>44</sup>。

---

*āsīsā-*); Pāli *āsimsā-* / *āsīsā-* (CPD s.v. *āsimsā-*; DoP s.vv. *āsimsā-*, *āsīsavaca-*, *āsimsavacana-*) < Skt. *āśīṣ-* × *āśāmsā-* (cf. CPD s.v. *āsimsā-*) に遡る。また、RCM では、動詞形 *√asīs*, *asīsa-i* (= Rājasthānī, Hindī, Bhojpurī *√asīs*) 「祝福する」も用いられる。これは、< Pāli *āsimsati* / *āsīsati* (CPD s.v. *āsāmsati*; DoP *āsimsati*) < Skt. *āśāmsati* に遡る。上掲の New Indo-Aryan の語彙は TURNER no. 1457 *āśīṣ-* の項目には挙がらないが、規則的な、語頭音節の母音の prosodic な短縮 (e.g. Skt. *ābhīra-* > Old Awadhi [RCM 7.117.6] *ahīra*, Hindī etc. *ahū*<sup>a</sup> [TURNER no. 1232]; Skt. *āṣāḍha-* > Hindī etc. *asāḥ*<sup>a</sup> [TURNER no. 1473]) を経た本来語と考えられる。

<sup>42</sup> ここでは名前が明示されていないが、VālRām 5.1.166; AdhyRām 5.1.35 では *Simhikā-* と呼ばれている。

<sup>43</sup> 同様の表現が RCM 6.84.6.2; 6.66.2.1 にも見られる。

<sup>44</sup> この RCM 5.3.9、および RCM 6.84.6; RCM 6.66.2.1 では、主が「カーラ(時・死)を食らう」と言われている。これは、通常はカーラ(時・死)が人を食らう、つまり死なしめる (e.g. RCM 2.47.d1.2) ものであるが、神であ

5.3.10. (ハヌマーンは) 山に登ってランカーを見た。述べられ得ない、偉大な砦は。

5.3.11. (砦は) 非常に高い<sup>45</sup>。海が四方にある。黄金の城塞には最上の輝きがある。

5.3.c1.1.<sup>46</sup> 色とりどりの宝石で作られた黄金の城塞<sup>47</sup>、密集した美しい家々、

5.3.c1.2. 四叉路・市場・良い道・小道たち [がある]。優美な都城は、様々な形にできている。

5.3.c1.3. 象・駿馬・驃馬の集まり、歩兵・戦車の集まりたちを、誰が数えられよう。

5.3.c1.4. 多様な姿をした羅刹たちの群れ、非常に力強い軍は、描写できない。

5.3.c2.1. 森・庭園・付属庭園・囲われた庭園・池・井戸・(階段付きの) 大井戸が綺麗である。

5.3.c2.2. 人間・ナーガ・神々・ガンダルヴァの娘たちが、美しい姿によって、聖者たちの心を魅了している。

5.3.c2.3. どこかで、体が大きく、山のごとくで、非常に力が強い力士たちが咆哮している。

5.3.c2.4. 様々な競技場で彼らはぶつかっている、様々なやり方で。彼らは互いに威嚇しあっている。

5.3.c3.1. 恐るべき身体を持つ幾千万の戦士たちが、努力して、街を四方で守っている。

5.3.c3.2. どこかで、水牛・人間・雌牛・驢馬・山羊たちを、悪しき羅刹たちは食べている。

---

るラーマには、そのカーラ (時・死) をも食らう威力があることを謂うものである。更に RCM 1.225.7.1; 3.19.10; 4.7.29; 5.22.9; 5.39.1 とも比較のこと。

<sup>45</sup> *utaṃga* < Apa. *uttaṃga-* (CCDPL s.v.) < Pkt. = < Skt. *uttuṅga-* (TURNER no. 1794).

<sup>46</sup> 本詩行 5.3.c1.1. の前半は、2 拍不足している。

<sup>47</sup> RCM においては、*Harigītikā* の最初の行は、原則として、直前の *Caupāī* 詩行の文言の一部を、そのまま (或いは言い換えて) 繰り返す。本個所もその例に数えられる: 5.3.11.2 *kanakakoṭa* = 5.3.c1.1 *kanakakoṭa*。

- 5.3.c3.3. トウルスィーダースは、この彼らの話を少し語ったのだ、  
5.3.c3.4. ラグ族の英雄（ラーマ）の矢という渡し場（聖地）で体を捨てる  
際に、彼らは（解脱の）道へ確実に入るであろう<sup>48</sup>から。  
5.3.d1.1. 都城の多くの守り手たちを見て、猿は心で考えた：  
5.3.d1.2. 「非常に小さい姿を私は纏おう。夜に、街に侵入しよう」。

#### 5.4.

- 5.4.1. 蚊に等しい姿を猿は纏って、ランカーに行った、人獅子（ヴィシュ  
ヌのアヴァターラの一つ）を念想して<sup>49</sup>。  
5.4.2. 名はランキニーという、一人の羅刹女が [いた]。彼女は言った：  
「お前は進んだ、私を無視して。  
5.4.3. お前は知らなかったのだ、私の秘密を、悪漢よ：泥棒である限り、  
（それが）私の食糧なのだ<sup>50</sup>」。  
5.4.4. 偉大な猿は、拳<sup>51</sup>を打ちつけた。（彼女は）血を吐きつつ<sup>52</sup>地面に転  
がった<sup>53</sup>。  
5.4.5. そのあと、そのランカー（= ランキニー）は、体勢を立て直して<sup>176</sup>  
立ち上がった。（彼女は）手を合わせて、恐れつつ歎願する：  
5.4.6. 「ラーヴァナにブラフマーが望みのものを与えた<sup>54</sup>時、去りつつ、  
ブラフマーは、私に徴しを述べました：  
5.4.7. 『猿に殴られて、お前は動転する。その時、羅刹たちが根絶やしに  
されたものと知れ』。

---

<sup>48</sup> ラーマの必中必殺の矢には、それを受けて死んだ者を天界に送る、あるいは解脱させる効力があることを述べている。それゆえ、矢が渡し場（聖地）に例えられている。この観念は、RCM 1.205.3; 3.23.4.2 などにも見られる（更に RCM 3.27.14–17; 6.114.9–10 をも参照）。

<sup>49</sup> 実際にその名（を含む文言）を唱えもした可能性がある、cf. RCM 1.27.d1.1.

<sup>50</sup> つまり：泥棒のようにランカーに忍び込む者は皆、私の食べ物だ。

<sup>51</sup> 左の拳、cf. VālRām 5.3.19 の後の Appendix I, No. 1, l. 41; AdhyRām 5.1.46.1.

<sup>52</sup> 血を吐く描写は AdhyRām 5.1.46 より採っている、PANDEY 1997, p. 240.

<sup>53</sup> 本個所の √*ḍhanaman* 「転がる」について、Hindī *ḍhanamanānā*, *ḍhunamuniyā* (ŚYĀMASUNDARADĀSA et al. 1965–1975 s.vv.) を参照。

<sup>54</sup> ラーヴァナの苦行の話 (RCM 1.177.1ff.; 7.14.4) が言及されている。

5.4.8. 我が子よ、私にとっての非常に大きい福德です、私が眼でラーマの使者を見る〔ことは〕<sup>55</sup>。

5.4.d1.1. 我が子よ、天界・解脱の幸福が、秤の一方のうでにかけられるとしよう。

5.4.d1.2. (それら) 一切が集まって [も]、たった一瞬の正しい人々との交わりによる幸福とは釣り合わない<sup>56</sup>。

## 5.5.

5.5.1. (ランカーの) 街に入って、全ての為すべき仕事を為してください、心にコーサラの都城の王 (ラーマ) を保って」。

5.5.2. 毒は甘露 [となる]、敵は友人関係をなす (友となる)、海は牛の足跡 (に溜まった僅かの水<sup>57</sup>) [となる]、火は涼しさ [となる]、

5.5.3. ガルダよ、スメール [山] は塵の如く [となる]、ラーマが慈悲をかけて見たその人にとっては<sup>58</sup>。

5.5.4. 非常に小さい姿をハヌマーンは纏った。(彼は) 街に入った、神を念想して<sup>49</sup>。

5.5.5. (彼は) 館また館を調査して<sup>59</sup>、あちこちに数えきれない戦士たちを見た。

5.5.6. (彼は) 行った、十の顔を持つ者 (ラーヴァナ) の館の中に。それ (館) は、非常に色とりどり (驚くべきもの) で、述べられ得ない。

---

<sup>55</sup> 或いは：私には非常に大きい福德がある、私が眼でラーマの使者を見る〔とは〕。

<sup>56</sup> *Mānasa-pīyūṣa* ad 5.4.d1, *Notā* 2 の指摘する通り、RCM 5.4.d1 は *BhāgavataPurāṇa* 1.18.13 と文言が共通しており、その翻案の可能性はある。

<sup>57</sup> Cf. RCM 1.119.4.2; 2.231.2.1; 5.5.2.2; 7.129.6.2; *VālRām.* 5.34.7; 6.77.11 etc.

<sup>58</sup> RCM 5.5.2–3 を、教訓的台詞 RCM 3.2.5.2–8.2 (カーカブシュンディからガルダへ、cf. *Mānasa-pīyūṣa* ad 5.5.2–3, *Tippanī* 1) および RCM 1.175.d1.1 (ヤージニャヴァルキヤからバラドヴァージャへ) と比較のこと。

<sup>59</sup> 本訳では、ed. MĪŚRA 以外の諸 ed. (*Mānasa-pīyūṣa*; ed. ŚYĀMASUNDARADĀSA; ed. CAUBE; ed. VĀJAPEYĪ; ed. GUPTA; ed. ŚUKLA et al. 1973) が異読無しで *kari* (absol.) としているのを採用して訳した。一方、誤植の可能性が拭い切れない ed. MĪŚRA *kara* (異読無し) を採るならば、「調査する。(彼は) ...」となる。

5.5.7. 猿は、彼（ラーヴァナ）が横になっているのを見た。館の中に、ヴィデーハの王女は見えなかった。

5.5.8. すると、或る一つの美しい館が見える。（持ち主は）ハリ（ヴィシュヌ）の神殿をそこに別に作っていた<sup>60</sup>。

5.5.d1.1. 家は、ラーマの武器<sup>61</sup>によって印づけられていた。（その）美しさは、描写され得ない。

5.5.d1.2. 新しいトゥルスィー（カミメボウキ *Ocimum sanctum*<sup>62</sup>）の集まりをそこに見て喜んだ、猿たちの王（ハヌマーン）は。

## 5.6.

5.6.1. 「ランカーは羅刹たちの群れの住処である。ここでは、どこに正しい人々（信徒たち）の住みかがあるというのか」

5.6.2. [と、] 心の中で、猿は思案をし始めた。その時、ヴィビーシャナは目覚めた。

5.6.3. 「ラーマ、ラーマ」とかれは念想した（声に出して唱えた）<sup>63</sup>。猿は、心で喜ぶ<sup>64</sup>——（猿は）正しい人（信徒）に気づいた：

5.6.4. 「この人と何としても知り合いになろう。正しい人（高德の人）によって、（ラーマの為になすべき私の）仕事に、害が生じることはない」。

5.6.5. （猿は）婆羅門の姿を纏って、言葉たちを聞かせた（呼び掛けた）。聞くや、ヴィビーシャナは立ち上がって、そこにいらっしやった。

---

<sup>60</sup> p.p. dir.sg. masc. と解した。「作（つてい）る」（pres. ind. 3.sg.）は不自然か。

<sup>61</sup> ラーマの弓矢をいうものと推測される。詳細は、*Mānasa-pīyūṣa* ad loc. 参照。

<sup>62</sup> 邸宅の外（空）から見える部分、おそらく中庭に、ヴィシュヌあるいはそのアヴァターラ（権化）であるラーマに捧げられる聖なる植物であるトゥルスィーが新たにお供えしてあるのが見えたので、その家の主は日々ヴィシュヌ＝ラーマを祭っている敬虔な信徒であると分かった、ということ。*Mānasa-pīyūṣa* ad loc. (RCM 7.29.6; Rāmapaṭala; Mahāśivasamhitā などを挙げる) をも参照。この植物について、マジュプリア 1996, pp. 6, 62–72, 74; 西岡 2002, pp. 50–52; 西岡 2003, pp. 193–196; 井田 2008 などを参照。

<sup>63</sup> ラーマ信者は、見覚めるとラーマの名を唱える。この例として、他に RCM 1.60.3 がある (*Mānasa-pīyūṣa* ad loc., Tīppaṇī 1)。

<sup>64</sup> 或いは：心に喜びが[生じた]／心の喜びと共に、

5.6.6. (ヴィビーシャナは) 敬礼して、息災 (であるか) を尋ねた <sup>65</sup> : 「婆羅門よ、自分の話を、説明して語ってください。

5.6.7. あなたはハリ (ヴィシュヌ) の僕 (信徒) たちの中の誰かですか？私の心には、非常な好感があります。

5.6.8. 或いは、あなたは哀れな者を愛するラーマで、私を幸運な者となすためにやっていたのですか？」。

5.6.d1.1. そこで、ハヌマーンは語った、全てのラーマの話と、自分の名前を。

5.6.d1.2. 聞くや <sup>66</sup>、両人の体は、喜びで総毛だった。心は没頭していた、(ラーマの) 美德の集まりを思い浮かべて。

## 5.7.

5.7.1. (ヴィビーシャナは言う：) 「お聞き下さい、風 [神] の息子よ。我々<sup>67</sup>の暮らしは、齒たちの中にある哀れな舌のようです <sup>68</sup>。

---

<sup>65</sup> これは、古代インドにおける挨拶の通常の手順である。

<sup>66</sup> 或いは：聞きつつ。

<sup>67</sup> ヴィビーシャナを含むハリの信徒たちを指す。

<sup>68</sup> この RCM 5.7.1.2 *jimi dasananhi mahu jībhi bicārī* とかなり似た諺が、現代の標準ヒンディー語・アワディー語などに存在する：*dushmanon meñ yūñ rahiye, jaise battīs dānton meñ zabān* (FALLON 1886, p. 76b); *duśmanom meñ yom rahiye, jaise battīsa dāmtom meñ jībha* (KHATRĪ 1913, p. 172b); *duśmanom meñ aise rahe, jaise dāmtom meñ zabāna* (NARAVAṆE 1983, p. 38); *Avadhī dusmana ke bīca mañ ja'ise dāmtana mañ jībha kī taraha rahai ka parata* (ŚUKLA 2002, p. 305b); *Bundelī jībha kaiso rahabo hai* (GUPTA 1952, p. 135); *battīsa dāmta meñ jībha* (KHATRĪ 1913, p. 215b; TIVĀRĪ 1985, p. 787a); *battīsana meñ jībha* (ŚARAṆA 1989, p. 214a); *Bundelī battīsa dāmtana meñ jaiseñ jībha* (GUPTA 1952, p. 234); *Avadhī battīsa dāmtana ke bīca mā jībha* (TIVĀRĪ 1985, p. 787a); *battīsa dāmtom meñ jībha akelī* (TIVĀRĪ 1985, p. 787a); *(kisī kā) dāmtom meñ jībha sā honā* (ŚYĀMASUNDARADĀSA et al. 1965–1975 s.v. *dāmta*, *muhā*°); *(kisī kā) dāmtom meñ jībha kī taraha hōnā* (VARMMĀ et al. 1962–1966, vol. 3, p. 43a, s.v. *dāmta*); *dāmtom meñ jībha / zabāna kī taraha hōnā*, (MCGREGOR 1993, p. 487b, s.v. *dāmta*); *dāmtom ke bīca jībha kī taraha rahanā* (AGRAVĀLA 1969, p. 346a = 1988, p. 512a; 古賀／高橋 2006, p. 642, s.v. *dāmta*) ; *jībha jaisā rahanā sabake basa kā nahīm hai* (TIVĀRĪ 1985, p. 507a) ; *Mevātī dāmtā bacalī jībha hvei ne reṇo hai* (TIVĀRĪ 1985, p. 787a); *Mālavī do moṭā bace imṭa na*

5.7.2. 友よ、一体、私を庇護者（主）のない者と知って、慈悲をかけてくださるでしょうか、太陽の家系の主（ラーマ）は？

5.7.3. タマス（闇質）からなる身体<sup>69</sup>には、方法<sup>70</sup>が何一つない。（ラーマの）蓮の花のような足<sup>71</sup>に対する愛情は心の中にない。

5.7.4. 今や私に信（頼）が生じました、ハヌマーンよ。ハリの慈悲なくしては、正しい人（信徒）たちが見つかることはない [から]。

---

*dāmtā bace jība* (TIVĀRĪ 1985, p. 787a); Kumaun / Garhwal *dāmtana kā agāri jībha sayāṇi* (GANGĀ DATT UPRETI 1894, p. 262, no. 19); Gujarati *battīsa dāmta vacce jībhaṇe dāmtathī vera* (NARAVANE 1979, p. 162). TAMḌANA 1974-?, part 5, p. 834b にも、*dāmtom mem jībha-sā hoṁnā* が挙げられるが、典拠となる個所は挙げてくれていない。なお、本箇所 RCM 5.7.1.2 とほぼ同文である *jimi dasanana māṁha jībha bicārī* が諺辞典 (MĪŚRA/MĪŚRA 1965, p. 342 [Śāhābāda 地区南部]; TIVĀRĪ 1985, p. 491a; NARAVANE 1983, p. 653 [Śāhābāda 地区]) に収録されており、RCM 本個所が諺として流通するようになっていることを示す。この諺は、敵に囲まれて用心深く暮らす人についていうものである。歯という硬く噛み切ってくる存在に取り囲まれて、柔らかい舌は外に出れずになす術がなく、ものをいうこともできない、という含意と思われる。この諺の RCM より古い例を現時点で見つけられていないため、RCM の用法が後に広がった可能性を排除はできないものの、Tulasīdāsa が既存の諺を用いた可能性のほうがより自然とは思われる。このように諺が用いられる例は、RCM 中の他箇所にも見られる (e.g. 2.55.3.2)。

<sup>69</sup> 羅刹の身体は「タマス（闇質）的」と言われる (RCM 1.122.5; 3.23.5; 5.7.3; 5.45.8)。羅刹であるラーヴァナとヴィビーシャナの自己認識によれば、「タマス（闇質）的」な身体は、主に対する帰依・愛 (RCM 3.23.5; 5.7.3) が不可能であり、悪を欲する (5.45.8 [cf. 6.104.c1.3])。ラーヴァナは、RCM 3.23.4 で、ラーマが単なる人間ではなく神が降下した存在である可能性を予感し、敵対してその矢により殺されることによる解脱を望んでいる（これは実現する、cf. RCM 1.124.2; 6.104.c1.4-d1; 6.114.9-10）。彼の「タマスの身体」には帰依は生じないであろうからである (RCM 3.23.5)。主に殺されれば解脱が得られ、人間の王なら勝利するであろう、と考える (3.23.6)。これは AdhyRām 3.5.57-61 (cf. AdhyRām 5.6.30-32) が元になっており、VālmRām には見られない要素である。

<sup>70</sup> あるいは：修行／（宗教的）成就？

<sup>71</sup> この頻繁に見られる比喩の古い例 (Skt.) は、SYED 1990, pp. 658, 679 に挙がる。

5.7.5. ラグ族の英雄（ラーマ）が親切をなしたから、貴方が私に、必然的に姿を見せたのです」。

5.7.6. （ハヌマーンは言う：）「お聞き下さい、ヴィビーシャナよ。主のやり方なのです、常に、仕えるものに愛情をお掛けになる [というのは]。

5.7.7. 言ってください：私は誰か最上の家系の者でしょうか？落ち着きなく動き回る猿であって、あらゆる点で劣っています。

5.7.8. 朝に私たちの名前を口にすると、その日、その人は食べ物を得られない<sup>72</sup>。

5.7.d1.1. そのように私は最も卑しいのです、友よ、聞け。（そのような）私にもラグ族の英雄（ラーマ）は

5.7.d1.2. 慈悲をかけました」。 （ラーマの）美徳を想起して、（ハヌマーンの）両眼は涙で一杯になった。

---

<sup>72</sup> ハヌマーンは通常自分のことを単数で指すので、ここでは pl. 「我々」は彼自身を含む猿という種族全体を指していると理解される（*Mānasa-pīyūṣa* ad loc., *Ṭippanī*）。要するに、猿を指す通常の語（*baṁḍara*, *bānara* など）が、朝においては忌み言葉であり、もし朝にその語を口にしてしまった場合、その日は一日断食をしないといけなくなる（GROWSE 1883 訳 “go fasting for the whole day”）、という、*Tulasīdāsa* の時代の北インドで実際に行われていたと思われる慣習に言及しているものと思われる。TIVĀRĪ / NAUTIYĀLA 2007, p. 128 をも参照。これと同じ習慣が、COCKBURN 1884, p. 124a §933、および、現代ウッタルプラデーシュの実例付きで GAṂGĀDĀSA 1969, vol. 5, p. 25 の RCM 本箇所への注において報告されている。猿（を含む幾つかの動物）の名前が、特に朝にタブーになっているという現代の例の他の報告として、ELLIOT 1884; D’GRUYTHER 1885; CROOKE 1884; CROOKE 1891a; CROOKE 1891b; CROOKE 1894, p. 218 = CROOKE 1896a, p. 54; CROOKE 1896b, p. 249 §17; AHMAD 1890, p. 131a; KASHI NĀTH 1894 などがある。既に *Varāhamihira BṛhatSaṁhitā* ed. *AvadhaBihārī TRIPĀTHĪ* 85.42 = *Varāhamihira BṛhadYātrā* ed. PINGREE 23.38 ≈ *AgniPurāṇa* ed. Rajendralal MITRA 230.29cd–30ab ~ *NāradaPurāṇa* 1.56.701; *Varāhamihira Yogayātrā* ed. Rāmacandra JHĀ 14.4cd = in *Utpala ad BṛhatSaṁhitā* 85.42; *Varāhamihira Tikanikayātrā* ed. Vasant Kumar R. Pandit 9.22; *Aṣṭāṅgaḥḍaya* ed. KUNTE / NAVARE / PARĀḌAKARA *Nirṇaya-Sāgar* 1939, *Śārīrasthāna*.6.26 などにおいて、猿・熊の名を口にすることは不吉とされているが、朝という限定はなく、断食への言及もない。

## 5.8.

- 5.8.1. 「(そうと) 知っていながらも、そのような主を忘れてうろつき回っている者たちは、どうして苦しめないのだろうか」
- 5.8.2. このようにラーマの美德の集まりを語りつつ、(二人は／ハヌマーンは) 言葉では言い表せない安らぎを得た。
- 5.8.3. すると、全ての話をヴィビーシャナは話した、どのような様子でジャナカの娘がそこで過ごしているか [という全ての話を]。
- 5.8.4. そこでハヌマーンは言った：「聞け、兄弟よ。私は見たい、母なるジャーナキー (ジャナカ王の娘 = スィーター) を」。
- 5.8.5. (そのための) 方策を、ヴィビーシャナは全て聞かせた。風神の息子は、暇乞いをさせて<sup>73</sup>、進んだ。
- 5.8.6. まさにその (以前と同じ、蚊のように小さな) 姿をとって、再び行った、アショーカ樹の森のなかでスィーターがいるところに。
- 5.8.7. (スィーターを) 見て、(ハヌマーンは) 心の中で礼をした。(スィーターは) 座った状態のままで、夜のヤーマ<sup>74</sup>は過ぎていく。
- 5.8.8. (スィーターの) 体は痩せていて、頭には一本の編んだお下げ髪がある<sup>75</sup>。(彼女は) 唱え続けている、心で、ラグ族の主 (ラーマ) の美德の並びを。

<sup>73</sup> つまり：ヴィビーシャナのほうを去らせて。

<sup>74</sup> 1 ヤーマは一日の 1/8 に相当する時間の単位であり、夜は 3 ヤーマからなる、cf. PW s.v. 3. *yāma*-, 1)c); s.v. *triyāma*-. 時間単位については更に、HAYASHI 2017 を参照。

<sup>75</sup> 一本の *veṇī*-「編んだお下げ髪」は、愛する夫から離れている時の、貞節な女性の髪形である、cf. *VālRām* 5.13.24; 5.17.18; 5.18.8; 5.23.9; 5.26.17; 5.55.27; 5.57.12 ≈ 5.63.13; 6.24.32; 6.68.9 (cf. *jaṭilā*-「結髪の」MBhār 3.275.9; 266.58)。上述箇所以外にも更に、MBhār 3.265.25; *VālRām* 2.100.8 ~ *Harivaṃśa* Poona critical ed., p. 97b, Adhy. 82 の後の挿入詩節, Appendix no. 18, l. 499; *Harivaṃśa* Poona critical ed. 91.13; 92.26; PW s.vv. *veṇi*- 1), *ekaveṇi*-; *Nāṭyaśāstra* (ed. GHOSH. Calcutta 1967) 23.69 ≈ (ed. M. RAMAKRISHNA KAVI, Vol. III. Oriental Institute, Baroda, 1954) 22.74cd-75ab; *Caturbhāṇī* IV.66; *Vasudevahiṇḍī* p. 35, ll. 5-10; *Daśakumāracarita* (cf. BOLLEÉ 2008, p. 17 [s.v. hair planted in a single braid]); *Kathāsaritsāgara* ed. Nirṇaya-Sāgara 1915, 14.2.77, 113-114 (cf. BOLLEÉ 2015, p. 141

5.8.d1.1 (スィーターは) 自分の足に目をやって、心はラーマの蓮のような足に没頭している。

5.8.d1.2 ジャナカ王の娘 (スィーター) が哀れであるのを見て、風神の息子 (ハヌマーン) は非常に苦しくなった。

## 5.9.

5.9.1. (ハヌマーンは) 木の若葉の中に隠れて <sup>76</sup>いた <sup>77</sup>。(ハヌマーンは) 考える：「何を私はしたらよいだろうか、兄弟よ <sup>78</sup>」。

5.9.2. その時、ラーヴァナがそこにやって来た、多くの女性たちと共に、(多くの) 装飾をした状態で <sup>79</sup>。

5.9.3. 多くのやり方で、悪漢は、スィーターを説得しようとした。懐柔 [策]・贈与 [策]・恐迫 [策]・離間 [策] <sup>80</sup>を示した。

---

+ n. 478 [s.v. *eka-veṇī*]; p. 200 + n. 705 [s.v. *hair*]); Mahāvastu 2.174.18; 2.176.9; VYAS 1967, p. 100, ll. 7–9; p. 220, ll. 15–22; BHATTACHARYA 1971, pp. 88–90 を参照。この一本の *veṇī*-「編んだお下げ髪」は、戻ってきた愛する夫により解かれることになる (VālRām 6.24.32; Vasudevahiṇḍī p. 35, ll. 5–10; KathāSaritSāgara ed. Nirṇaya-Sāgara 1915, 14.2.113–114 [cf. BOLLEÉ 2015, locc. cit.]). 夫と離れている悲しみで、スィーターは食事を殆ど取らない (VālRām 5.11.54; 5.17.19; 5.18.8; 4.62.7–10 [cf. LEFEBER 1994, pp. 14, 349f.; POLLOCK 1991, p. 332]) ので *kṛśā*-「やせ細っている」 (VālRām 5.13.22 [GOLDMAN / SUTHERLAND GOLDMAN 1996, p. 392], 25; 5.17.19; 5.22.14; 5.26.13; 5.55.27; 5.63.24; MBhār 3.265.30; 3.266.58; cf. STERNBACH 1974–2007, vol. 3, p. 1265b, no. 5261)。以上のような、夫が家を空けている時に妻がとるべき振る舞い (質素な服装 etc.) などについては、上述の諸文献の他に、KāmaSūtra 4.1; KANE 1941, pp. 565–567 などをも参照。

<sup>76</sup> *lukā-i* は動詞 √*lukā* *lukā-i* 「隠れる」 (p.p.: nom.pl. masc. *lukāne* RCM 1.255.2.2; 1.268.3.2; 7.31.4.1) の absol. である。

<sup>77</sup> スィーターは木の下におり、ハヌマーンはその木の上にいる。

<sup>78</sup> *Mānasa-pīyūṣa* ad loc., Nota 3 は、*bhāi* 「(直訳：) 兄弟よ！」が自分の心に対する呼びかけとして用いられているという例を複数挙げるが、その中で確実かつ本個所と文脈が共通するものは RCM 1.52.4.2 である。RCM 5.13.7.2 も同様の例である可能性がある。

<sup>79</sup> 或いは：(多くの) 装飾をした多くの女性たちと共に。

<sup>80</sup> Arthaśāstra 1.13.25; 2.10.47; 7.14.11; 7.16.3; 9.5.9–6.62; 9.7.68–80; 11.1.3; ManuSmṛti 7.107–109, 159, 198 などより見られる、4 つの *upāya*-「方策」(cf. PW s.v. 3. *sāman*- [MBhār 3.122.17; 5.127.14–15 etc.]; KANE 1946, pp. 171–175;

5.9.4. ラーヴァナは言う：「聞け、美しい顔の女よ、知恵ある女よ。マンドーダリーを初めとする全ての王妃たちを

5.9.5. お前の従者に私はしよう。（それが）私の誓いだ。一度（だけでも）私の方を見てくれ」。

5.9.6. 草を（顔の）覆いとして持って <sup>81</sup>、ヴィデーハの王女（スィーター）は言う、最高に愛情深いアヨーディヤーの主（ラーマ）を想って：

5.9.7. 「聞け、十の顔を持つ者よ！ 蛍の光（＝ラーヴァナ）によって、一体、蓮の花 <sup>82</sup>（＝私スィーター）が花開くとでもいうのか <sup>83</sup>。

---

SCHARFE 1989, pp. 206, 209f.; OLIVELLE et al. 2015, s.vv. *upāya-*, *dāna-*, *bheda-*, *sāman-*; GOLDMAN / SUTHERLAND GOLDMAN 1996, pp. 414 [ad 5.21.35]; 448 [ad 5.34.16]) が列挙されている。RCM 4.19.2, 7; 6.38.9 にも登場する。ラーヴァナは王としてこの手の方策をよく心得ていたものと思われる。

<sup>81</sup> Cf. *VālRām* 5.19.3; *MBhār* 3.265.17c; *AdhyRām* 5.2.31. この所作の意味については、PISCHEL 1908, p. 455 (= 2020, vol. 2, p. 1043); GOLDMAN / SUTHERLAND GOLDMAN 1996, p. 406f. ad loc. の議論（文献付き）を参照のこと：妻が夫（等の近い親族）以外の男に直接見られることは望ましくない（e.g. *VālRām* 6.102.19–31 [cf. GOLDMAN / SUTHERLAND GOLDMAN / VAN NOOTEN 2009, p. 1426, ad 19]) ので、草を象徴的なパルダールとしている。さらに、相手を拒否している仕草、相手を草に等しい（取るに足らない）とみなす仕草とも考えられる。

<sup>82</sup> *nalini-* について、SYED 1990, pp. 649–651 を参照。

<sup>83</sup> ラーヴァナが弱い光を放つ蛍に、ラーマが太陽に、スィーターが蓮の花（朝の昇る太陽によって花開く）に喩えられており、ラーマでなくてはスィーターの心を開かせることができないことを謂っている。ラーマの輝きの前ではラーヴァナの輝きは霞んでしまう。RCM 5.9.d1 をも参照。この比喩は、太陽＝夫が蓮＝妻を花開かせるという Skt. 文献に見られる比喩（SYED 1990, p. 649 [*Indische Sprüche* vol. 1, p. 362f., no. 1877 (cf. *Śisūpālavadhā* 9.11; *Indische Sprüche* vol. 3, p. 157, no. 5419)]) を踏襲している。ここでは、*nalini* 「蓮」が f、太陽（e.g. *bhānu*）と *khadyota* 「蛍」が m. というように、比喩と比喩対象の性が正しく一致している。ラーマ＝太陽とする比喩は、ラーマが *Sūryavāṁśa* 「太陽の家系」に属することからも、適切といえよう。この比喩は、*VālRām*, *AdhyRām* の対応箇所におけるスィーターの台詞には現れない。*Mānasa-pīyūṣa* ad loc. 訳への footnote \* が指摘する通り、*Prasannarāghava* 6.28 の翻案と思われる。更に、*Prasannarāghava* におけるこのスィーターの台詞に対するラーヴァナの返答（(*sakrodham*) *āḥ pāpe* ... 以下）は、おおまかにではあるが RCM 5.9.d1 に対応するであろう。

5.9.8.<sup>84</sup> そのように心で理解せよ」。ジャナカ王の娘（スィーター）は言う：「悪漢よ、（お前は）知らないのか<sup>85</sup>、ラグ族の英雄（ラーマ）の矢を。

5.9.9. 悪漢よ、お前は人のいないところで奪って連れて来た、私を。最も卑しい者よ、恥知らずな者よ、恥は無いのか<sup>86</sup>、お前には」。

5.9.d1.1. 自分（ラーヴァナ）を蚩に等しいといい、ラーマを太陽に等しいというのを聞いて、

5.9.d1.2. 厳しい言葉を聞いて、（ラーヴァナは）剣を抜いて、非常に怒って言った：

## 5.10.

5.10.1 「スィーターよ、お前は私を侮辱した。私は切ろう、お前の頭を、固い剣によって。

5.10.2 さもなくば、すぐに我が言葉を聞き入れよ。美しい顔の女よ、さもなくば、命に危害があるぞ」。

5.10.3 （スィーターは言う：）「主の腕は、青黒い蓮<sup>87</sup>の花輪のように美しく、象の鼻のようだ、十の首を持つ者（ラーヴァナ）よ。

5.10.4. その腕が（私の）喉元にあるか、あるいはお前の恐ろしい剣があるかだ<sup>87</sup>。聞け、悪漢よ、私の真なる誓いはこのようだ<sup>88</sup>。

5.10.5. チャンドラハーサ（ラーヴァナが帯びている名剣<sup>89</sup>）よ、我が苦しみを取り去れ、ラグ族の主（ラーマ）との別離という火によって生じた[苦しみ]を<sup>90</sup>。

---

<sup>84</sup> 本詩行の前半行は、後ろから5拍目より前のどこかで、1拍不足している。

<sup>85</sup> 或いは：知らないのだ。

<sup>86</sup> 或いは：恥はないのだ。

<sup>87</sup> *Mānasa-pīyūṣa* ad 5.10.3–4, *Ṭippanī* の指摘通り、RCM 5.10.3.1–4.1 は、*Prasannarāghava* 6.30 ≈ *Hanumannāṭaka* 10.16 を下敷きにしている。そこでは、*utpala-śyāma*-「睡蓮 (cf. SYED 1990, pp. 627–630) のように青黒い」とされる。

<sup>88</sup> 或いは：このような真なる誓いが私にはある／このようなものが、私の真なる誓いである。

<sup>89</sup> おそらく「月の白い輝きを持つ」を意味する。

<sup>90</sup> *Mānasa-pīyūṣa* ad 5.10.5–6, *Notā* 1, \**Pāṭhapara vicāra*\* の指摘通り、RCM 5.10.5–6 は *Prasannarāghava* 6.33 の翻案である。RCM 5.10.5 は全て Skt. として

5.10.6. 冷たく鋭い、最上の刃／水流<sup>91</sup>をお前は運ぶ」。スィーターは言う：「我が苦しみという重荷を取り去れ」。

5.10.7. (スィーターのその) 言葉を聞くや、(ラーヴァナは) 殺さんとして走り寄った。マヤの娘 (マンドーダリー) は、道理を話して、(夫ラーヴァナを) 説得した。

5.10.8. 彼 (ラーヴァナ) は全ての羅刹女たちを呼んで言った：「行って、スィーターを多くのやり方で怯えさせよ。

5.10.9. 一ヶ月の期日以内に (スィーターが私の) 言うことを聞き入れなかったら、私は剣を抜いて、(スィーターをきっと<sup>92</sup>) 殺してやろう」。

5.10.d1.1. 十の首を持つ者 (ラーヴァナ) は、館へと去った。ここには羅刹女たちの群れがいる。

5.10.d1.2. (彼女らは) スィーターを恐れさせる。(彼女らは) 多くの醜い姿をまとっている。

## 5.11.

5.11.1. トリジャターという名の或る羅刹女が [いた]。(彼女は) ラーマの足への愛があり、分別に巧みであった (思慮深かった)。

5.11.2. (彼女は) 全員を呼んで、夢を聞かせた：「スィーターに仕えて自らの利益をなしなさい。

5.11.3. 夢で猿がランカーを燃やしました。羅刹たちの軍勢皆を殺しました<sup>93</sup>。

---

読むことも可能になっている。RCM 5.10.5 行末の語 *paritāpam, samjātām* は Skt. の語尾を残し、脚韻は完全ではない。

<sup>91</sup> *dhārā* が掛詞になっている。

<sup>92</sup> 未来を表す *-aba-* 分詞は、しばしばその事態が起こることが確実であるというニュアンスを帯びる (e.g. RCM 1.257.2.2)、ということ、SNELL / TIWARI 2023, p. 45 は主張する。同様に、SNELL / TIWARI 2023, p. 379 の本箇所訳および *ibid.*, note ad loc. は「きっと」の意味を読み込む。ここではそれに従って訳してみた。原則通り、*-aba-* 分詞は、p.p. の如く、他動詞の目的語 (ここでは意味上補われる *dir.sg. fem. sītā*) と一致し、動作主は *obl. (ergative)* で出ている。

<sup>93</sup> あるいは：... 燃やしました、羅刹たちの軍勢を皆打ち殺して。

5.11.4. <sup>94</sup>十の頭を持つ者（ラーヴァナ）は、驢馬に乗っています、裸で、頭を剃られて、二十の腕は切り落とさ<sup>95</sup>れて。

5.11.5. このように、彼（ラーヴァナ）は南の方角に行きます<sup>96</sup>。ランカーは、あたかもヴィビーシャナが得たかのようにでした。

5.11.6. 街ではラグ族の英雄（ラーマ）の名の布告が行き渡りました。その時、主（ラーマ）はスーターを呼びにやり<sup>37</sup>ました。

5.11.7. 私は大声で（警告して）言う —— この夢は真実となるであろう、僅かの日々が過ぎれば」。

---

<sup>94</sup> この夢（RCM 5.11.3–6 < AdhyRām 5.2.49b–53a < VālRām 5.25.10–25 [cf. MBhār 3.264.64–70]）について、KANE 1962, p. 775f.; GOLDMAN / SUTHERLAND GOLDMAN 1996, p. 424f. を参照。

<sup>95</sup> このような腕の描写は、AdhyRām, VālRām, MBhār 上掲箇所には見られない。

<sup>96</sup> VālRām 5.25.19–21 に、ラーヴァナが南方に向かう描写がある（AdhyRām 5.2.51b–52a には無し）。南の方角は、古くより死神ヤマの方角である（VālRām 5.25.19–20 でも明示的に述べられる）。それに加えて、南は処刑場がある方角である、という事実をも背景に想定しうるだろう：特に参考になるのは、捕まった盗賊が頭を剃られて引いて行かれ、都城の南門から出て、その南（にある処刑場）で頭を刎ねられる、という DīghaNikāya ed. PTS, vol. 2, p. 321 (no. 23); vol. 3, p. 67 (no. 26); SaṃyuttaNikāya ed. PTS, vol. 2, p. 128 (no. 12.7); vol. 4, pp. 344, 345, 346, 347 (no. 42); AṅguttaraNikāya ed. PTS, vol. 2, p. 240f. (no. 242) における定型描写である（更に Avadānaśataka ed. SPEYER, vol. 2, p. 182, ll. 4–7, no. 98 [~ vol. 1, p. 102, ll. 6–9, no. 18]; Jātaka ed. PTS, vol. 1, p. 325f., no. 73 をも参照）。罪人の処刑は、śmaśāna-「死体置き場」において、śūla-「処刑用の串・杭」で行われる例（Jātaka ed. PTS vol. 4, p. 29 [no. 444]; Kumārasambhava 5.72(Vallabhadeva)/ 73(Mallinātha); SYED 1993, p. 222; Mṛcchakaṭikā ed. KALE, Aṅka 9, p. 348, ll. 10f., 16–18; Aṅka 10, p. 370, l. 18; p. 378, ll. 27–30）があるが、その死体置き場＝処刑場は都城を出て南にある（Mṛcchakaṭikā locc. cit.; dakṣiṇa-śmaśāna- Vetālapaṇcaviṃśati(Jambhaladatta), ed. EMENEAU, p. 8, l. 27; p. 10, l. 6; p. 150, l. 17 etc.）。このような夢が（当然）凶兆であることについて、GOLDMAN / SUTHERLAND GOLDMAN 1996, p. 424 ad 18; KANE 1962, p. 776; SuśrutaSaṃhitā ed. TRIKAMJI, Nirṇaya-Sāgar 1931, Sūtrasthāna.29.55–57; SuśrutaSaṃhitā ed. VĀMAN KESHEO DĀTĀR, Nirṇaya-Sāgar 1922, Indriyasthāna.5.36a; Aṣṭāṅgahṛdaya ed. KUṆṬE / NAVARE / PARĀḌAKARA Nirṇaya-Sāgar 1939, Śārīrasthāna.6.41–42 (cf. KUTUMBIAH 1962, p. 105); SvapnaCintāmaṇi 2.90 (NEGELEIN, 1912, p. 305) などを参照。

5.11.8. 彼女の言葉を聞いて、彼女ら（羅刹女ら）全員は恐れた。（彼女らは）ジャナカ王の娘（スィーター）の両足のもとに伏した。

5.11.d1.1. その時、彼女ら全員はあちこちに去った。スィーターは、心で考えをなす<sup>97</sup>：

5.11.d1.2. 「一ヶ月の期日が過ぎれば、私を殺すであろう、卑しい羅刹は」。

## 5.12.

5.12.1. （スィーターは）トリジャターにおっしやった、両手を合わせて：  
「母よ、お前は私の、苦難の友である。

5.12.2. 私は肉体を捨てよう。急いで、方策をなせ。別離は耐え難いものであり、今や耐えられ得ない。

5.12.3. 薪を持ってきて火葬壇を作って準備せよ。母よ、それから火をつけてくれ。

5.12.4. 私の愛を真実とせよ<sup>98</sup>、知恵ある者よ。誰が聞くというのか、耳で、（ラーヴァナの）槍に等しい（苦痛を与える）言葉を」。

5.12.5. （スィーターの言葉を）聞くや、（スィーターの）足を掴んで、（トリジャターは）慰めた。主の威光・力・良き名声を言って聞かせた：

5.12.6. 「夜には火は得られない。聞け、繊細な女性よ」。そのように言って、彼女（トリジャター）は自分の館へと去った。

5.12.7. スィーターは言う：「運命は（私に）逆らうものとなった。火は得られないだろう。苦痛は消えないだろう。

5.12.8. はっきりと見える、天には、赤々と燃える火たち（星々）が。大地には星はひとつもやって来ない。

5.12.9. 月は火で出来ている。（それなのに、月は）火を落としてくれない<sup>99</sup>、あたかも私を運が尽きた者と知ってかのように。

---

<sup>97</sup> 或いは：スィーターの心は考える

<sup>98</sup> 自死によって愛を証明する。 *Mānasa-pīyūṣa* ad loc., *Ṭippanī* 2（類例を挙げる）を参照。

<sup>99</sup> 月から火が落ちてくることはないということが、RCM 1.71.8; 2.48.d1 でも前提となっている。

- 5.12.10. 聞け、私の懇願を、アショーカー樹（無憂樹）<sup>100</sup>よ。（「無憂」という自らの）名前を真実とせよ<sup>101</sup>。我が憂いを取り去れ。
- 5.12.11. 新しい若芽は火の如くだ<sup>102</sup>。火をくれ。体を終わらせてくれ<sup>103</sup>。

---

<sup>100</sup> スイーターはアショーカー樹の下におり、ハヌマーンはそのアショーカー樹の上で枝に隠れている。

<sup>101</sup> 同様の表現が、Skt. 文学では MBhār 3.61.99; 3.61.102; VālRām 3.58.17 に見られる（SYED 1990, p. 80; 詳細は VASSILKOV 2000, esp. pp. 451–453\*, 455f.\*）が、これらの例は、夫と離れ離れになった女性（ダマヤンティー／スイーター）が、アショーカー（無憂）樹に対して、自分に夫を見せる（会わせる）ことにより、自分の憂いを取り去ってくれ、と述べる文脈にある。更に、MBhār 1.77.6 後の挿入詩節 no. 794, ll. 5–6, critical ed., p. 348b = MBhār 3.61.98 後の挿入詩節 no. 280, critical ed., p. 203a（VASSILKOV 2000, pp. 453\*, 455f.\* で論じられる）をも参照。一方、Prasannarāghava 6.36（詳細は本稿注 105 を参照）～RCM 5.12.11–12 では、アショーカー樹が別離の苦しみを強く想起させる（Buddhacarita 4.45; Ṛtusamhāra 6.16; Saundarananda 7.5; cf. SYED 1990, p. 78）こともあり、スイーターはアショーカー樹に死を求める。

[\*] recte: *tvannāmānam* “having your name (i.e. Sorrowless)”]

<sup>102</sup> RCM 5.12.11.1 は Prasannarāghava 6.37 からの借用である（詳細は本稿注 105 を参照）。RCM 5.15.2.1 とも比較のこと。アショーカー樹の若葉は赤い、SYED 1990, p. 81, l. 21f. アショーカー樹の若芽 (*pallava*-) が赤い文学上の例として、Caurapañcāśikā N 14, Buddhacarita 4.48 (SYED 1990, p. 78); Mālavikāgnimitra 3.16 (KALE / DAVE / UPADHYAYA 1985, p. 289f.) などを挙げうる。更に DVIVEDĪ 1948, p. 233, ll. 23–25（ドゥヴィヴェーディー／町田 1983, p. 38a）を参照。春に咲く一種のアショーカーの花も赤い色をしており（SYED 1990, p. 77 etc.; SHARMA 1964, p. 81 [cf. VālRām 4.16.27]; DVIVEDĪ 1948, p. 233f. [ドゥヴィヴェーディー／町田 1983, p. 37f.])、燃える火の色に喩えられる、e.g. VālRām 5.13.10 (SYED 1990, p. 80)。Āśoka 樹については、上述文献の他に、KALE / DAVE / UPADHYAYA 1985, pp. 265, 267, 270, 279, 289f., 302, 333; RAU 1986, p. 193, no. 7 (= 2012, vol., p. 258); SYED 1990, pp. 77–115; SYED 1993, p. 156f. (ad 3.26.1); マジュプリア 1996, pp. 124–127; 西岡 2002, pp. 40–42 など参照。

<sup>103</sup> *jani karahi nidānā* 或いは *tanu karahi nidānā* という二つの読みが伝わるが、前者は「終わり（死）をなすな」のような意味となり、死を望むスイーターという文脈に合わない（GUPTA 1949b, p. 405）。前者はまた文法的にも望ましくない：文法的には、*jani* (< Skt. *yāthā nā* TURNER no. 10408; CHATTERJI 1953, p. 14, §27, Note) は pres. ind. とともに用いられるのが原則である（e.g. RCM 1.3.2.1 *karai* [pres.ind. 3.sg.] *jani*; UVP 10.8, 9f., 11) ため、*karahi* pres. imper. でな

5.12.12. スーターが（愛する夫ラーマとの）別離により非常に動転しているのを見て、その一瞬が猿には一劫のように過ぎた<sup>104</sup>。

5.12.s1.1. 猿は心で考えて、そして、指輪を投げた。

5.12.s1.2. アショーカー [樹] が、赤々と燃える火をくれたかのよう [であった]。（スーターは、）喜んで、立ち上がって、（その指輪を）手に握んだ<sup>105</sup>。

### 5.13.

5.13.1. その時、（スーターは）見た、ラーマの名前が刻まれた、非常に美しい、心を奪う指輪を。

5.13.2. （スーターは）驚いて見つめる、指輪を、それと分かって。喜びと落ち込みで、心の中で（スーターは）動揺した。

5.13.3. 「誰が打ち勝つことができるというのか、打ち勝つことのできないラグ族の王（ラーマ）に。幻力によってこのような [指輪] はこしらえられ得ない」

5.13.4 （と、）スーターは心で様々な思考をする。甘い（感じの良い）言葉を、ハヌマーンは話した。

5.13.5. （ハヌマーンは）ラーマチャンドラ的美徳を描写し始めた。聞くやいなや、スーターの苦しみは去った。

---

く *karasi* pres. ind. 2.sg. が期待されるところだからである。*tanu* を採れば、意味的・文法的問題は生じない。そのため、本訳では *tanu* を採った。

<sup>104</sup> RCM 5.12.12.2 : ~ 5.31.d1.1.

<sup>105</sup> RCM 5.12 における、スーターが自殺のためにトリジャターに火を持ってきたらおうとするが、無いと言われ、火のような若芽を持つアショーカー樹に火をくれるよう頼み、落ちてきた指輪をアショーカー樹がくれた火と思う、という場面は、*VālRām* にも *AdhyRām* にも見られないが、*Mānasa-pīyūṣa* ad 5.13.10–11, Noṭa 2 の指摘するように、*Prasannarāghava* 6.36–40 に見られ、そこから借用したものと思われる。但し、RCM 5.12 のほうがより詳細であり、まず月と星々からは火がもらえないことを述べる (*Mānasa-pīyūṣa*, loc. cit.)。Prasannarāghava 6.36–40 に見られない描写は、*Tulasīdāsa* の創意によるものである可能性 (*Mānasa-pīyūṣa*, loc. cit.) がある一方で、他のまだ指摘されていない何らかの典拠をも踏まえたものである可能性も排除はできない。

5.13.6. (スィーターは) 聞き始めた、耳で、心を集中させて。(ハヌマーンは、) ちょうど初めから、全ての話<sup>106</sup>を聞かせた。

5.13.7. (スィーターは言う：)「耳にとっての甘露である素晴らしい話を語ったその人は、どうして姿を現さないのか、兄弟よ<sup>107</sup>」。

5.13.8. その時、ハヌマーンは近くに行った。(スィーターは) 向きを変えてお座りになった。(スィーターの) 心に驚きが生じた。

5.13.9. (ハヌマーンは言う：)「私はラーマの使者です、母なるジャーナキー(ジャナカ王の娘)よ。(私には、) 慈悲の宝庫である人(ラーマ)への真実の誓いがあります<sup>108</sup>」。

5.13.10. この指輪を、母よ、私は持ってきました。ラーマは、印として(それを) 貴方に与えました」。

5.13.11. (スィーターは言う：)「言え—— 人と猿とに、交わりがいかにして(生じたのか)」<sup>109</sup>。(ハヌマーンは、) 話を語った、いかにして交わりが生じたかを。

5.13.d1.1. 猿の愛ある言葉を聞いて、(スィーターの) 心に信頼が生じた。

5.13.d1.2. (スィーターは、) 分かった、心・行い・言葉から、この彼が慈悲の海である者(ラーマ)の僕であると。

## 5.14.

5.14.1. (ハヌマーンが) ハリの信徒であると知って、(スィーターは) 好意が非常に大きくなった。(スィーターの) 両目は涙を湛えている。(スィーターの体には、) 喜びで総毛だった毛の列が立っている<sup>110</sup>。

5.14.2. (スィーターは言う：)「(私が) 別離の海に沈みつつある時に、ハヌマーンよ、あなたは私にとって船となりました、我が子よ。」

---

<sup>106</sup> 即ち、ダシャラタ王・ラーマの話から、スィーター発見までの全ての経緯。

<sup>107</sup> 注 78 を参照。

<sup>108</sup> 或いは：慈悲の宝庫である人(ラーマ)への(私の)誓いは真実です。

<sup>109</sup> RCM 5.13.11.1 は、AdhyRām 5.3.25.2 の直訳に近い。

<sup>110</sup> *bārḥī*「大きくなった」；*thārḥī*「立っている」(ed. *Mānasa-pīyūṣa*; ed. CAUBE; ed. GUPTA; ed. MĪŚRA) の代わりに、*gārḥī*「深い」；*bārḥī*「大きくなった」と読む写本 (cf. ed. CAUBE ad loc.; ed. MĪŚRA, p. 481) ・ ed. (ed. VĀJAPEYĪ) あり。

5.14.3. さあ今、安寧を言え、——私はお願いします<sup>111</sup>——、弟（ラクシュマナ）ともども、幸いの館であり、カラの敵である方（ラーマ）の<sup>112</sup>。

5.14.4. 心優しく慈悲深い、ラグ族の王（ラーマ）は。猿よ、どういう理由で、（そのラーマが）無慈悲さを身に帯びたのですか<sup>113</sup>。

5.14.5. （ラーマの）生来の性質は、仕える者に幸を与えるものです。いつか（私を）思い出してくれるでしょうか、ラグ族の統領（ラーマ）は。

5.14.6. いつか、私の目は涼しくなる<sup>114</sup>でしょうか、我が子よ、青黒い柔らかな体を持つ方（ラーマ）<sup>115</sup>を見つめて」

5.14.7. （スィーターは）言葉が出てこない。（スィーターの）両眼は涙で溢れた：「ああ、主（夫）は私をすっかり忘れてしまった」。

5.14.8. スィーターが別離で極めて動転しているのを見て、猿は柔和で丁寧な言葉を述べた：

5.14.9. 「母よ、主は、弟ともども、安寧です。貴方の苦しみに心を痛めておられます、大きな慈悲の住処である方は。

5.14.10. 母よ、心で気を落とさないでください。ラーマには<sup>116</sup>、貴方より、二倍の愛があります<sup>117</sup>。

5.14.d1.1. ラグ族の主（ラーマ）の言伝てを、さあ今、聞け、母よ、心を強く持って」。

5.14.d1.2. そのように言って、猿は（感情の高まりで）言葉がつかえる状態になった。（猿の）両目は涙で一杯になった。

---

<sup>111</sup> 直訳は「私は身を捧げる」となるが、慣用句として用いられている、cf. *Mānasa-pīyūṣa* ad 5.14.3, *Notā* 1.

<sup>112</sup> つまり：ラーマとラクシュマナが安寧かどうか言え、或いは、ラーマとラクシュマナが安寧であると言ってくれ。

<sup>113</sup> 或いは：心優しく慈悲深いラグ族の王（ラーマ）が、猿よ、どういう理由で、無慈悲さを身に帯びたのか。

<sup>114</sup> つまり：別離の火が収まる。本稿 n. 180 を参照。

<sup>115</sup> 或いは：（ラーマの）青黒い、柔らかな体

<sup>116</sup> 所有形容詞 obl.sg. masc. *-e(m)* による所有構文、KELLOGG 1893, p. 416f. §697.

<sup>117</sup> つまり：貴方がラーマに対して抱いている愛の二倍の愛を、ラーマは貴方に対して抱いています。この RCM 5.14.10 は、RCM 4.3.7 と非常に似通っており（*Mānasa-pīyūṣa* ad 5.14.10, *Ṭippanī* 1）、RCM 2.21.4 とも比較しうる。

### 5.15.

5.15.1. (ハスマーンは言う：)「ラーマは言った：『お前との別離によって、スィーターよ、私にとって全てがさかさまになった。

5.15.2 新しい木の若芽は火のごとくである。夜は最期の夜（世界滅亡の夜）<sup>118</sup>のようである。月は太陽 [のよう] である。

5.15.3 水蓮の森は、檜の森に等しい。雨雲は熱する油を雨降らす如くだ。

5.15.4. 益を為すものであったまさにそのものたちが、(今や) 苦痛を与えてくる。蛇の (シューという) 息のようだ、三種の (快い) 風 <sup>119</sup>は。

5.15.5. 話すだけでも、幾分か苦しみは少なくなる。誰に私は話せばよいのか？このことは誰も理解しない。

5.15.6. 私とお前の愛の真髄は、愛しい女性よ、ひとり私の心のみが知っている。

5.15.7. (私の) その心は、常にお前のもとにある。愛の精髓を、これだけ (以上述べたこと) の中に知れ』<sup>120</sup>。

5.15.8 主の言伝てを聞くや、ヴィデーハの王女は、愛に没頭した。彼女は、体に意識がなかった。

---

<sup>118</sup> Cf. PW s.v. s.v. *kālarātri*-; RCM 2.83.5.2; 5.40.8.1 *kālarātri*.

<sup>119</sup> RCM 1.86.c1.2; 1.191.3.1; 3.40.8.1; 7.23.4.1 では、*sītala* 「涼しい」、(*su*)*maṇḍa* 「(非常に) 緩やかな」、*sugamḍha* / *surabhi* 「良い香りのする」という三種の風が挙がる。*Mānasa-pīyūṣa* ad 5.15.3–4, *Ṭippaṇī* 3; *TIVĀRĪ* / *TIVĀRĪ* 1954 s.v. *trividha* 3; CALLEWAERT / SHARMA 2009 s.vv. *triguna-pavana*, *tribidha-pavana*, *tribidha-bayārī*, *tribidha-samīra*, *trividha-pavana*, *trībīdhi-pavana* も同様に説明する。「三種の (*tribidha*) 風」とだけ言及される個所もある：RCM 1.106.3.1; 1.303.4.1; 1.126.3.1; 1.212.8.2; 1.303.4.1; 2.136.8.2; 2.214.7.1; 2.248.6.2; 2.278.4.2; 2.310.6.2; 3.38.9.2; 5.15.4.2; 6.119.7.1; 7.3.10.2; 7.28.3.2。これら三種の風は、上記 RCM の諸箇所では、快いものとして描写される。

<sup>120</sup> *Mānasa-pīyūṣa* ad 5.15.1–2, *Notā* 2; footnote \* ad 5.15.4 *hita* の指摘するように、RCM 5.14.d.1.1, 5.15.1–7 は、*Prasannarāghava* 6.43–44 (ハスマーンがスィーターに伝えたラーマの伝言内容) の翻案である。一方、*Mānasa-pīyūṣa* ad 5.15.1–2, *Notā* 2 が言及する *Hanumannāṭaka* 6.19 (スィーターの台詞) は、直接の翻案元ではないと思われる。

5.15.9 猿は言う：「心で落ち着きを保て、母よ。念想せよ、仕える者に幸を与える方であるラーマを。

5.15.10. 胸中に持ってきたさい、ラグ族の主（ラーマ）の、主としての威力を。私の言葉を聞いて、小心さを捨てなさい。

5.15.d1.1. 羅刹たちの群れは蛾に等しい。ラグ族の主（ラーマ）の矢は火だ<sup>121</sup>。

5.15.d1.2. 母よ、心で落ち着きを保て。羅刹たちは燃えたものと知れ。

## 5.16.

5.16.1 もし、ラグ族の英雄（ラーマ）が、知らせを受け取っていたならば、ラグ族の王（ラーマ）は、遅れることはなかったことでしょう。

5.16.2 ラーマの矢という太陽が昇れば、ジャナカの娘よ、羅刹たちの軍勢という闇はどこに [おられましょうか]。

5.16.3 まさに今、母よ、私は（あなたを）連れて行きましょう<sup>122</sup>。（いやしかしそれは）主の命令（で）はない、ラーマに誓って（決して）<sup>123</sup>。

5.16.4. 何日か（少し）の間、母よ、我慢せよ。（そうしたら、）猿たちと共に、ラグ族の英雄（ラーマ）がいらっしゃるでしょう。

5.16.5. 羅刹たちを殺して、お前を連れてお行きになるでしょう。三つの都城（天空地の三界）で、ナーラダをはじめとする者たちが（ラーマの）栄光を歌うでしょう」。

5.16.6. （スーターは言う：）「息子よ、猿たちは皆あなたと同じである。羅刹たちは非常に<sup>124</sup>力強い戦士たちである。

5.16.7. 私の心には<sup>125</sup>非常な疑いがある」。聞くと、猿は自分本来の体を現した。

---

<sup>121</sup> 同様の文言が RCM 7.14.c2.3-4（シヴァによるラーマへの讃辞）にあり。

<sup>122</sup> 或いは：連れて行こうか。

<sup>123</sup> 或いは：（いやしかしそれは）主の命令ではなく、ラーマに背く行為だ。この問題については、*Mānasa-pīyūṣa* ad 5.16.3-4, *Ṭippanī* 1 (Ka); *TIVĀRĪ* / *TIVĀRĪ* 1954, s.vv. *duhāi*, *dohāi* を参照。

<sup>124</sup> *ati* とそれが掛る形容詞の間に名詞が挟まるという語順になっている。

<sup>125</sup> 或いは：私には、心の中に

5.16.8. 黄金の山（メール山）の恰好をした体を持ち<sup>126</sup>、戦において恐れさせる、非常に力のある勇士である。

5.16.9 スーターの心には<sup>127</sup>、その時、信頼が生じた。それから、小さい姿を、風神の息子は取った。

5.16.d1.1. （ハヌマーンは言う：）「聞け、母よ。枝の獣（猿）は、力・知性の点で大きくはない<sup>128</sup>。

5.16.d1.2. 主の威力によって、非常に小さい蛇がガルダを食べる」。

## 5.17.

5.17.1 （スーターの）心に満足が [生じた]、猿の、帰依・威力・威光・力を含んだ言葉を聞くや。

5.17.2. （スーターは）祝福を与えた。（ハヌマーンが）ラーマにとって愛しい者であると知った [から]：「我が子よ、力と良い習わし（徳行）の宝庫となりなさい。

5.17.3. 不老・不死に、美德の宝庫に、息子よ、なりなさい。ラグ族の統領（ラーマ）は、大いに愛をお掛けなされよ<sup>129</sup>」。

5.17.4. 「主は慈悲をお掛けなされよ<sup>129</sup>」 [と] このように耳で聞いて、ハヌマーンは際限ない愛に没頭した。

5.17.5. （ハヌマーンは）何度も何度も、（スーターの両）足に、頭を下げた<sup>130</sup>。猿は両手を合わせて言葉を言った：

---

<sup>126</sup> RCM 5.0.ś3.1.1. *svaṛṇaśailābhadeha-* と同様の外心複合語と解釈してこう訳した。この行の文言は、殆どサンスクリット語に等しいといってよい。或いは、前半を一文と解して：体は、黄金の山（メール山）の恰好をしている

<sup>127</sup> 或いは：スーターには、心において

<sup>128</sup> つまり：枝の上を動き回る卑しい獣に過ぎない猿の力・知性は大きくない。

<sup>129</sup> *karahum̐* を、pres.imper. 3.pl. (cf. MCGREGOR 1968, p. 178f.; SNELL / TIWARI 2023, p. 46) < Apa. *kara-hum̐* (cf. TAGARE 1948, pp. 300f., 306) と解した。SAKSENA p. 266f. §308; NAGASAKI 2023, p. 43 には、pres.imper. 3.pl. の語尾として *-him̐* のみが挙がるが、これは、形態論的には pres. ind. であるものが、modal な用法 (cf. Modern Standard Hindī “subjunctive”) で用いられたものであろう。

<sup>130</sup> *nāṣi* p.p. 3.sg. につき、本稿注 30 を参照。Padmāvata や UVP (CHATTERJI 1953, p. 60f., §75 (ii)) でも、*-ṣi* p.p. 3.sg. に軽蔑のニュアンスは読み込めない。

5.17.6. 「今や為すべきことを為し終えた状態に私はなりました、母よ。貴方の祝福は、必ずや実現すると広く知られております。

5.17.7. お聞きください、母よ、私には非常な空腹があります、木に美しい果実がかかっているのを見て<sup>131</sup>」。

5.17.8. (スィーターは言う：)「聞け、息子よ。非常に優れた、強力な戦士である羅刹たちが森の警護をしています」。

5.17.9. (ハヌマーンは言う：)「彼らへの恐れは、母よ、私にはありません、もしあなたが心の中で快く認めてくださるのでしたら」。

5.17.d1.1. 猿が知性・力に長けているのを見て、ジャナカ王の娘(スィーター)は言った：「行きなさい。

5.17.d1.2. ラグ族の主(ラーマ)の両足を心に保って、我が子よ、甘い実を食べなさい」。

## 5.18.

5.18.1. (ハヌマーンは) 行った、頭を下げて。(彼は) 庭に入った。(彼は) 果実を食べた。(彼は) 木を倒し始めた。

5.18.2. そこには、多くの警備する兵士たちがいた。或る者たちを(ハヌマーンは) 殺した。或る者たちは行って呼んだ(助けを訴えた)：

5.18.3. 「主よ、一匹の力強い猿がやって来ました。彼は、アショーカ樹の庭園を荒らしました。

5.18.4. 彼は果実を食べました。そして、木々を引っこ抜きました。警護の者たちを次々粉碎して地面に投げました」。

5.18.5. (それを) 聞いて、ラーヴァナは、様々な戦士たちを派遣した<sup>37</sup>。彼らを見て、ハヌマーンは咆哮した。

5.18.6. 全ての羅刹たちを猿は殲滅した。何人かは去った、(助けを) 呼び叫びつつ、半殺しになって。

5.18.7. そこで、彼(ラーヴァナ)は、アクシャ王子を派遣した<sup>37</sup>。(アクシャは) 行った、数限りない、優れた戦士たちを共に引き連れて。

---

<sup>131</sup> 或いは、*lāgi* を前半の述語と解すると：私は非常な空腹を覚えました、木に美しい果実を見て

5.18.8. (ハヌマーンは、アクシャの) やって来るのを見て、木を掴んで、威嚇した。(彼は) 彼 (アクシャ) を倒すと、大音声で咆哮した。

5.18.d1.1. (ハヌマーンは) 或る者たちを殺した。或る者たちを粉碎した。或る者を、掴まえて、塵と一緒にした (滅ぼした)。

5.18.d1.2. 或る者たちは、それから、行って、呼び掛けた (助けを訴えた): 「主よ、猿の力は大きいです<sup>132</sup>」。

### 5.19.

5.19.1. 息子の殺害を聞いて、ランカーの主 (ラーヴァナ) は、怒った。

(ラーヴァナは) 力強いメーガナーダ (=インドラジット) を派遣した<sup>37</sup>。

5.19.2. (ラーヴァナは言う: ) 「(猿を) 殺すな、息子よ。彼を縛れ<sup>133</sup>。猿を調べるべし、どこの者であるか」。

5.19.3. 比類なき戦士であるインドラジット (=メーガナーダ) は行った。

(インドラジット=メーガナーダは、) 弟の死を聞いて怒りが生じた。

5.19.4. 猿は見た: 容赦ない戦士がやって来た。(その戦士は怒りで歯噛みして) カタカタ音を立てて、咆哮した、そして走った。

5.19.5. (猿は) 非常に大きい一本の木を引き抜いた。ランカーの主の息子 (メーガナーダ=インドラジット) を戦車から離れた (戦車を失った) ものとした。

5.19.6. 彼 (メーガナーダ=インドラジット) と共にいた大戦士たちを、猿は自分の手足で何度も掴んで粉碎する。

5.19.7. (ハヌマーンは、) 彼ら (大戦士たち) を倒して、彼 (メーガナーダ=インドラジット) と戦った。衝突した、両者は、あたかも象たちの王二頭のように。

5.19.8. 拳を殴りつけて、彼 (ハヌマーン) は行って木に登った。彼 (メーガナーダ=インドラジット) に一瞬失神がやって来た。

---

<sup>132</sup> 或いは、*balabhūri* を複合語と解するならば: 猿は力が大きいです

<sup>133</sup> 未来における時の指定が含意される、*fut. imper.* が用いられている。なお、古アワディー語の *fut. imper.* と意味・形態を同じくするものが、既に UVP の言語で用いられている (CHATTERJI 1953, p. 59, §74 (ii)) ことは重要である。

5.19.9. (メーガナーダ＝インドラジットは) 再び立ち上がって、多くの幻術をなした。

(しかし、) 打ち負かされ得ない、風神の子 (ハヌマーン) は。

5.19.d1.1. 彼 (メーガナーダ＝インドラジット) はブラフマーの矢をつがえた。猿は心で考えを為した：

5.19.d1.2. 「もし私がブラフマーの矢に敬意を払わなければ、(ブラフマーの矢の) 際限ない偉大さは消えてしまう」。

## 5.20.

5.20.1. 彼 (メーガナーダ＝インドラジット) は、猿に対してブラフマーの矢を打った。(ハヌマーンは木から) 落ちていく時も<sup>134</sup>、軍勢を殲滅した。

5.20.2. 彼 (メーガナーダ＝インドラジット) は見た：猿は失神状態になった。(メーガナーダ＝インドラジットは) 蛇縄<sup>135</sup>によって、(ハヌマーンを) 縛った。(そして、) 連れて行った。

5.20.3 聞きなさい、バヴァーニーよ——その者の名を唱えれば、知者たちが生起 (輪廻) の束縛を断ち切る、

5.20.4 その者の使者が、どうして束縛の下に来た<sup>136</sup>だろうか。主の仕事のため、猿は、(自分を) 縛らせたのだ<sup>137</sup>。

5.20.5. 猿の捕縛を聞いて、羅刹たちは走ってきた。見世物のために、宮廷<sup>138</sup>に皆がやって来た。

5.20.6. 猿が行くと、十の顔を持つ者 (ラーヴァナ) の宮廷<sup>138</sup>が見えた。(ラーヴァナの) 支配者としての非常な威力は、一切述べられ得ない。

---

<sup>134</sup> pres. 分詞が obl.sg. f. *bāra* と一致している (e.g. 2.102.8; 6.76.16; 7.18.2)。

<sup>135</sup> *nāgapāśa-* については、EMENEAU 1960, pp. 294–297; *VālRām* 6.34.30; 6.35.8 (cf. GOLDMAN / SUTHERLAND GOLDMAN / VAN NOOTEN 2009, pp. 777–779) を参照。RCM では、メーガナーダが用いる描写がある (RCM 5.20.2; 6.73.10–13; 7.58.d1)。RCM 6.73.10.2 (cf. *VālRām* 6.35.8) の描写によれば、*nāgapāśa-* を矢として発射すると、それが蛇に変化して相手を縛る。

<sup>136</sup> 或いは：来る

<sup>137</sup> RCM 5.20.3–4 は、RCM 6.73.d1; 7.58.d1 とパラレルになっている。

<sup>138</sup> *sabhā-* は「宮廷・王のいる会議場、謁見の間」などと訳しうる。

5.20.7. 手を合わせて、諸方位守護神たちは畏まっている。(ラーヴァナの) 眉を見つめている<sup>139</sup>、全員が、恐れをなして<sup>140</sup>。

5.20.8. (ラーヴァナの) 威力を見て(も)、猿の心に<sup>141</sup>恐れがない。あたかも蛇たちの群れの中で、ガルダが恐れを持たないように。

5.20.d1.1. 猿を見て、十の顔を持つ者(ラーヴァナ)は、哄笑した、誹謗を述べて。

5.20.d1.2. (ラーヴァナは、) 息子の殺害を想起した。すると心に悲しみが生じた。

## 5.21.

5.21.1. ランカーの主(ラーヴァナ)は言う：「お前は誰なのか、猿よ。誰の力(権限)で、森を破壊したのか。

5.21.2. 一体、お前は耳で聞いていないのか、私のことを？私は、悪漢よ、お前が何も恐れを持っていないのを見る。

5.21.3. いかなる罪でお前は羅刹たちを殺したのか。言え、悪漢よ、お前には生命の差し障り(妨害)がないのか<sup>142</sup>」。

5.21.4. (ハヌマーンは答える：)「聞け、ラーヴァナよ、その者の力を得て、幻力が、梵卵たちの集まりを作るところの、

5.21.5. その者の力によって、ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァが、[世界を] 守り、創出し<sup>143</sup>、取り去るところの、——十の頭を持つ者よ、

5.21.6. その者の<sup>144</sup>力により、頭で、千の顔を持つ者(シェーシャ蛇)が、世界卵<sup>145</sup>を、山々と森ともども保持しているところの、

---

<sup>139</sup> 或いは：… 畏まっている、(ラーヴァナの) 眉を見つめてつつ、…

<sup>140</sup> つまり：王の眉の上げ下げに注目してその機嫌を伺っている。

<sup>141</sup> 或いは：猿には、心に

<sup>142</sup> 諸訳では、命を失う事への恐れはないのか、の意に理解されている。或いは、命を奪うことに躊躇はないのか、を意味する可能性もあるか。

<sup>143</sup> 「守り」「創出し」を述べる順序が逆になっているが、無論、ブラフマーが創出を、ヴィシュヌが維持を、シヴァが帰滅を司る。

<sup>144</sup> 関係代名詞 *gen.sg. jā* は、RCM 3.15.5.2; 5.21.6.1 にみられる。

<sup>145</sup> Cf. PW vol. 5, *aṇḍakoṣa-*.

5.21.7. 神々の救い手として、あなたのような悪漢たちに教えを与える者として、様々な肉体を纏う者<sup>146</sup>、

5.21.8. 硬いハラ（シヴァ）の弓を折って、お前<sup>147</sup>ともども王たち一団の思い上がりを打ち砕いた者、

5.21.9. カラ、ドゥーシャナ、トリシラス、そしてヴァーリン——皆比類なき力に満ちている——を殺した [者]、

5.21.d1.1. その力のごく僅かによって、あなたが動・不動（の全世界を）全て勝ち得たところの、

5.21.d1.2. その者の使者です、私は、——その者の愛しい女性をあなたが奪って連れて来たところの<sup>148</sup>。

## 5.22.

5.22.1 私は、あなたの主（王）としての威力を知ってます：サハスラバーフ（「千の腕を持つ者」）と [あなたとに] 戦いが起こりました<sup>149</sup>。

5.22.2 [あなたは、] 戦いをヴァーリンとなして、名声を得ました<sup>149</sup>。  
[ラーヴァナは、] 猿の言葉を聞いて、笑ってあしらった。

5.22.3. （ハヌマーンは続ける：）「果実を私は食べました。主（王）よ。  
（私は）空腹を覚えていました。猿の本性によって私は木を倒しました。

<sup>146</sup> Cf. RCM 1.121.6–d1.

<sup>147</sup> *tōhi* (ed. CAUBE, ed. GUPTA, ed. MIŚRA) 「お前」 或いは *tēhi* (ed. *Mānasa-pīyūṣa*; ed. VĀJAPEYĪ) 「それ（弓）」。  
スィーターのスヴァヤンヴァラの会場で、ラーヴァナとバーナアスラは弓を見ただけで帰った（RCM 1.250.2）とか、弓に触れることもできず（1.256.3.）に敗北した（1.292.7–8）旨が書かれていることから、ラーヴァナはスヴァヤンヴァラの会場にいたことになるため、*tōhi* 「お前」の読みで意味に問題を生じない。

<sup>148</sup> この長い一文では、ラーマの名を明示しないことで、逆説的に強調している。概ね、ラーマの神としての面（RCM 6.14.d1–15.d1 [ラーマの *viśvarūpa*-] とも比較のこと）から、人間としての面へ、という順で描写される。最重要事項であるスィーターの話は、主文の後に、末尾に置かれて強調される。

<sup>149</sup> わざわざラーヴァナが戦って敗北した二例を挙げて当てこすり、意図的に挑発している。言及されている物語の詳細は、*Mānasa-pīyūṣa ad loc.*, VĀJAPEYĪ 1972, *ad loc.*, footnote † を見よ。

5.22.4. 全ての人にとって、身体は極めて愛しいものです、主よ。悪しき道を行く者たちが、私を打つのです。

5.22.5. 私を打った者たちを、私は打ちました<sup>150</sup>。そのことで（それが理由で）、あなたの子（メーガナーダ＝インドラジット）は、（私を）縛りました。

5.22.6. （しかし、）私には、縛られたことへの恥は全くありません。私は、自分の主の仕事をすることを望んでいます。

5.22.7. 私はお願いします、手を合わせて、ラーヴァナよ：聞いて下さい、高慢さを捨てて、私の教えを。

5.22.8. 自分の一族のことを考えてみてください。錯誤を捨てて、信徒の恐れを取り去る方に帰依してください。

5.22.9. アスラたちと神々を、動不動（の全世界）を食らうカーラ（死神・破壊神としての「時」）<sup>151</sup>が（でさえ）、その者への恐れで非常に恐れる、

5.22.10. その者と敵対を決してすべきではありません。私の言うことに従って、ジャナカ王の娘（スーター）を返すべきです。

5.22.d1.1. 頭を垂れて庇護を求める者を守る方です、ラグ族の統領（ラーマ）は。慈悲の海です、カラの敵（ラーマ）は。

5.22.d1.2. 庇護を求めて頼りに行けば、主（ラーマ）は（あなたを）守ってくださるでしょう、あなたの罪を忘れて。

## 5.23.

5.23.1. ラーマの蓮のような足を胸に保持してください。ランカーの不動の王権をあなたは行使してください。

5.23.2. 聖仙プラスティヤ（ラーヴァナの祖父）の名声は、汚れなき月です。その月の中で、汚れ<sup>152</sup>にならないでください。

5.23.3. ラーマの名なしには、言葉は美しくありません。高慢と妄執を捨てて考えてみよ。

---

<sup>150</sup> 或いは：打ち殺しました。

<sup>151</sup> Cf. HOPKINS 1915, p. 247b s.v. Kāla.

<sup>152</sup> 月の模様のことを汚れ・染みと呼びならわしている。

5.23.4. 衣を欠いては、美しく輝きません、神々の敵よ、全ての装飾品に飾られた選りすぐりの女性は（であつても）。

5.23.5. ラーマに背く者の繁栄、主としての威光は、去って行ってしまう。得られたものも、得られなかったことになる<sup>153</sup>。

5.23.6. 水がある源を持たない河たちは、雨が降り止むとすぐに乾上がる。

5.23.7. 聞け、十の首を持つ者（ラーヴァナ）よ、私は言う、しかと誓つて：ラーマに背けば<sup>154</sup>、救い手は誰もいない。

5.23.8. 千のシヴァ・ヴィシュヌ・ブラフマーも、お前を守ることはできない、ラーマの敵対者〔であるお前〕を。

5.23.d1.1. 妄執がその根（根本的原因）<sup>155</sup>であり、多くの苦痛を与える、タマス（闇質）である高慢を捨ててください。

5.23.d1.2. 帰依してください、ラグ族の主、慈悲の海、神であるラーマに」。

## 5.24.

5.24.1. 猿が非常に益になる、信愛・分別・離欲・道理を含む言葉を話したにもかかわらず、

5.24.2. 笑って言った、大きな高慢を持っている者（ラーヴァナ）は：「我々は見つけたぞ、大知者である師である猿を。

5.24.3. 死が近づいて来ている、悪い奴よ、お前に<sup>156</sup>。お前は、最も卑しい奴よ、私に教えを垂れ始めた」。

5.24.4. 「（その言葉の）逆になるでしょう」〔と〕ハヌマーンは言う、「お前には考えの錯誤がある。はっきりと私は分かった」。

---

<sup>153</sup> 後半の解釈は難しい。解釈可能性については、KELLOGG 1893, p. 489 §831; *Mānasa-pīyūṣa* ad loc., *Ṭippanī* 3; 諸訳を参照。

<sup>154</sup> 或いは：ラーマに背く者には

<sup>155</sup> *mohamūla-* が内心複合語「妄執の根（根本的原因）」か、或いは RCM 2.92.8.2 と同様に外心複合語「妄執がその根（根本的原因）である」かは、厳密には決められない。

<sup>156</sup> RCM 5.24.3.1 とかなり類似した文言が、5.41.2.2（ラーヴァナによるヴィビーシャナへの台詞）に見られる。

5.24.5. 猿の言葉を聞いて、(ラーヴァナは) 大いに怒った：「はやく (お前たちは) 奪わぬか、愚か者の命を」。

5.24.6. 聞くや、羅刹たちは、殺さんと走ってきた。大臣たちと共に、ヴィビーシャナがいらっしゃった。

5.24.7. (ヴィビーシャナは) 頭を下げて、大いに歎願して [言った：]  
「道理に反することです。使者は殺すべきではありません。

5.24.8. 何か別の罰をなすべきです、主よ」。皆は言った：「素晴らしい助言です<sup>157</sup>、兄弟よ」。

5.24.9 聞くや、笑って言った、十の首を持つ者 (ラーヴァナ) は：「肢体を破壊して<sup>158</sup>猿を送り返す<sup>37</sup>のがよい。

5.24.d1.1. 猿には<sup>116</sup>、尻尾に対して愛着 (プライド) がある。皆に私は説明して言う<sup>159</sup>：

---

<sup>157</sup> 或いは：(その) 助言は素晴らしい

<sup>158</sup> *aṃgabhaṃga* が名詞「体を破壊すること、不具にすること」か、形容詞 (外心複合語)「体を破壊された、不具の」か決められない。後者の場合の訳は、「不具にして...」となる。

使者は殺してはならないが、身体刑を科してもよいという考え方は、本個所の大元となった *VālRām* 5.50.5–51.4 (cf. ROCHER 2012, p. 230; GOLDMAN / SUTHERLAND GOLDMAN 1996, p. 496) において、より詳細に提示される。使者は殺してはならないという規則は、他に、MBhār 12.86.25; MBhār 13, critical ed. vol. 17-2, p. 953, Appendix I, no. 15, l. 1342; *VālRām* critical ed., p. 932, Appendix I, No. 10, 38–40\* (critical ed. の 6.13 と 6.14 の間、= ed. PAṆŚĪKAR 6.20.18) ; *ArthaŚāstra* 1.16.13–17; *GautamaDharmaSūtra* 10.18; *Jātaka* no. 547, *Gāthā* 322, ed. PTS, vo. 6, p. 528 ~ *Kathāsaritsāgara* ed. *Nirṇaya-Sāgara* 1915, 8.3.166cd ~ *Triṣaṣṭīśālākāpuruṣacaritra* 4.1 (tr. JOHNSON, vol. 3, p. 23); 9.3 (tr. JOHNSON, vol. 5, p. 387) などにも述べられる。MBhār 5.86.17–18 でもこの規則が前提にあるようである。そうはいつでも現実には、*ArthaŚāstra* 1.16.32 にあるように、使者が相手にとって好ましくない王勅を伝える場合などには、捕縛・殺害の危険があった (e.g. MBhār 5.86.13–18; 5.127[.4–7 etc.]; *VālRām* 上述個所の他に 7.13.34–38; 7.59.18; *Triṣaṣṭīśālākāpuruṣacaritra* 9.3 [tr. JOHNSON, vol. 5, p. 387])。後の RCM 5.52.3 とも比較のこと。

[\*] 39–40 と同内容が、MBhār 5.70.7cd にもあり (ROCHER 2012, p. 230)。]

<sup>159</sup> 或いは、ed. MĪŚRA *kahaum̐* に対する異読 *kahyau*, *kahyō* (cf. GUPTA 1949b, p. 413f.) を採ると、訳は：「... がある」—皆に彼は説明して言った—「布を...」

5.24.d1.2. 布を油に浸して、(その) 布を(尻尾に) 結わえ付けて、それから(君たちは) 火を付けよ。

## 5.25.

5.25.1. 尻尾を欠いた状態で猿はそこ(ラーマのもと)に行くであろう。そうすると、悪漢は、自分の主を連れてやってくるであろう。

5.25.2. (猿が) 大いに称賛した、そのお方<sup>160</sup>の(主としての威)力を、私は見てやろう」。

5.25.3. 言葉を聞いて、猿は心の中で微笑んだ：「サラスヴァティーが助力者になった<sup>161</sup>、[と] 私は分かった」。

5.25.4. 愚か者である羅刹たちは、ラーヴァナの言葉を聞いて、まさにその用意を用意し始めた。

5.25.5. 街には、衣・グリタ(ギー)・油は残っていなかった<sup>162</sup>。尻尾は大きくなった。猿は、遊びをなした<sup>163</sup>。

5.25.6. 街の住人たちは、見世物へとやって来た。彼らは(ハヌマーンを)足で蹴る。彼らは多くの嘲笑をする。

5.25.7. 太鼓たちが鳴る。皆は(嘲って)手を叩く<sup>164 165</sup>。(彼らはハヌマーンを)街ちゅう引き回し、そして尻尾に火をつけた。

5.25.8. 火が燃えているのを見て、ハヌマーンは、すぐさま、極めて小さい姿となった。

---

<sup>160</sup> *tinha* obl.pl. は、honorific pl. の価値で用いられており、皮肉の意図があるものと思われる。

<sup>161</sup> 言葉の女神であるサラスヴァティー (cf. LUDVIK 2007) がラーヴァナに干渉して、自分に都合の良い言葉を語らせてくれた、という含意がある、*Mānasa-pīyūṣa* ad loc. 訳中の括弧中の補足説明と RCM 1.177.8 を参照。

<sup>162</sup> VAUDEVILLE 1955, p. 227, ll. 1–3 は、本箇所 RCM 5.25.5.1 を、Tulasīdāsa が独自に付け加えたディティールであるとする。

<sup>163</sup> つまり：猿は、尻尾を大きくするという遊びをなした。

<sup>164</sup> 嘲笑の身振りとしての拍手 (VARMMĀ 1962–1966, s.v. *tālī*, *muhā*°; ŚYĀMASUNDARADĀSA et al. 1965–1975, s.v. *tālī*<sup>1</sup>, *muhā*°; 古賀／高橋 2006 s.v. *tālī*<sup>1</sup>) をいう。

<sup>165</sup> RCM 5.25.6.2–7.1 では、動詞で始まる文が連続する。

- 5.25.9. (捕縛から) 抜け出て<sup>166</sup>、(ハヌマーンは) 金の最上階の部屋たちに登った。羅刹たちの妻たち<sup>167</sup>は、恐れをなした。
- 5.25.d1.1. ハリに動かされて、その時、49 の風たちが動いた (吹いた)<sup>168</sup>。
- 5.25.d1.2. (猿は) 高笑いをして咆哮した。猿は大きくなって空に触れる。

## 5.26.

- 5.26.1. (ハヌマーンは) 体が巨大である。(しかし、) 非常に軽々と、館から館へと走って登る<sup>169</sup>。
- 5.26.2. 街は燃える。人々は慌てふためいた。恐ろしい、幾千万もの火焰が襲い掛かる。
- 5.26.3. 「お父さん！お母さん！ああ」—— [と] 叫び声が聞こえる —— 「この時に、誰が私たちを助けてくれるというのでしょうか。」
- 5.26.4. 私たちが言ったように、これは猿ではない。猿の姿を取っている誰か神だ。
- 5.26.5. 正しい者を侮ることの結果はこのようだ。街は、主 (守護者) のいない [街] のように燃えている<sup>170</sup>。
- 5.26.6. (ハヌマーンは) 都市を燃やした、一瞬のうちに。唯一ヴィビーシャナの家だけは、[燃やさ] なかった。
- 5.26.7. (ハヌマーンは) 火を創造した者の使者だ。彼は、それ故、燃えなかったのだ、山の娘 (パールヴァティー) よ。
- 5.26.8. (ハヌマーンは、) 全ランカーを、めちやくちやにひっくり返して、燃やした。そして、(ハヌマーンは、) 海の中へと跳びこんだ。

---

<sup>166</sup> *√nibuk* は、Pkt. adj. *ni(b)bukka-* (PSM s.vv.) 由来の *deadjektival verb* と思われる、更に Pkt. *ñimmukka-* < *\*nirmukna-* に遡りうる (TURNER no. 7373.2.)。

<sup>167</sup> 羅刹の女性たちは、高樓の最上階の部屋にいるものと思われる。

<sup>168</sup> おそらく、この風たちのせいで、ハヌマーンがつけた火がさらに燃え広がったと思われる。

<sup>169</sup> 或いは：(ハヌマーンは) 体が巨大だ (が、) 非常な軽さがある / (ハヌマーンの) 巨大な体には非常な軽さがある。

<sup>170</sup> ここでは短くしか描かれぬ、ハヌマーンによるランカー放火の際の住民の混乱は、*Kavitāvalī* 第5巻においては非常に詳細に描写される。

5.26.d1.1. (ハヌマーンは、) 尻尾を (海水に浸して) 消火して、疲れを取って、再び小さい姿を纏って、

5.26.d1.2. ジャナカの娘 (スィーター) の前に立った、手を合わせて。

## 5.27.

5.27.1. (ハヌマーンは言う：) 「母よ、私に何かしるし (となる品) をください、ラグ族の統領 (ラーマ) が私にくれたような」。

5.27.2. 頭頂の宝石を外して、その時、(スィーターはハヌマーンに) 与えた。(それを) 喜びとともに、風神の息子 (ハヌマーン) は受け取った。

5.27.3. (スィーターは言う：) 「あなたは (ラーマに) 言いなさい<sup>171</sup>、息子よ、こ (次) のように、私の敬意を<sup>172</sup>：『全ての点で主は<sup>173</sup>望みが満たされた者<sup>174</sup>です」。

5.27.4. (しかし、) 「惨めな者に対して慈悲深い方」という (ご自身の) 称号<sup>175</sup>を想起して<sup>176</sup>、取り去ってください、主よ、私の重い苦難を』。

<sup>171</sup> 未来における時の指定が含意される、fut. imper. が用いられている。

<sup>172</sup> *pranāma* √*kah* 「敬意を伝える、挨拶を送る」という表現は、RCM 2.150.6.1; 2.151.d1.1; 5.27.3.1 に見られる。

<sup>173</sup> 或いは：主よ、(あなたは)

<sup>174</sup> ラーマの形容句で、人間個人としての欲望を持たないことを謂う。

<sup>175</sup> *birada-*, *birida-*, *biruda-* (cf. MAYRHOFFER 2001, s.v. *viruda-*) の意味としては、[1] 「賛辞」の類 (PW, pw s.v. *viruda-*; HANDIQUI 1956, p. 609 s.v. *bi(vi)ruda-*; TIVĀRĪ / TIVĀRĪ 1954 s.vv. *birada-*, *birida-*, *biruda-* など)、および、[2] 「称号、称える呼び名、美称」(SCHMIDT 1928 s.vv. *virada-*, *viruda-*; ŚYĀMASUNDARADĀSA et al. 1965–1975 s.v. *virada*<sup>1</sup> 意味 1; HANDIQUI 1956, p. 609; SCHARFE 1989, p. 79 “titles”; SCHMIEDCHEN 2014, p. 227, n. 56, pp. 228, 352, 365 など) がある。厳密には区別しがたい場合もあるものの、[1] 「賛辞」の意味は、例えば RCM 1.262.d1.1 などに見られる。[2] 「称号、称える呼び名」という意味は、本箇所 RCM 5.27.4 およびその類似文 RCM 7.18.3、更に RCM ed. GUPTA 6.94.1.2 にあてはまる。上述の RCM の用例は全て、ラーマが自らの称号に忠実に振るまうことをいう文脈にある。この意味が想定される更なる個所としては、Gītāvalī 5.36.1; VinayaPatrikā 99.1, 230.1, 148.3, 30.2 などがある。

<sup>176</sup> √*saṃ*(/ṁ)*bhār* (TURNER no. 13059 [cf. no. 12962.2]) < (\**saṃbhālaya-te* <) Skt. \**saṃsmāraya-te* middle causative(※) 「自分自身をして (すっかり) 想起せしめ

5.27.5. 息子よ、インドラの息子の話<sup>177</sup>を聞かせなさい<sup>171</sup>。矢の威力<sup>177</sup>を、主（ラーマ）に言い聞かせなさい<sup>171</sup>。

5.27.6. 一ヶ月の期日以内に主（ラーマ）がやって来<sup>178</sup>なかったら、彼（主ラーマ）は、私を生きたままでは得ない。

5.27.7. 言え、猿よ：如何にして私は命を保とうか。あなたも、息子よ、今や去ると<sup>179</sup>言っている。

5.27.8 お前を見て（に会って）、（私は）胸が涼しくなった（心が鎮まった）<sup>180</sup>。（しかし）それからまた、私には、まさにその（以前と同じ<sup>181</sup>）昼が、まさにその（以前と同じ）夜が [ある]」。

5.27.d1.1. （ハヌマーンは、）ジャナカの娘（スィーター）を慰めて、多くのやり方で励ました。

5.27.d1.2. （スィーターの）蓮のような足に頭を下げて、猿は、ラーマのもとへ行った。

## 5.28.

5.28.1. （ハヌマーンは、）進む際に、大音声で重々しく咆哮した。（それを）聞いて、羅刹の妻たちは胎児を流産した<sup>182</sup>。

---

る」=「(すっかり) 想起する」。同様の例として、Chāndogyopaniṣad 6.12.2; 6.13.2 *nibhālayase* (cf. TURNER no. 7228, 9474) < Skt. \**ni smārayase* MAYRHOFFER 1996, s.v. *BHAL*) を参照。 (※) Cf. SAKAMOTO-GOTO 1993; 阪本（後藤）1996。<sup>177</sup> 鳥の姿をとってスィーターを攻撃した Jayanta をラーマがブラフマーストラの威力を付与されたダルバ草の矢で射た話（RCM 3.1-2 で詳しく語られた）に、スィーターは言及している。スィーターをつついた鳥に対してさえブラフマーの矢を放ったのに、なぜスィーターをつつくどころか拉致した羅刹に対して同じことをしないのか（cf. VālRām 5.36.10-37）、という含意がある。

<sup>178</sup> pres.ind. 3.sg. *āvā* か、p.p. dir.sg.masc. *āvā* か決められない。

<sup>179</sup> √*kah* 「言う」が *-na* inf. を目的語に取って「～すると言う」を意味する例は、他に RCM 2.30.5.1 にも見られる（SNELL / TIWARI 2023, p. 55）。或いは、「今は去らねばならない」とも可能性としては考えられるか。

<sup>180</sup> つまり：苦しみの火が鎮まった。Cf. RCM 2.99.5.2; 2.45.8.2.

<sup>181</sup> つまり：以前と同じ、苦しみの

<sup>182</sup> RCM 5.36.7 で再びこのことに言及される。Cf. RCM 1.182.5.2; 1.279.d1.1.

- 5.28.2. (ハヌマーンは、) 海を飛び越えて、こちら側の岸にやって来た。  
キラキラという (歓) 声<sup>183</sup>を猿たちは発した。
- 5.28.3. 皆は、ハヌマーンを見て歓喜した。新たな誕生を猿たちはその時  
感じた：
- 5.28.4. 「(ハヌマーンの) 顔は喜んでいる。体は、威光で輝いている<sup>184</sup>。  
彼は成し遂げたのだ、ラーマチャンドラの仕事を！」。
- 5.28.5. (猿たち) 全員が (ハヌマーンに) 会った。(彼らは) 非常に幸せ  
になった、  
喉が渇いている魚が、水を得るがごとく。
- 5.28.6. (猿たちは、) 喜んで、ラグ族の統領 (ラーマ) のもとへと出発し  
た、新しい話を尋ね、語りつつ<sup>185</sup>。
- 5.28.7. すると、マドゥの森 (蜜の森) の内側へと皆はやって来た。(皆は)  
アンガダの同意のもと、甘い果実たちを食べた。
- 5.28.8. 警備兵たちが制止し始めた時、拳の打撃を打ちつけるや、(警備兵  
たち) 皆は逃げた。
- 5.28.d1.1. 彼ら (警備兵たち) 皆は、行って (助けを) 訴えた<sup>186</sup>：「園を荒  
らしています、王太子 (アンガダ) が」。
- 5.28.d1.2. (それを) 聞いて、スグリーヴァは喜ぶ：「猿たちは、主の仕事  
をなし遂げて戻って来たのだ。

## 5.29.

- 5.29.1. もしスィーターの消息を得ていなかったなら、(彼らは) マドゥの  
森 (蜜の森) の果実たちを食べることができるだろうか」

<sup>183</sup> この *sabada kilakilā* という語順は、逆順である。通常は、複合語  
\**kilakilāsabada* (Skt. *kilakilāśabda-*, cf. PW s.v. *kilakila*- 3) が期待される。

<sup>184</sup> 或いは：体には、威光が輝いている。

<sup>185</sup> 或いは、後半を一文と解して：(猿たちは、) 新しい話を尋ね、語っている。

<sup>186</sup> *√pukār* の過去分詞は、RCM においては、自動詞型の一致を示す：RCM  
1.82.8.1; 1.186.c4.2; 1.276.8.1; 5.18.2.2; 5.18.d1.2; 5.28.d1.1; 7.12.4.2。一方、Hindī  
では、他動詞型の一致を示す：e.g. RCM 5.28.d1.1 tr. ŚYĀMASUNDARADĀSA: *una  
saba rakhavāloṃ ne ... jā pukārā ki ...*

- 5.29.2 (と) このように王(スグリーヴァ)は心のなかで考える。猿たちが、一団を伴ってやって来た。
- 5.29.3. (猿たち) 皆はやって来て、(スグリーヴァの) 足に頭を下げた。猿たちの主(スグリーヴァ)は皆に、非常な愛をもって、会った。
- 5.29.4. (スグリーヴァは、猿たちの) 息災を尋ねた。(猿たちは答える：) 「(私たちには) 息災 [があります]、(あなたの) 足を見て。ラーマの慈悲により、仕事が特に(首尾よく) <sup>187</sup>成し遂げられました。
- 5.29.5. 主よ、ハヌマーンは仕事を成し遂げました。(ハヌマーンは)、猿たち全員の命を守りました <sup>188</sup>」。
- 5.29.6. (その言葉を) 聞いて、再び彼(ハヌマーン)に会った。(スグリーヴァは、) 猿たちと一緒に、ラグ族の統領(ラーマ)のもとに行った。
- 5.29.7. ラーマは、猿たちが仕事をなし終えて戻って来るのを見た時、心に特別な喜びが [生じた]。
- 5.29.8. 二人の兄弟は、水晶岩 <sup>189</sup>に座っていた。全ての猿たちは、(その) 両足へと行ってひれ伏した。
- 5.29.d1.1. 愛とともに皆を抱擁なさった、慈悲の塊であるラグ族の主(ラーマ)は。
- 5.29.d1.2. (ラーマは、猿たちに) 息災を尋ねた。(猿たちは答える：) 「主よ、今や(私たちには) 息災 [があります]、(あなたの) 蓮のような足を見て」。

## 5.30.

---

<sup>187</sup> 或いは：特別な仕事が

<sup>188</sup> RCM 4.22.8 (cf. 4.26.1–6) で、猿王スグリーヴァは、猿たちにスーターの探索に行くよう命じ、一か月の期日以内にスーターの居所を見つけられずに戻ってきたら死刑にする、と宣言した。

<sup>189</sup> *phaṭikasilā* 「水晶岩」(Skt. *sphaṭikaśilā*-) とは、チットラクートの森の中でラーマとスーターとが(RCM 3.1.4)、またラーマとラクシュマナとが(RCM 4.13.6; 5.29.8 [本箇所]) 座としていた岩である。Gitāvalī 2.44 (*phaṭikasilā mṛdu bisāla ...*)にあるその美しい描写(*Mānasa-pīyūṣa* ad 3.1.3–4, *noṭa* 2, (ga))によれば、マンダーキニー川のそばにある。

- 5.30.1. ジャーンバヴァントは言う：「聞け、ラグ族の王（ラーマ）よ。その者に、主よ、あなたが慈悲をかけるところの
- 5.30.2. その者には、常に、吉事・息災が、絶え間なく [ある]。神々・人間たち・ムニたちは、その者に満足して好意をかける。
- 5.30.3. まさにその者は、完全勝利者でありながらも謙虚であり<sup>190</sup>、美徳の海である。その者の良き名声は、三界に輝く。
- 5.30.4. 主の慈悲により、すべての仕事成し遂げられた。我々の生まれは、今日、良い果実（結果）を持つものとなった<sup>191</sup>。
- 5.30.5. 主よ、風神の息子（ハヌマーン）がなした行為は、千の口によっても描写され得ない」。
- 5.30.6. 風神の息子（ハヌマーン）の、素晴らしい行いたちを、ジャーンバヴァントは、ラグ族の統領（ラーマ）に聞かせた。
- 5.30.7. （それを）聞くや、（ハヌマーンの素晴らしい行いたちは、）慈悲の宝庫である方（ラーマ）の心にとって、非常に喜ばしかった。それから、（ラーマは）喜んでハヌマーンを胸に抱きよせなされた：
- 5.30.8. （ラーマは言う：）「言いなさい、息子よ、どのようにして、ジャナカの娘（スィーター）は、自分の命を守り続けているのか」。
- 5.30.d1.1. （ハヌマーンは答える：）「（あなたの）名が見張り番です、昼も夜も。あなたを念想することが、扉です<sup>192</sup>。
- 5.30.d1.2. 両目は自分の足に釘付けになっています。どの道を通って命が出て行くというのでしょうか。

### 5.31.

- 5.31.1. （私が）行く際に、（スィーターは）私に頭頂の宝石をくれました」。ラグ族の主（ラーマ）は、まさにそれ（頭頂の宝石）を心臓（胸）に抱き寄せて、それを受け取った。

---

<sup>190</sup> *bijayī binayī* という音の遊びがある。

<sup>191</sup> つまり：意義あるものとなった。

<sup>192</sup> 或いは：（あなたの）名が見張り番です。昼も夜もあなたを念想することが、扉です。

- 5.31.2. (ハヌマーンは続けて言う：)「主よ、両目を涙でいっぱいにして、  
ジャナカの娘（スィーター）は少し言葉たちを言いました：
- 5.31.3. 『弟（ラクシュマナ）ともども、主（ラーマ）の足を掴みなさい  
<sup>193</sup> <sup>194</sup>、（次のように伝えつつ）：「哀れな者の友よ、頭を垂れて庇護を求め  
る者の苦しみを取り去る方よ、
- 5.31.4. 意・行為・言葉で（あなたの）足に愛着を持っている私を、（あな  
たは、）何の罪で、主よ、捨てたのですか <sup>195</sup>。
- 5.31.5. （いや、）私には一つの悪い点があった、（と）私は認めました：  
（あなたと）別れ別れになっても、（私の）命は出ていかなかった。
- 5.31.6. 主よ、それは（私の）両目の罪なのです。出ていこうとする命を、  
（両目は）無理に邪魔しているのです <sup>196</sup>。
- 5.31.7. 別離は火。体は綿。息は風。一瞬にして身体は燃える。
- 5.31.8. （しかし）両目は涙を流します、自らの益のため <sup>197</sup>に。（そのせいで、）  
体は、別離の火で燃えることができません <sup>198</sup>』。
- 5.31.9. スィーターの苦難は、非常に大きいです。（スィーターの苦難は）  
言わないほうがよいです、惨めな者に対して慈悲深い方（ラーマ）よ。

---

<sup>193</sup> 未来における時の指定が含意される、fut. imper. が用いられている。

<sup>194</sup> つまり：主（ラーマ）とその弟（ラクシュマナ）の足を掴みなさい、

<sup>195</sup> 或いは：（私は、）意・行為・言葉で（あなたの）足に愛着を持っています。  
（そのような）私を、何の罪で、主よ、捨てたのですか。

*haum̐ tyāgī* の *haum̐* は copula か人称代名詞か区別がつかないが、後者の場合、  
目的語となる代名詞の nom. が、p.p. (nom.) に一致していることになる。

<sup>196</sup> RCM 5.31.6.2 では、5.30.d1 にあるように、目が足にくぎ付けになっている  
ため、命が目を通して出ていかないことが述べられている。場合によっては、  
更に、その後の 5.31.7-8 で述べられるように、別離の火によって体が燃え尽  
きて死んでしまうことがないのが眼の涙で火が消えるせいだ、という意味も  
含まれているかもしれない。

<sup>197</sup> つまり：夫であるラーマを見るために。

<sup>198</sup> RCM 5.31.7-8 では、別離の火が涙の水によって（幾分は）鎮められるため、  
体が燃え尽きることがない、という比喩が用いられている。この比喩は、他  
に、例えば Pa'umacariu ed. BHAYANI 18.9.4、および本個所に非常に近い表現を  
用いている Sūrasāgara ed. BRYANT / tr. HAWLEY 2015, no. 244, p. 416, ll. 5-8  
(*kāma* ...) にも見られる。

5.31.d1.1. 一瞬一瞬が、慈悲の宝庫（ラーマ）よ、過ぎてゆきます、一劫に等しく<sup>199</sup>。

5.31.d1.2. （スィーターのところへ）はやく行ってください、主よ。（スィーターを）連れ帰ってください、腕の力で悪漢たちの一団を打ち負かして」。

## 5.32.

5.32.1. 幸いの行き場所である主（ラーマ）がスィーターの苦しみを聞くと、涙が蓮のような両目に満ちてきた：

5.32.2. 「言葉・体・心で、私への歩み（帰依）がある者には、夢にでも、苦難が感じられるだろうか」。

5.32.2. ハヌマーンは言う：「まさにそれが苦難なのです、主よ、あなたの想起・あなたへの帰依が（生じ）ない [という] 時が。

5.32.4. 主よ、羅刹たちが幾程のものというのでしょうか。敵たちに打ち勝って、ジャナカの娘を（あなたは）きっと連れ帰ってくるでしょう」。

5.32.5. （ラーマは言う：）「聞け、猿よ、お前に等しい助力者は、誰もいない、肉体を纏った者としては、神々も、人間も、ムニも<sup>200</sup>。

5.32.6. お前への返礼の助力として、私は何をしようか。私の心は（お前の）面前にあることができない<sup>201</sup>。

5.32.7. 聞け、息子よ。お前には私は借りを返していない<sup>202</sup>。心の中で考えてみて、（そのように<sup>203</sup>）私は分かった」。

---

<sup>199</sup> RCM 5.31.d1.1: ~ 5.12.12.2.

<sup>200</sup> *tanudhārī* を複合語と解してこう訳した。あるいは、*tanu dhārī* という二語（後者は p.p.）と理解すると：.... お前に等しい助力者は、誰も —— 神々も、人間も、ムニも —— 肉体を纏っていない。

<sup>201</sup> *Mānasa-pīyūṣa* ad 5.32.6–8, *Notā* 3 の指摘するように、RCM 5.32.5–6 は *Hanumannāṭaka* 13.35–36 を参考にした可能性があるかもしれない。

<sup>202</sup> RCM 7.2.14.1 と比較のこと。*urina-* < *Apa. urina-* (CCDPL, s.v.) < *Skt. \*udṛṇa-* と思われ、TURNER no. 1943 のように < *\*ud-ṛṇin-* とする必要はない。

<sup>203</sup> つまり：私はお前には私は借りを返していない、と

5.32.8. 何度も何度も、猿を見つめる、神々の守護者（ラーマ）は。（ラーマの）目には涙がある。（ラーマの）体には（喜び・興奮で）非常に<sup>204</sup>逆立った毛がある。

5.32.d1.1. 主の言葉を聞いて、（主の）顔を見て、（全）身で歓喜して、ハヌマーンは、

5.32.d1.2. （主ラーマの）両足にひれ伏した、愛で動揺して：「お救いください、お救いください<sup>205</sup>、神よ！」（と言って）。

### 5.33.

5.33.1. 何度も何度も、主（ラーマ）は（ハヌマーンを）立たせようとする。愛に没頭して、彼（ハヌマーン）にとって立ち上がることは好ましくない<sup>206 207</sup>。

5.33.2. 主（ラーマ）の蓮のような手が、猿の頭に [ある]。その状況を想起して、シヴァは（主ラーマへの愛に）没頭した<sup>208</sup>。

5.33.3. 心を注意深くして、再びシヴァは語り始めた、非常に美しい物語を。

---

<sup>204</sup> *ati* が、それが係る形容詞に後置されている。

<sup>205</sup> *Skt. trāhi trāhi* 「(直訳：) 助けよ、助けよ」が用いられている。この表現は、助けを求める際の定型句として、*Skt.* そのままで用いられる、古賀／高橋 2006 s.v. *trāhi-trāhi, pāhi-pāhi* (更に cf. SCHULZE 1966, p. 167, n. 7)。ここでは、神であるラーマに帰依して庇護下に入り、救済されることを求めている。*RCM* 1.211.c1.8; 2.239.2; 5.45.d1; 7.83.2 とも比較のこと。

<sup>206</sup> 或いは：好ましくなかった。

<sup>207</sup> つまり：彼（ハヌマーン）は、立ち上がりたいとは思えない／なかった。

<sup>208</sup> *Mānasa-pīyūṣa* ad 5.33.2–3, *Ṭippanī* 1 (Ka) は、シヴァが自らのアヴァターラであるハヌマーンであった時の自らの経験を思い出しているという解釈を挙げる。しかし、確かに、ハヌマーンがシヴァのアヴァターラであるという考えは他に見られ (RAGHAVAN 1973, pp. 46, 72; LUDVIK 1994, p. 10f.; BROCKINGTON 2012, p. 723f.)、トゥルシーダース作 *VinayaPatrikā*, *Dohāvalī*, *HanumānaBāhuka* にも見られる (LUDVIK 1994, p. 11) ものの、*RCM* 本体中ではそのような設定は明言されていないという (LUDVIK 1994, p. 20, n. 120)。

5.33.4. 猿を立たせて、主は心臓（胸）に抱き寄せた。（ラーマは）手を掴んで、（ハヌマーンを）極めて近く<sup>209</sup>に座らせた。

5.33.5. （ラーマは言う：）「言え、猿よ、ラーヴァナによって守護されているランカーを、どのようにしてあなたは焼いたのか、非常に曲がりくねった砦を？」<sup>210</sup>

5.33.6. ハヌマーンは、主（ラーマ）がお喜びであると分かった。（ハヌマーンは）言った、高慢のない言葉を：

5.33.7 「枝の獣（猿）<sup>211</sup>の大きな武勇は、枝から枝に行く [こと<sup>212</sup>です]<sup>213</sup>。

5.33.8. 海を飛び越えて黄金の都城を燃やした、羅刹たちの一団を殺して、森を荒らした ——

5.33.9. その全ては、あなたの威力です、ラグ族の王（ラーマ）よ。主よ、何一つとして私の力ではありません。

5.33.d1.1. 主よ、到達できないものは何一つありません、あなたが推している者には。

5.33.d1.2. あなたの威力によって、綿は（ですら）海中の火<sup>214</sup>を必ずや灯すことができます。

<sup>209</sup> おそらく、すぐ横、つまり対等の位置に。

<sup>210</sup> *Mānasa-pīyūṣa* ad 5.33.5–6, *Ṭippanī* 1 ((Kha) [Noṭa 2]) が指摘するように、この RCM 5.33.5 は、*Hanumannāṭaka* 6.42 を元としている可能性がある。

<sup>211</sup> 5.16.d1.1 でも、同様の文脈で *sākhāmrga* が用いられ、少なくともこの文脈では卑しめていうものと思われる (cf. RCM 1.29.d1.1)。 *Mānasa-pīyūṣa* ad 5.33.7–9, Noṭa 1 が指摘するように、この RCM 5.33.7–9 は、*Hanumannāṭaka* 6.44 を元としていると思われ、また、直前の *Hanumannāṭaka* 6.43 (*Kavitāvalī* 5.22.5–6 に借用される) はこれへの説明となっている。

<sup>212</sup> *jāi* は pres. 3.sg. か或いは inf. かである。

<sup>213</sup> 或いは：枝の獣（猿）には、大きな武勇があります、枝から枝に行く [という]。

<sup>214</sup> 通常は、綿が海の中に火を付けるなどできないが、そのような不可能事もラーマの力によって可能となる、の意。この *vaḍavānala*-「雌馬（の口）の火」とは、いかなる海水も消すことのできない海中の火を指す、cf. MBhār 1.169–171; PW s.vv. *vāḍava*-, *vaḍavānala*-, *vāḍavānala*-, *vaḍavāgni*-, *vāḍavāgni*-,

### 5.34.

5.34.1. 主よ、どうか慈悲をお掛けになって <sup>215</sup>、非常に幸福を与えるものである、離れゆかない <sup>216</sup> 帰依をお与えください <sup>217</sup>」。

5.34.2. 主（ラーマ）は、極めて誠実な猿の言葉を聞いて、その時、「そのようにあれ <sup>218</sup>」と言った、バヴァーニー（＝ウマー）よ。

5.34.3. ウマーよ、ラーマの本来の性質を知った者にとっては、帰依以外の他のものが好ましいということはない。

5.34.4. この対話 <sup>219</sup> がその胸にやって来る <sup>220</sup> 者は、ラグ族の主（ラーマ）の足への帰依を得る <sup>221</sup>。

5.34.5. 主（ラーマ）の言葉を聞いて、猿たちの一団は言う：「万歳！万歳！万歳 <sup>222</sup>！慈悲深き者、幸いの雨雲 <sup>223</sup> よ！」。

（つづく）

---

*vaḍavāmukha-*, *aurva-*; pw s.vv. *vāḍaba-*, *vaḍabānala-*, *vāḍabānala-* *vaḍabāgni-*, *vāḍabāgni-*, *vaḍabāmukha-*, *aurva-*。この火を用いた比喩は、RCM 6.1.2–3 にも登場する。

<sup>215</sup> *kṛpā kari* は現代標準ヒンディー語と同様に、丁寧な願いを表すとも当然解しうるとはいえ、ラーマの *kṛpā* 「慈悲」は宗教的に重要な意味を持つ語彙であるため、敢えてこう直訳してみた。

<sup>216</sup> つまり：なくなってしまうない、堅固な

<sup>217</sup> *bhagati anapāyanī* 「離れゆかない（なくなることはない）帰依」という表現は、他に RCM 4.25.8.2; 7.14.d1.2; 7.34.d1.2; 7.52.5.2 に現れる。

<sup>218</sup> サンスクリット語による、肯定・承諾の返事。

<sup>219</sup> *Mānasa-pīyūṣa ad loc.*, *Ṭippanī* 1 は、RCM 5.33.6 から 34.1 までをいうとする。或いは寧ろ、もっと前（例えば 5.32.2）から直前の 5.34.2 までをいう可能性も考えうる。

<sup>220</sup> 「その胸にやって来る（心に思い浮ぶ、心に刻まれる）」とは、*Mānasa-pīyūṣa* 訳によると、それを理解して、記憶に留めることを意味する。

<sup>221</sup> このように対話の果報が述べられている RCM の箇所を、*Mānasa-pīyūṣa ad loc.*, *Ṭippanī* 2 が列挙してくれている。

<sup>222</sup> 直訳：勝利せよ！

<sup>223</sup> つまり：幸福を雨降らす者。勿論、ラーマを指す。RCM 6.70.4.1 *kṛpā bāridhara* 「慈悲の雨雲（ラーマ）」という表現をも参照。

## 一次文献などの情報

RCM の写本、エディション、訳、注釈の情報を以下に纏めておく。

・写本と古い ed. については、各エディションの冒頭等にある説明の他に、坂田 1984; 坂田 1985; LUTGENDORF 1991, p. 141, n. 59; VERMA 1998, p. 11; DUBE / MIŚRA 2019; DUBE 2021; BANGHA 2024 を参照。

・エディションとしては、異読付きのもの (AMĪJANĪNANDANAŚARAṆA 1925–1956 *Mānasa-pīyūṣa*; ŚUKLA et al. 1923; TRIPĀTHĪ 1936; CAUBE 1948<sup>224</sup>; GUPTA 1949a<sup>225</sup>; MIŚRA 1962<sup>226</sup>; VĀJAPEYĪ 1968 など)、異読なしのもの (ŚYĀMASUNDARADĀSA 1922; VĀJAPEYĪ 1948; VĀJAPEYĪ 1972; ed. ŚUKLA et al. 1973; ed. CATURVEDĪ 1971 など) などがある。更なる情報が LUTGENDORF 1991, p. 61f.; VERMA 1998, pp. 14–22; BANGHA 2024 に挙がる。本稿では、底本として主に MIŚRA 1962 を用いた。

・訳としては、ヒンディー語訳 (AMĪJANĪNANDANAŚARAṆA 1925–1956 *Mānasa-pīyūṣa*; ŚYĀMASUNDARADĀSA 1922; PODDĀRA in VĀJAPEYĪ 1948; in ed. CATURVEDĪ 1971 など)、英語訳 (GROWSE 1883; in VĀJAPEYĪ 1972; LUTGENDORF 2016a, 2016b, 2018a, 2018b, 2020, 2022, 2023; SNELL / TIWARI 2023, pp. 108–425 [部分訳] など)、日本語訳 (オンライン資料【1】[部分訳]; 池田 2003) 等がある。更なる情報は VERMA 1998, pp. 31–40 を参照。

・詳しい注釈としては、AMĪJANĪNANDANAŚARAṆA 1925–1956 *Mānasa-pīyūṣa*<sup>227</sup> が筆頭に挙げられる。更なる情報が VERMA 1998, pp. 22–31 に挙がる。簡略な注が、諸訳 (上述) に付いていることがある。VālRām 全巻の訳注である GOLDMAN 1984 (Kāṇḍa 1); POLLOCK 1986 (Kāṇḍa 2); POLLOCK 1991 (Kāṇḍa 3); LEFEBER 1994 (Kāṇḍa 4); GOLDMAN / SUTHERLAND GOLDMAN 1996 (Kāṇḍa 5); GOLDMAN / SUTHERLAND GOLDMAN / VAN NOOTEN 2009 (Kāṇḍa 6); GOLDMAN / SUTHERLAND GOLDMAN 2017 (Kāṇḍa 7) も参考になる。

<sup>224</sup> 同じ学者による CAUBE 1967 にある異読の議論をも参照のこと。

<sup>225</sup> 同じ学者による GUPTA 1949b にある異読の議論をも参照のこと。

<sup>226</sup> 異読は *ibid.*, p. 460 以降に、*corrigenda* は末尾の 2 頁に載っている。

<sup>227</sup> この書については、LUTGENDORF 1991, p. 153f. を参照。

## 工具書の情報

アワディー語の文法書や辞書類、韻律研究の情報を以下に纏めておく。

・古いアワディー語の主要な文法としては、KELLOGG 1893, esp. pp. 113–116 §§174–181; pp. 185–191 §§292–302; pp. 310–329 §§532–570; p. 497 §850a; GREAVES 1895; SAKSENA 1937<sup>228</sup>; Mānasa-vyākaraṇa 1955<sup>229</sup>; ŚRĪVĀSTAVA 1957; BĀLĀ 1978; SNELL / TIWARI 2023<sup>230</sup>, pp. 17–74; LAKSHMI DHAR 1949, pp. 1–29; NAGASAKI 2023などを挙げうる<sup>231</sup>が、これらにおいてはRCMに出てくる全ての語形が網羅的に扱われていわけではない点に注意を要する。古いアワディー語は、Dāmodara 作 Uktivyaktiprakaraṇa (12世紀 A.D.; ed. JINAVIJAYA 1953) に記録され、CHATTERJI 1953 にその文法が纏められる所謂 “Old Kosalī” 語と非常に高い共通性を持つため、比較作業が極めて重要となる。更に、LULLOO LAL 1811; HOERNLE 1880; KELLOGG 1893; TESSITORI 1914, 1914–1916<sup>232</sup>; VARMA 1935, 1954; ṬAṂḌANA 1957, 1962; MCGREGOR 1968, pp. 109–232; MASICA 1991, pp. 212–330; STRNAD 2013, pp. 147–492; DVIVEDI 2011; OBERLIES 2005 など、および *Linguistic Survey of India* の該当部分 (主として GRIERSON 1904、更に cf. GRIERSON 1916) などとも参考になる<sup>233</sup>。

・古アワディー語のシンタクスに関するものとして、上述の KELLOGG 1893 等の文法書、および MCGREGOR 1995 等の現代標準ヒンディー語の諸

---

<sup>228</sup> SAKSENA 1937, p. 12, l. 7–10 によれば、RCM の “Nāgarī Prachārīṇī Sabhā, Benares edition” を参照している。ŚUKLA, Rāmacandra et al. ed. 1923 (未見) を指すのかもしれないが、現時点で未確認である。

<sup>229</sup> この冒頭と末尾にある文章を削った以外は同一のもののように見えるのが、同じく Gita Press から出版されている “Pariśiṣṭa: Mānasa kā vyākaraṇa” in VĀJAPEYĪ 1968, pp. 753–799 である。

<sup>230</sup> その p. xiv, ll. 32–36 (cf. *ibid.*, p. 502) によれば、ed. Gita Press (i.e. ed. VĀJAPEYĪ) 2010, 94th reprint を底本として用いたとする。

<sup>231</sup> SCHOKKER 1984 をも参照。

<sup>232</sup> 更に、TESSITORI 2002 (cf. 本稿注 252) をも参照。

<sup>233</sup> なお、ブラジ語の教本として用いられる SNELL 1991 は、Reader としては良くできた本であるが、*ibid.*, pp. 3–18 の特に動詞の文法記述には不備があるので注意を要する。他の文法書 (上掲) を参照して補う必要がある。

文法書における記述のほかに、GAEFFKE 1967; SCHOKKER 1969; MASICA 1991, pp. 212–419; DROCCO 2008, 2016; STROŃSKI 2011<sup>234</sup>などを挙げうる。

・韻律の研究としては、長崎 2000; NAGASAKI 2012a, 2012b, 2019などを挙げうる。

・辞書について。Tulasīdāsa の諸作品に対する辞書として、TIVĀRĪ / TIVĀRĪ 1954<sup>235</sup> が役に立つ<sup>236</sup>。RCM の単語コンコードダンスとして、AGRAVĀLA / GUPTĀ 2016<sup>237</sup>; ŚRĪVĀSTAVA / ŚRĪVĀSTAVA 2019<sup>238</sup>がある。現代ヒンディー

<sup>234</sup> ここに提示される古アワディー語の例文とグロスはいくつかの問題を含むため、逐一再検討を要する。本書の主題である *ergative* 構文の解釈を左右する諸点：p. 128 (15) *cāhā* は *cāha* pres.ind. 3.sg. の末尾の母音が行末で延長された可能性もあり、決められない。同様の問題が p. 128 (14) にもある。同様の問題が p. 137 (59) *jānā* にもあるが、前の *jāna* pres.ind. 3.sg. からは、*jānā* も同じである可能性に傾く。[p. 131 (28) の後半は文法的解釈が難しい箇所を含む。] p. 136 (53) *pūmchem*, (54) *mārem* は p.p. masc. obl.sg. であり、absol. と類似の機能を持つ、時を示す副詞的構文 (KELLOGG 1893, p. 447f., §754 (2)f.) と理解される。その他の文法的解釈に関する諸点：p. 131 (28) *chamibo* は *-iba-* 分詞の dir.sg. masc. (Braj 語形 *-ō*) であり、*aparādhu* dir.sg. masc. に一致している。p. 131 (29) *karai* pres.ind. 3.sg.; p. 134 (42) *jāna* pres.ind. 3.sg.; *pai* ‘but’ conjunction とするのが正しい。付言すると、テキストの転写に関して単純な誤記が散見される：正しくは p. 127 (11) *tabahim rāya priya*; p. 132 (33) *prabodhā*; p. 132 (36) *cīnhā*; p. 129 (16) *paṁkhinḥa-kaham*, (17) *dhīraju*, (18) *śaṁjoga, mātu* (Tripāthī 1972: 216); p. 130 (22) *-ke, kīnha*; p. 134 (45) *māmgi*; p. 135 (48) *pūhahu*; p. 133 (37) *dīnha*; p. 137 (61), (62) *tīnha* p. 134 (43) *varisa pāmca*, (44) *māmga*; p. 135 (50) *nicimta*; p. 136 (51) *tuim suramga*, (52) *themghā*; p. 141 (75) *bānanha*, (76) *saptariṣi* である。

<sup>235</sup> Ibid., [prakāśīya], p. (6), l. 22 によると、RCM の底本としては ed. Gita Press (i.e. ed. VĀJAPEYĪ) を用いたという。

<sup>236</sup> 他に、*Mānasa-kośa* 1909; GAURA 1925, Cauthā khaṇḍa: *Mānasa-Śabda-Sarovara* (pp. 1–134: *Mānasa-Śabda-Sarovara*; pp. 135–181: *Mānasa-Dhātu-Kośa*); AVASTHĪ 1991 もあり。

<sup>237</sup> AGRAVĀLA / GUPTĀ 2016 は、CALLEWAERT / LUTGENDORF 1997 の改良版である (cf. AGRAVĀLA / GUPTĀ 2016, pp. ix, xi)。CALLEWAERT / LUTGENDORF 1997 は Gita Press ed. 1938 に (cf. ibid., pp. 9, 14f.)、AGRAVĀLA / GUPTĀ 2016 は ed. Gita Press (i.e. ed. VĀJAPEYĪ), Code 1563 に基づく、cf. ibid., p. x, ll. 5–7; p. xii, ll. 3–5。古いものとしては、SŪRYAKĀNTA 1937 (簡単な意味付きの場合あり) があるが、これは ed. ŚYĀMASUNDARADĀSA 1922 に基づく、cf. ibid., Preface, p. 1, n. 2。

<sup>238</sup> 簡単な意味付き。

語（VARMMĀ et al. 1962–1966; ŚYĀMASUNDARADĀSA et al. 1965–1975; MCGREGOR 1993; 古賀／高橋 2006）などをはじめとする、広義のヒンディー語群に属する諸言語の辞書（例えば、ブラジ語の辞書 ṬAṆḌANA 1974–?, Bihārī の辞書 HOERNLE / GRIERSON 1885–1889 など）も有用である。特に、ŚYĀMASUNDARADĀSA et al. 1965–1975; CALLEWAERT / SHARMA 2009 はブラジ語文献のみならず RCM<sup>239</sup> の語彙・例文をも収録することがあり、MCGREGOR 1993 はアワディー語・ブラジ語の語彙をも収録する。新期インドアーリヤ語の語源辞典としては、TURNER, R.L. 1931, 1966<sup>240</sup>, 1985<sup>241</sup> が挙げられる。多用されるサンスクリット語からの借用語を調べるには、サンスクリット語の諸辞書<sup>242</sup>をチェックする必要がある。サンスクリット語の語源辞典は、MAYRHOFFER 1992, 1996, 2001 である。

## 略号

|         |   |                                                                         |
|---------|---|-------------------------------------------------------------------------|
| 3.      | = | 3rd person                                                              |
| absol.  | = | absolutive (= gerund = conjunctice)                                     |
| acc.    | = | accusative                                                              |
| AdhyRām | = | Adhyātma-Rāmāyaṇa                                                       |
| Apa.    | = | Apabhraṁśa                                                              |
| CCDPL   | = | <i>A Comprehensive and Critical Dictionary of the Prakrit Languages</i> |
| CPD     | = | <i>A Critical Pāli Dictionary</i> (TRENCKNER, Vilhelm et al. 1924–2014) |
| dir.    | = | direct case (= nom.-acc.)                                               |
| DoP     | = | <i>A Dictionary of Pāli</i> . (CONE, Margaret 2001–2021)                |
| ed.     | = | edition(s), edited by                                                   |
| esp.    | = | especially                                                              |

<sup>239</sup> ed. Gita Press (i.e. ed. VĀJAPEYĪ) に基づく、cf. CALLEWAERT / SHARMA 2009, vol. 1, p. XVIII.

<sup>240</sup> 加えて TURNER, D.R. 1969; TURNER, R.L. / TURNER, D.R. 1971 をも参照のこと。

<sup>241</sup> MCGREGOR 1993 が、TURNER, R.L. 1966, 1985 に則って新たに語源を提案している例もある（ENTWISTLE 1995, p. 578a は *cabūtrā*, *thagorī* を挙げる）。

<sup>242</sup> ケルン大学のサイト (<https://www.sanskrit-lexicon.uni-koeln.de/>) に多く集められている。

|        |   |                                                                 |
|--------|---|-----------------------------------------------------------------|
| fut.   | = | future                                                          |
| gen.   | = | genitive                                                        |
| imper. | = | imperative                                                      |
| ind.   | = | indicative                                                      |
| l.     | = | line                                                            |
| masc.  | = | masculine                                                       |
| MBhār  | = | MahāBhārata (Poona critical edition)                            |
| n.     | = | note                                                            |
| nom.   | = | nominative                                                      |
| obl.   | = | oblique case                                                    |
| Pkt.   | = | Prakrit                                                         |
| PSM    | = | Pāia-Sadda-Mahaṇṇavo (SHETH, Hargovind Das T. 1963)             |
| PW     | = | “Petersburger Wörterbuch (großes)” (BÖHTLINGK / ROTH 1855–1875) |
| pw     | = | “Petersburger Wörterbuch (kleines)” (BÖHTLINGK 1879–1889)       |
| RCM    | = | Rāmacaritamānasa                                                |
| pl.    | = | plural                                                          |
| p.p.   | = | past / perfect(ive) participle                                  |
| pres.  | = | present                                                         |
| Skt.   | = | Sanskrit                                                        |
| sg.    | = | singular                                                        |
| tr.    | = | translation, translated by                                      |
| UVP    | = | Uktivyaktiprakaraṇa (JINAVIJAYA ed. 1953)                       |
| VālRām | = | Vālmīki-Rāmāyaṇa (Baroda critical edition)                      |

## 引用文献

AGRAVĀLA, Pratibhā

[1969] *Hindī-Muhāvare (adhyayana, saṁkalana, evaṁ sāhityika prayoga)*.  
Kalakattā: Kalakattā Viśvavidyālaya.

[1986, 1988, 1989] *Bṛhat Muhāvarā Kośa*. Vol. 1, 2, 3. Lakhanaū: Uttara  
Pradeśa Hindī Saṁsthāna (Hindī Samiti Prabhāga).

AGRAVĀLA, Śivaprakāśa Ke. (AGRAWAL, Shivprakash K.) / GUPTĀ, Omaprakāśa Ke.  
(GUPTA, Omprakash K.)

[2016] *śrī rāmacaritamānasa śabda anukramaṇikā*. / *Śrī  
Ramacaritamanasa Word Index*. Delhi: B. R. Publishing Corporation.

AHMAD, Sayyid Khairayat

- [1890] “Omens. In Bihār.” *The Indian Antiquary. A Journal of Oriental Research* 19, p. 130f.

AMJANĪNANDANAŚARAṆA (ed., tr., comm.)

- [1925–1956] *Mānasa-pīyūṣa*. 12 vols. Ayodhyā: Mānasa-pīyūṣa Kāryālaya. (Repr. in 7 vols., Gorakhpura: Gītāpresā) [異読付き本文、ヒンディー語訳、詳しいヒンディー語注釈]

AVASTHĪ ‘Jñāna’, Bacculāla

- [1991] *Tulaśī śabda-kośa*. 2 vols. Dillī: Buksa ena’ Buksa.

BAKKER, Hans

- [1986] *Ayodhyā*. Part I, II, III. Groningen: Egbert Forsten.

BĀLĀ, Kiraṇa

- [1978] *Tulasī kī bhāṣā kā vyākaraṇa*. Ilāhābāda: Smṛti Prakāśana.

BANGHA, Imre

- [2024] “History of a Text: The Major Manuscripts and Critical Editions of the *Rāmcarit-mānas*”. In: BANGHA, Imre / STASIĆ, Danuta (ed.) 2024 *Literary Cultures in Early Modern North India. Current Research*. Oxford: Oxford University Press., pp. 63–104.

BHATTACHARYA, Aditi

- [1971] *Ancient Indian Hair Style of Women in Sanskrit Literature*. Doctoral thesis. Faculty of Arts, Aligarh Muslim University.

BÖHTLINGK, Otto

- [1879–1889] *Sanskrit-Wörterbuch in kürzerer Fassung*. I–VII. St. Petersburg: Kaiserliche Akademie der Wissenschaften. [pw]  
[1870–1873] (ed.) *Indische Sprüche, Sanskrit und Deutsch*. Zweite vermehrte und verbesserte Auflage. Erster Theil: A – Gha (1870); Zweiter Theil: Ca – Bha (1872); Dritter Theil: Ma – Ha (1873). St. Petersburg: Eggers et Co., H. Schmitzdorff, J. Issakof und A. Tscherkessof; Riga: N. Kymmell; Leipzig: Leopold Voss.

BOLLEÉ, Willem

- [2008] “Subject index of Daṇḍin’s *Daśa-kumāra-carita*.” *Studia Indologica* 15, pp. 5–39.  
[2015] *A Cultural Encyclopaedia of the Kathāsaritsāgara in Keywords. Complementary to Norman Penzer’s General Index on Charles*

- Tawney's Translation*. Studia Indologica Universitatis Halensis, Band 8. Halle an der Saale: Universitätsverlag Halle-Wittenberg.
- BÖHTLINGK, Otto / ROTH, Rudolph  
[1855–1875] *Sanskrit-Wörterbuch*, I–VII. St. Petersburg. St. Petersburg: Kaiserliche Akademie der Wissenschaften. [PW]
- BROCKINGTON, John  
[1998] *The Sanskrit Epics*. Leiden / Boston / Köln: Brill.  
[2012] “The Rāmāyaṇa in the Purāṇas.” In: VOEGELI, François / ELTSCHINGER, Vincent / FELLER, Danielle / CANDOTTI, Maria Piera / DIACONESCU, Bogdan / KULKARNI, Malhar (ed.) *Devadattīyam. Johannes Bronkhorst Felicitation Volume*. Bern / Berlin / Bruxelles / Frankfurt am Main / New York / Oxford / Wien: Peter Lang, pp. 703–730.
- BRYANT, Kenneth E. (ed.) / HAWLEY, John Stratton (tr.)  
[2015] *Surdas. Sur's Ocean. Poems from the Early Tradition*. Murti Classical Library of India 5. Cambridge, Massachusetts / London, England: Harvard University Press.
- BULKE, Kāmila (BULCKE, Camille)  
[1950] *Rāmakathā (utpatti aura vikāsa)*. Prayāga: Hindī Pariṣad Prakāśana, Prayāga Viśvavidyālaya.
- CALLEWAERT, Winand M. / LUTGENDORF, Philip  
[1997] *Rāmacaritamānas Word Index / mānasa śabda anukramaṇikā*. New Delhi: Manohar Publisher & Distributors.
- CALLEWAERT, Winand M. / SHARMA, Swapna  
[2009] *Dictionary of Bhakti. North Indian Bhakti Texts into Khaṛī Bolī Hindī and English*. 3 vols. New Delhi: D.K. Printworld.
- CAUBE, ŚambhuNārāyaṇa  
[1948] (ed.) *Rāmacaritamānasa [saṁśodhita mūlapāṭha]*. prathamāvṛtti. Kāśī: NāgarīPracārīṇī Sabhā. [異読付き本文]  
[1967] (ed. by Sudhākara Pāṇḍeya) *mānasa anuśīlana*. sūryakumārī pustakamālā–35. Vārāṇasī: NāgarīPracārīṇī Sabhā. [異読の議論]
- CATURVEDĪ, Sītārāma et al. (ed.)  
[1971] *Rāmacaritamānasa*. Gosvāmī Tulasīdāsa. Tulasī-Granthāvalī [prathama khaṇḍa]. Kāśī: Akhila Bhāratīya Vikrama Pariṣad. [異読なし本文、ヒンディー語訳]

CHATTERJI, Suniti Kumar

- [1953] “A Study of the New Indo-Aryan Speech Treated in the ‘Ukti-vyakti-prakaraṇa’.” In: JINAVIJAYA (ed.) 1953, pp. 1–72 (Roman numerals).

COCKBURN, W.

- [1884] “The Unfortunate Face.” *Panjab Notes and Queries* 1, p. 124, §933.

CROOKE, W.

- [1884] “Omens—Monkeys—Owls.” *Panjab Notes and Queries* 1, p. 87b, §682.

- [1891a] “South Mirzapur—Euphemistic titles for animals.” *North Indian Notes and Queries: A Monthly Periodical*, July, 1891. Vol. I, no. 4, p. 70a, §479.

- [1891b] “South Mirzapur Kharwars— Their Costoms.” *North Indian Notes and Queries: A Monthly Periodical*, December, 1891. Vol. I, no. 9, p. 157a, §944.

- [1894] *An Introduction to the Popular Religion and Folklore of Northern India*. Allahabad: Printed at the Government Press, North-Western Provinces and Oudh.

- [1896a] *The Popular Religion and Folklore of Northern India*. Allahabad: Printed at the Government Press, North-Western Provinces and Oudh.

- [1896b] *The Tribes and Castes of the North-Western Provinces and Oudh*. In Four Volumes. Vol. III. Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing, India.

D’GRUYTHER, W. J.

- [1885] “Omens—Monkeys—Unlucky Name.” *Panjab Notes and Queries* 2, p. 166b, §891.

DROCCO, Andrea

- [2008] *L’ergatività in hindī. Studio diacronico del processo di diffusione della posposizione ne*. Alessandria: Edizioni dell’Orso.

- [2016] “The restoration of the ergative case marking of ‘A’ in perfective clauses in New Indo-Aryan. The case of the Braj language.” In: DAHL, Eystein / STROŃSKI, Krzysztof (ed.) *Indo-Aryan Ergativity in Typological and Diachronic Perspective*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, pp. 201–236.

DUBE, Udaya Śamkara / MIŚRA, Vijaya Nātha

- [2019] *Rāmacarita mānasa kī pāṇḍulipiyāṃ. jñāta-ajñāta tathya*. Paṃcakulā, Hariyāṇā: Ādhāra Prakāśana.
- DUBE, Udayaśamkara / Saṃpādaka: Pradīpa JAINA
- [2021] *pāṇḍulipiyom meṃ tulasī aura mānasa*. Sāhibābāda: Anubhava Prakāśana.
- DVIVEDI, Hājārīprasāda
- [1948] *hindī sāhityakī bhūmikā*. 3rd. ed. Bambaī: Hindī-grantha-ratnākara Kāryālaya. (1st ed.: 1940)
- [2011] *Hindī bhāṣā kā vṛhat aitihāsika vyākaraṇa*. Naī Dillī: Rājakamala Prakāśana.
- ECK, Diana L.
- [1991] “Following Rāma, Worshipping Śiva.” In: Diana L. ECK / Françoise MALLISON (ed.) *Devotion Divine. Bhakti Traditions from the Regions of India. Studies in Honour of Charlotte Vaudeville*. Groningen: Egbert Forsten; Paris: École Française d’Extrême-Orient, pp. 49–71.
- ELLIOT, Julian H.
- [1884] “Omens—Monkeys—Calcutta.” *Panjab Notes and Queries* 1, p. 111b, §858.
- EMENEAU, M. B.
- [1960] “Nāgapāśa, Nāgabandha, Sarpabandha, and Related Words.” *Bulletin of the Deccan College Post-Graduate and Research Institute* 20(1/4), Sushil Kumar De Felicitation Volume, pp. 291–300.
- ENTWISTLE, Alan
- [1995] Review of MCGREGOR 1993. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London* 58(3), pp. 577–578.
- FALLON, S. W. / edited and revised by TEMPLE, R. C.
- [1886] *A Dictionary of Hindustani Proverbs, Including Many Marwari, Panjabi, Maggah, Bhojpuri, and Tirhuti Proverbs, Sayings, Emblems, Aphorisms, Maxims and Similes*. Banāras: The Medical Hall Press.
- FRESCHI, Fausto
- [1999] “Luigi Pio Tessitori’s unpublished works in the Archivio Peano”. In: DOLCINI, Donatella / FRESCHI, Fausto (ed.) 1999 *Tessitori and Rajasthan. Testi e documenti, I*. Udine: Società Indologica Luigi Pio Tessitori, pp. 197–219.
- GAEFFKE, Peter

- [1967] *Untersuchungen zur Syntax des Hindi*. The Hague / Paris: Mouton & Co.

GAMGĀDĀSA

- [1969] *Śrīrāmacaritamānasa (bāla vinodinī ṭīkā sahita)*. Ayodhyā: Ananta Śrīmaṇirāmadāsajī mahārāja kī chāvanī.<sup>243</sup>

GANGĀ DATT UPRETI

- [1894] *Proverbs & Folklore of Kumaun and Garhwal, Collected by Pandit Gangā Datt Upreti (Late Extra Assistant Commissioner)*. Lodiana: Printed at the Lodiana Mission Press, M. Wylie, Manager.

GAUṚA, ŚrīRāmadāsa

- [1925] *ŚrīRāmacarita-mānasakī bhūmikā*. (Hindī-Pustaka-Ejemsī-Mālā—43). 5 Khaṇḍa. Kalakattā / Dehalī / Kāśī: Hindī Pustaka Ejemsī.

Gita Press ed. = VĀJAPEYĪ, NandaDulāre (ed.)

GOLDMAN, Robert P.<sup>244</sup>

- [1984] *The Rāmāyaṇa of Vālmīki. An Epic of Ancient India. Volume I: Bālakāṇḍa*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.

GOLDMAN, Robert P. / SUTHERLAND GOLDMAN, Sally J.<sup>244</sup>

- [1996] *The Rāmāyaṇa of Vālmīki. An Epic of Ancient India. Volume V: Sundarakāṇḍa*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.

- [2017] *The Rāmāyaṇa of Vālmīki. An Epic of Ancient India. Volume VII: Uttarakāṇḍa*. Princeton / Oxford: Princeton University Press.

GOLDMAN, Robert P. / SUTHERLAND GOLDMAN, Sally J. / VAN NOOTEN, Barand A.<sup>244</sup>

- [2009] *The Rāmāyaṇa of Vālmīki. An Epic of Ancient India. Volume VI: Yuddhakāṇḍa*. Princeton / Oxford: Princeton University Press.

GREAVES, Edwin

- [1895] *Notes on the Grammar of the Rāmāyana of Tulsī Dās*. Benares: E. J. Lazarus & Co., the Medical Hall Press.

GRIERSON, George A.

---

<sup>243</sup> <https://archive.org/details/srimad-ramcharit-manas-bal-vinodani/>

<sup>244</sup> 各巻の冒頭には、翻訳者の名前として、Robert P. Goldman, Rosalind Lefebber, Sheldon I. Pollock, Sally J. Sutherland (5–7 巻では Sally J. Sutherland Goldman とする)、Barend A. van Nooten の名が挙がる。

- [1904] (collected and edited by ...) *Linguistic Survey of India*. Vol. VI. *Indo-Aryan Family. Mediate Group. Specimens of the Eastern Hindī Language*. Calcutta: Superintendent Government Printing, India.
- [1912] Review of TESSITORI 1911. *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* (Jul., 1912), pp. 794–798.
- [1916] (collected and edited by ...) *Linguistic Survey of India*. Vol. IX. *Indo-Aryan Family. Central Group. Part I. Specimens of Western Hindī and Pañjābī*. Calcutta: Superintendent Government Printing, India.
- GROWSE, F. S.
- [1883] *The Rāmāyana of Tulsi Dās. Translated from the Original Hindi*. Allahabad: North-Western Provinces and Oudh Government Press.
- GUPTA, Kṛṣṇānanda
- [1952] *Bundelī Kahāvata Kośa*. Loka-sāhitya-samiti-granthamālā—3. Lakhanāū: Sūcanā vibhāga, uttara pradeśa sarkāra.
- GUPTA, Mātāprasāda
- [1949a] (ed.) *Śrī rāma carita mānasa. prācīnatama pratiyoṃ kī sahāyatā se nirdhārita pāṭha aura pāṭhāntara yukta*. Prayāga: Sāhitya Kuṭīra / Ilāhābāda: Himdustānī Ekeḍemī (Tulasī-Granthāvalī, Bhāga 1, Khamḍa 1.). [異読付き本文]
- [1949b] *Rāma carita mānasa kā pāṭha*. Prayāga: Sāhitya Kuṭīra / Ilāhābāda: Himdustānī Ekeḍemī (Tulasī-Granthāvalī, Bhāga 1, Khamḍa 2.).
- [1965] *Tulasīdāsa (eka samālocanātmaka adhyayana)*. 4. ed. Prayāga: Hindī-parīṣad Prakāśana, Prayāga Viśvavidyālaya. (1. ed.: 1942)
- GURUGE, Ananda<sup>245</sup>
- [1991] *The Society of the Rāmāyaṇa*. New Delhi: Abhinav Publications.
- HANDIQUI, Krishna Kanta
- [1956] *Naiṣadhacarita of Śrīharṣa. For the first time translated into English with critical Notes and Extracts from unpublished Commentaries, Appendices and a Vocabulary*. Poona: Deccan College. Postgraduate and Research and Institute.
- HAYASHI Takao (林 隆夫)
- [2017] “The Units of Time in Ancient and Medieval India.” *History of Science in South Asia*, 5.1, pp. 1–116.

---

<sup>245</sup> p. XIX では「Ananda W. P. Gurugé」と表記される。

HOERNLE, A. F. Rudolf

- [1880] *A Comparative Grammar of the Gaudian Languages, with Special Reference to the Eastern Hindi, Accompanied by a Language-Map and a Table of Alphabets*. London: Trübner & co.

HOERNLE Rudolf A. F. / GRIERSON, George A. (compiled by)

- [1885–1889] *A Compatarive Dictionary of the Bihārī Language*. Part I. From *a* to *ag'mānī*. (1885); Part II. From *āg'mālikā* to *añjali*. (1889). Calcutta: at the Bengal Secretariat Press.

HOPKINS, E. Washburn

- [1915] *Epic Mythology*. Strassburg: Verlag von Karl J. Trübner.

*Indische Sprüche* = BÖHTLINGK 1870–1873

JINAVIJAYA (ed.)

- [1953] *paṇḍitavara-dāmodara-viracita uktivyaktiprakaraṇa, purātana kośalībhāṣoddharaṇa sambaddha uktiṣayaka prayogaprakāśātmaka viśiṣṭa granthakṛti adyāvadhī avijñāta evaṁ ekamātraprāpta prācīnādarśādhāreṇa prathamavāra prakāśita. Ukti-Vyakti-Prakaraṇa of Pandita Damodara (An Elementary Handbook of Sanskrit Composition with Parallel Illustrations in Old Kosali of the Twelfth Century), Edited for the First Time from the Single Available Manuscript. SiṁghīJainaGranthamālā granthāṁka 39. Bambaī: SiṁghīJainaśāstraśikṣāpīṭha, Bhārātīya Vidyā Bhavana*

KALE, M. R. / revised by Jayanand L. DAVE and S. N. UPADHYAYA

- [1985] *The Mālavikāgnimitram of Kālidāsa. With the Commentary of Kāṭayavema, various Readings, Introduction, Translation into English and critical and explanatory Notes*. Delhi Varanasi / Patna / Madras: Motilal Banarsidass. (Reprint of ed. Bombay, 1960)

KANE, Pandurang Vaman

- [1941] *History of Dharmaśāstra (Ancient and Mediæval Religious and Civil Law)*. Vol. II Part I. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- [1946] *History of Dharmaśāstra (Ancient and Mediæval Religious and Civil Law)*. Vol. III. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- [1958] *History of Dharmaśāstra (Ancient and Mediæval Religious and Civil Law)*. Vol. V. Pt I. (Vratas, Utsavas, Kāla etc.) Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.

- [1962] *History of Dharmaśāstra*. Vol. V (Part II). Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute.
- KASHI NÁTH
- [1894] “N.-W. P: Mentioning and Seeing Monkeys.” *North Indian Notes & Queries: A Monthly Periodical*, June, 1894. Vol. IV, no. 3, p. 54a, §139.
- KELLOGG, S. H.
- [1893] *A Grammar of the Hindí Language: in which are Treated the Standard Hindí, Braj, and the Eastern Hindí of the Rámáyan of Tulsí Dás, also the Colloquial Dialects of Rájputáná, Kumáon, Avadh, Ríwá, Bhojpúr, Magadha, Maithila, etc. with Copious Philological Notes*. Second Edition, Revised and Enlarged. London: Kegan Paul, Trench, Trübner, and Co.
- KHATRÍ, Viśvambharanātha
- [1913] *Lokokti Koṣa*. Kalakattā.
- KIRFEL, W.
- [1920] *Die Kosmographie der Inder nach den Quellen dargestellt*. Mit 18 Tafeln. Bonn / Leipzig: Kurt Schroeder.
- [1954] *Das Purāṇa vom Weltgebäude (Bhuvanavinyāsa). Die kosmographischen Traktate der Purāṇa's. Versuch einer Textgeschichte*. Bonn: Universität Bonn.
- KUTUMBIAH, P.
- [1962] *Ancient Indian Medicine*. Bombay / Calcutta / Madras / New Delhi: Orient Longmans.
- LEFEBER, Rosalind / (ed.) GOLDMAN, Robert P.<sup>244</sup>
- [1994] *The Rāmāyaṇa of Vālmīki. An Epic of Ancient India. Volume IV: Kiṣkindhākāṇḍa*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- LUDVIK, Catherine
- [1994] *Hanumān in the Rāmāyaṇa of Vālmīki and the Rāmacaritamānasa of Tulasī Dāsa*. Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.
- [2007] *Sarasvatī. Riverine Goddess of Knowledge. From the Manuscript-carrying Vīṇā-player to the Weapon-wielding Defender of the Dharma*. Leiden / Boston: Brill.
- LUTGENDORF, Philip

- [1991] *The Life of a Text. Performing the Ramcaritmanas of Tulsidas.* University of California Press.
- [2006] *Hanuman's Tale. The Messages of a Divine Monkey.* New York: Oxford University Press.
- [2012] “Tulsīdās.” In: ed. Knut A. JACOBSEN et al., *Brill's Encyclopedia of Hinduism*. 6 vols. Leiden / Boston: Brill, vol. 4, pp. 429–437.
- [2016a] *Tulsidas. The Epic of Ram.* Volume 1. Murty Classical Library of India 7. Cambridge, Massachusetts / London, England: Harvard University Press. [RCM 1.冒頭–175]
- [2016b] *Tulsidas. The Epic of Ram.* Volume 2. Murty Classical Library of India 8. Cambridge, Massachusetts / London, England: Harvard University Press. [RCM 1.175–361 (末尾) ]
- [2018a] *Tulsidas. The Epic of Ram.* Volume 3. Murty Classical Library of India 15. Cambridge, Massachusetts / London, England: Harvard University Press. [RCM 2.冒頭–156 (末尾) ]
- [2018b] *Tulsidas. The Epic of Ram.* Volume 4. Murty Classical Library of India 16. Cambridge, Massachusetts / London, England: Harvard University Press. [RCM 2.157–326 (末尾) ]
- [2020] *Tulsidas. The Epic of Ram.* Volume 5. Murty Classical Library of India 24. Cambridge, Massachusetts / London, England: Harvard University Press. [RCM 3, 4, 5]
- [2022] *Tulsidas. The Epic of Ram.* Volume 6. Murty Classical Library of India 31. Cambridge, Massachusetts / London, England: Harvard University Press. [RCM 6]
- [2023] *Tulsidas. The Epic of Ram.* Volume 7. Murty Classical Library of India 34. Cambridge, Massachusetts / London, England: Harvard University Press. [RCM 7]

LULLOO LAL (LALLŪLĀLA)

- [1811] *General Principles of Inflection and Conjugation in the Bruj B,hak,ha, or The Language spoken by the Hindoos in the Country of Bruj, in the District of Go,aliyur, in the Dominions of the Raja of B,hurutpoor, as also in the extensive Countries of Bueswara, B,hudawur, Untur Bed and Boondelk,hund. Composed for the use of the Hindoostanee students by Shree Lulloo Lal Kuvi, B,hak,ha*

- Moonshee in the College of Fort William*. Calcutta: Printed at the India Gazette Press.
- MAJUPURIA, T[rilok] C[handra] / revised by D.P. JOSHI
- [1988] Religious & useful plants of Nepal & India : medicinal plants and flowers as mentioned in religious myths and legends of Hinduism and Buddhism. Lashkar, Gwalior, India : M. Gupta.
- Mānasa-kośa* 1909 (個々の著者名表記なし)
- [1909] *Mānasa-kośa arthāt Rāmacaritamānasa ke kaṭhina kaṭhina śabdom ke paryāyavācaka sarala śabdom kā kośa jise Kāśī-Nāgarī-Pracārīnī Sabhā ke katipaya sabhāsadom ne sabhā kī ājñānusāra bahuta pariśrama se sampādita kiya [...]*. Ilāhābāda: Imṇiyana Presa.
- Mānasa-pīyūṣa* = AMJANINANDANAŚARAṆA 1925–1956.
- Mānasa-vyākaraṇa* 1955 (著者名表記なし)
- [1955] *Mānasa-vyākaraṇa*. Gorakhpura: Gītāpresā.
- MASICA, Colin P.
- [1991] *The Indo-Aryan Languages*. Cambridge Language Surveys. Cambridge University Press.
- MAYRHOFER, Manfred
- [1992, 1996, 2001] *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*, vol. 1, 2, 3. Heidelberg: Carl Winter.
- MCGREGOR, Ronald Stuart
- [1968] <sup>246</sup> *The Language of Indrajit of Orchā. A Study of Early Braj*. Cambridge: at the University Press.
- [1984] *Hindi Literature from its Beginnings to the Nineteenth Century*. A History of Indian Literature, Vol. VIII, Fasc. 6. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- [1993] <sup>246</sup> *The Oxford Hindi–English Dictionary*. Oxford / Delhi: Oxford University Press.
- [1995] <sup>246</sup> *Outline of Hindi Grammar, with exercises*. Third Edition, Revised and Enlarged. Oxford: Oxford University Press.
- MISRA ‘Mādhava’, Bhuvaneśvaranātha / MISRA, Vikramāditya
- [1965] *Kahāvata-Kośa*. Paṭanā: Bihāra-Rāṣṭrabhāṣā-Pariṣad.
- MISRA, Viśvanāthaprasāda (ed.)

---

<sup>246</sup> 著者名は「R. S. McGregor」と表記されている。

- [1962] *rāmacaritamānasa. kāśīrāja saṃskaraṇa. Vārāṇasī*. [異読付き本文]  
MUKUL, Akshaya  
[2015] *Gita Press and the Making of Hindu India*. Noida, UP / London etc.:  
HarperCollins Publishers India.
- NAGASAKI Hiroko (長崎 広子)  
[2012a] “Hindi Metre: Origins and Development” In: NAGASAKI Hiroko (ed.)  
2012 *Indian and Persian prosody and Recitation*. Delhi: Saujanya  
Publications, pp. 107–129.  
[2012b] “Samples of Hindi metre: Origins and Development” In: NAGASAKI  
(ed.) 2012 *Indian and Persian prosody and Recitation*. Delhi:  
Saujanya Publications, pp. 293–328.  
[2019] “The Metrical Style of Tulsīdās” In: BURGER, Maya / CATTONI,  
Nadia (ed.) 2019 *Early Modern India. Literatures and Images, Texts  
and Languages*. Heidelberg: CrossAsia -eBooks, Heidelberg  
University Library, pp. 289–304.  
[2023] “Jāyasī’s *Padmāvatī*”. In: NAGASAKI Hiroko / STRNAD, Jaroslav /  
TUREK, Aleksandra 2023, *Triveṇī. Texts of Three Literary Traditions  
in Early Modern Languages of North India. A Reader*.<sup>247</sup> Kyoto and  
Vizianagaram: Kotoba Books, pp. 15–59.
- NARAYANE, Viśvanātha Dinakara  
[1978, 1979, 1983] *Bhāratīya Kahāvata Saṃgraha (Proverbs of India)*. Vol.  
1, 2, 3. Puṇe: Triveṇī Saṃgama–Bhāṣā Vibhāga.
- NEGELEIN, Julius von  
[1912] *Der Traumschlüssel des Jagaddeva. Ein Beitrag zur indischen  
Mantik*. Gießen: Verlag von Alfred Töpelmann (vormals J. Ricker).
- OBERLIES, Thomas  
[2005] *A Historical Grammar of Hindi*. Graz: Leykam Buchverlag.
- OLIVELLE, Patrick et al. (ed.)  
[2015] *A Sanskrit Dictionary of Law and Statecraft*. Chennai / Lucknow etc.:  
Primus Books.
- PANDEY, Shyam Manohar  
[1997] “Surasā, Simhikā, and Laṅkā in the Vālmīki and Other Rāmāyaṇas.”  
*Indologica Taurinensia* 19–20 (1993–1994). *Proceedings of the*

---

<sup>247</sup> [https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/94758/triveni\\_all.pdf](https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/94758/triveni_all.pdf)

*Ninth International Rāmāyaṇa Conference (Torino, April 13th–17th, 1992)*, pp. 227–244.

PISCHEL, Richard

- [1900] *Grammatik der Prākṛit-Sprachen*. Strassburg: Karl J. Trübner.
- [1908] “Ins Gras beissen.” *Sitzungsberichte der königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften zu Berlin* 23, pp. 445–464 (= 2020, vol. 2, pp. 1033–1052).
- [2020] BALBIR, Nalini / PINAULT, Georges-Jean (ed.) *Richard Pischel. Kleine Schriften*. 2 vols. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

POLLOCK, Sheldon I. / (ed.) GOLDMAN, Robert P.<sup>244</sup>

- [1986] *The Rāmāyaṇa of Vālmīki. An Epic of Ancient India. Volume II: Ayodhyākāṇḍa*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- [1991] *The Rāmāyaṇa of Vālmīki. An Epic of Ancient India. Volume III: Aranyakāṇḍa*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.

RAGHAVAN, V.

- [1973] *The Greater Ramayana*. Varanasi: The All-India Kashiraj Trust.

RAU, Wilhelm

- [1986] “Poetical Conventions in Indian Kāvya Literature.” *The Adyar Library Bulletin* 50, pp. 191–197 (= 2012, vol. 1, pp. 256–262).
- [2012] *Kleine Schriften*. 2 vols. Wiesbaden: Harrassowitz.

ROCHER, Ludo

- [1958] “The Ambassador in Ancient India.” *Indian Yearbook of International Affairs* 7, pp. 344–360. (= ROCHER 2012, pp. 219–234).
- [1986] *The Purāṇas. A History of Indian Literature*, Vol. II, Fasc. 3. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- [2012] (ed. Donald R. DAVIS, Jr) *Studies in Hindu Law and Dharmasastra*, London / New York / Delhi: Anthem Press.

SAKAMOTO-GOTO, Junko

- [1993] “Zu mittelindischen Verben aus medialen Kausativa.” In: Rudy SMET and Kenji WATANABE (ed.) *Jain Studies in Honour of Jozef Deleu*. Tokyo: Hon-no-tomosha, pp. 261–314.

SAKSENA, B. (SAKSENĀ, Bābūrāma)

- [1937] *Evolution of Awadhi (A Branch of Hindi)*. Allahabad: The Indian Press.

ŚARAṆA, Śrī

- [1989] *Hindī Kahāvata Kośa*. Dillī: Prema Prakāśana Maṁdira.
- SCHARFE, Hartmut
- [1989] *The State in Indian Tradition*. Leiden / New York / København / Köln: E.J. Brill.
- SCHMIDT, Richard
- [1928] *Nachträge zum Sanskrit-Wörterbuch in kürzerer Fassung von Otto Böhtlingk*. Leipzig: Verlag von Otto Harrassowitz.
- SCHMIEDCHEN, Annette
- [2014] *Herrschergenealogie und Religiöses Patronat. Die Inschriftenkultur der Rāṣṭrakūṭas, Śīlāhāras und Yādavas (8. bis 13. Jahrhundert)*. Leiden: Brill.
- SCHOKKER, H. G.
- [1969] “The *jānā*-passive in the NIA. Languages” *Indo-Iranian Journal* 12(1), pp. 42–52.
- [1984] “The Language of Bhakti. Popular and Literary Expression in the Works of Tulasīdāsa” 『インド古典研究』 *Acta Indologica* 6. 神秘思想論集. 成田山新勝寺成田山仏教研究所, pp. 383–432.
- SCHULZE, Wilhelm
- [1966] *Kleine Schriften. 2, durchgesehene Auflage mit Nachträgen herausgegeben von Wilhelm Wissmann*. Wiesbaden: Vandenhoeck & Ruprecht.
- SHARMA, Ram Karan
- [1964] *Elements of Poetry in the Mahābhārata*. Berkeley / Los Angeles: University of California Press.
- SINGALAVELU, S.
- [1980] “Tulasī-dāsa’s Rāmacaritamānasa in Hindi and Its Relationship to the Sanskrit Version of Vālmīki, the Tamil Version of Kamban, and the Thai Version of King Rāma I.” In: Raghavan, V. (ed.) *The Ramayana Tradition in Asia: Papers Presented at the International Seminar on the Ramayana Tradition in Asia, New Delhi, December 1975*. New Delhi: Sahitya Akademi, pp. 455–474.
- SNELL, Rupert
- [1991] *The Hindi Classical Tradition. A Braj Bhāṣā Reader*. London: School of Oriental and African Studies, University of London.
- SNELL, Rupert / with TIWARI, Neha

- [2023] *Reading the Rāmcaritmānas. A Companion to the Awadhi Ramayana of Tulsidas*. Delhi: Primus Books.
- SRINIVASAN, S. A.
- [1984] *Studies in the Rāma Story. On the irretrievable loss of Vālmīki's original and the operation of the received text as seen in some versions of the Vālin-Sugrīva episode*. Volume I; Volume II: Notes, Index of references, Addenda. (Alt- und Neu-Indische Studien 25) Wiesbaden: Franz Steine Verlag.
- ŚRĪVĀSTAVA, Bhārati / ŚRĪVĀSTAVA, Omaprakāśa
- [2019] *śabdamānasa. śrīrāmacaritamānasa ke samasta śabdom kā artha tathā saṁdarbha kośa*. Bhopal: Manjul Publishing House.
- ŚRĪVĀSTAVA, Devakīnandana
- [1957] *Tulasīdāsa kī bhāṣā*. (svargīya seṭha bholārāma sekasariyā-smāraka graṁthamālā—7). Lakhanaū: Lakhanaū Viśvavidyālaya.
- STASIĆ, Danuta
- [2009] “Perso-Arabic Lexis in the *Rāmcaritmānas* of Tulsīdās”. *Cracow Indological Studies* 11, pp. 67–86.
- STERNBACH, Ludwik
- [1974–2007] *Mahā-Subhāṣita-Saṁgraha. Being* <sup>248</sup> *An Extensive Collection of Wise Sayings and Entertaining Verses in Sanskrit [...]*. 1974, 1976, 1977, 1980, 1981, 1987, 1999, 2007. Hoshiarpur: Vishveshvaranand Vedic Research Institute.
- STRNAD, Jaroslav
- [2013] *Morphology and Syntax of Old Hindī. Edition and Analysis of One Hundred Kabīr vānī Poems from Rājasthān*. Brill's Indological Library, Volume 45. Leiden / Boston: Brill.
- [2023] “Map. Languages and Dialects of North India.” In: NAGASAKI Hiroko / STRNAD, Jaroslav / TUREK, Aleksandra 2023, *Trivenī. Texts of Three Literary Traditions in Early Modern Languages of North India. A Reader*.<sup>249</sup> Kyoto and Vizianagaram: Kotoba Books, pp. xiv.
- STROŃSKI, Krzysztof

---

<sup>248</sup> 「Being」の語は、vol. 1–5 にあるが、vol. 6–8 にはない。

<sup>249</sup> [https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/94758/triveni\\_all.pdf](https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/94758/triveni_all.pdf)

- [2011] *Synchronic and Diachronic Aspects of Ergativity in Indo-Aryan*. Poznań: Wydawnictwo Naukowe UAM.
- ŚUKLA, Kamalā
- [2002] *Avadhī Bṛhat Lokokti Kośa*. Hindī Samiti Granthāṅka – 286. Lakhanaū: Uttara Pradeśa Saṁsthāna.
- ŚUKLA, Rāmacandra et al. (ed.)
- [1923] Tulasī Granthāvalī. Prathama Khaṇḍa (*rāmacaritamānasa*). Kāśī: Nāgarīpracāriṇī Sabhā. [異読付き本文<sup>250</sup>]
- [1973] Tulasī Granthāvalī. Prathama Khaṇḍa (*rāmacaritamānasa*). Vārāṇasī: Nāgarīpracāriṇī Sabhā. [異読なし本文]
- SŪRYAKĀNTA
- [1937] *Index Verborum to Tulasī Dāsa's Rāmāyaṇa / Tulasī-rāmāyaṇa śabda-sūcī*. Lahore: The University of the Panjab.
- ŚYĀMASUNDARADĀSA (ed.)
- [1922] *gosāīm tulasīdāsa-kṛta rāmacaritamānasa jise kāśī nāgarīpracāriṇī sabhā ke pāñca sabhāsadoṃ ne sabhā kī ājñā se atyanta prācīna hastalikhita pratiyom se śodhakara sampādita kiyā aura jisakī fikā śyāmasundaradāsa bī. e. sabhāpati nāgarīpracāriṇī sabhā, kāśī, ne kī. dvitīya bāra*. Prayāga: Imḍiyana Presa, Limiteda. [異読なし本文、ヒンディー語訳]
- ŚYĀMASUNDARADĀSA et al.
- [1965–1975] *Hindī śabdasāgara*. 11 vols. 2nd ed. Kāśī: Nāgarīpracāriṇī Sabhā.
- SYED, Renate
- [1990] *Die Flora Altindiens in Literatur und Kunst*. Diss. München. Erschienen im Selbstverlag.
- [1993] *Kālidāsa's Kumārasaṃbhava aus dem Sanskrit übertragen und unter Berücksichtigung des Kommentares von Mallinātha mit erläuternden Anmerkungen versehen*. Reinbek: Dr. Inge Wezler, Verlag für Orientalistische Fachpublikationen.
- TAGARE, Ganesh Vasudev
- [1948] *Historical Grammar of Apabhraṃśa*. Poona: Deccan College.
- ṬAMḌANA, Premanārāyaṇa

---

<sup>250</sup> 未見。VERMA 1998, p. 20, no. 59; BANGHA 2024, pp. 83f., 101 の情報による。

- [1957] *sūra kī bhāṣā*. Lakhanaū: Himdī Sāhitya Bhaṁḍāra.  
[1962] *brajabhāṣā-vyākaraṇa kī rūparekhā*. Lakhanaū: Lakhanaū  
Viśvavidyālaya.  
[1974-?] (ed.) *Brajabhāṣā Sūra-kośa*. 10 parts. Lakhanaū: Lakhanaū  
Viśvavidyālaya.

TESSITORI, L. P.

- [1911] “Il ‘Rāmacaritamānasa’ e il Rāmāyaṇa”.<sup>251</sup> *Giornale della Società Asiatica Italiana* 24, pp. 99–164.  
[1912–1913] “The Ramacharitamānasa and the Ramayana.” *Indian Antiquary* 41 (1912), pp. 273–286; 42 (1913), pp. 1–18.  
[1914] “On Some Grammatical Forms Occurring in the Old Baiswari of Tulasi Dasa”. *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland* (Oct., 1914), pp. 901–913.  
[1914–1916] “Notes on the Grammar of the Old Western Rajasthani with Special Reference to Apabhramṣa and to Gujarati and Marwari.” *Indian Antiquary* vol. 43 (1914), pp. 21–26, 55–63, 84–91, 181–186, 213–216, 225–228, 245–252; vol. 44 (1915), pp. 3–11, 30–36, 52–58, 74–81, 96–105, 119–126, 159–163; vol. 45 (1916), pp. 6–7, 93–99.  
[2002] Specimen-pages from: “Antologia del Rāmacaritamānasa, con Grammatica dell’Antica Baiswārī, Note con estratti di commenti indigeni, e Glossario.” In: TESSITORI, (ed.) FIACCADORI, Gianfranco / MILANETTI, Giorgio 2002 *Rāmacaritamānasa e Rāmāyaṇa*. Opera omnia di Luigi Pio Tessitori, III. Udine: Società Indologica Luigi Pio Tessitori, pp. 187–199.<sup>252</sup>

TIVĀRĪ, Bholānātha

- [1985] *Vṛhad Hindī Lokokti Kośa*. Dillī: Śabdakāra.

TIVĀRĪ, Bholānātha / (ed.) *Nautiyāla, Jayantī Prasāda*

- [2007] *Bhāṣā vijñāna praveśa evaṁ himdī bhāṣā*. Nayī Dillī: Kitābaghara Prakāśana.

---

<sup>251</sup> Review: GRIERSON 1912.

<sup>252</sup> この手稿については、FRESCHI 1999, pp. 210f. を参照。更に、“a huge work entitled *Il Manuale del Rāmacaritamānasa* (The Rāmacaritamānasa Manual), now lost” (FRESCHI 1999, p. 200) も著していたという。

TIVĀRĪ, Haragoviṃda (saṃkalanakarttā) / TIVĀRĪ, Bholānātha (saṃpādaka).

[1954] *tulasī-śabdasāgara*. Ilāhābāda: Himdustānī Ekeḍamī.

TRIPĀṬHĪ, Vijayānanda (ed.)

[1936] *Śrīrāmacaritamānasa*. Ilāhābāda: Bhāratī-Bhaṇḍāra / Līḍara Presa.  
[異読付き本文<sup>253</sup>] .

TURNER, D.R.

[1969] *A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages*. Vol. 2:  
*Indexes Compiled by D.R. Turner*. London: Oxford University Press.

TURNER, R.L. / TURNER, D.R.

[1971] *A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages*. Vol. 3:  
*Phonetic Analysis*. London: Oxford University Press.

TURNER, R.L.

[1931] *A Comparative and Etymological Dictionary of the Nepali Language*.  
London: Kegan Paul, Trench, Trubner.

[1966] *A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages*. Vol. 1: *Text*.  
London: Oxford University Press.

[1985] *A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages*. Vol.4:  
*Addenda and Corrigenda*. Edited by J. C. Wright. London: School of  
Oriental and African Studies, University of London.

[VĀJAPEYĪ, NandaDulāre (ed.)<sup>254</sup>]

[1948] *śrīmadgosvāmī tulasīdāsajī viracita śrīrāmacaritamānasa* [*sacitra*,  
*saṭīka majhalā sāija*]<sup>255</sup>. ṭīkākāra– Hanumānaprasāda Poddāra.  
Gorakhpura: Gītāpresā.<sup>256</sup> [異読なし本文、ヒンディー語訳]

---

<sup>253</sup> 未見。VERMA 1998, p. 18f., no. 46; LUTGENDORF 1991, p. 155; BANGHA 2024, p. 83, n. 95 の情報による。BANGHA 2024, p. 83 によれば、異読付きである。

<sup>254</sup> 明示されることはないものの、Gita Press 版の実際の editor は NandaDulāre VĀJAPEYĪ であることについて、BANGHA 2024, p. 85; *ibid.*, n. 104 を参照。この ed. 制作の経緯について、LUTGENDORF 1991, p. 62; MUKUL 2015, p. 128f. をも参照。

<sup>255</sup> この表題は、中表紙に書かれているものである。本の布表紙に書かれている表題は詳細に異同があり、*śrīrāmacaritamānasa* [*mūla-moṭā ṭāipa*] (*pāṭhabhedasahita, sacitra*) である。

<sup>256</sup> この電子テキストが、<https://gretl.sub.uni-goettingen.de/gretl.html> に挙がる。

- [1968] *śrīmadgosvāmī tulasīdāśajīviracita śrīrāmacaritamānasa (sacitra pāṭha-bhedavālī) [mūla-moṭā ṭāipa]*. ṣaṣṭha saṁskaraṇa. Gorakhpura: Gītāpresā.<sup>256</sup> [異読付き本文]
- [1972] *Sri Ramacaritamanasa or [The Mānasa lake brimming over with the exploits of Śrī Rāma] (With Hindi Text and English Translation)*. Gorakhpur: Gita Press.<sup>256</sup> (英訳者の記載なし) [異読なし本文、英語訳]
- VARMĀ, Dhīrendra
- [1935] <sup>257</sup> *La langue Braj (Dialecte de Mathurā)*. Paris: Librairie d'Amérique et d'Orient, Adrien-Maisonneuve.
- [1954] *Brajabhāṣā*. Ilāhābāda: Himdustānī Ekeḍamī. (Reprint: 2011)
- VARMMĀ, Rāmacandra et al.
- [1962–1966] *Mānaka hindī kośa [hindī bhāṣā kā adyatana, artha-pradhāna, aura sarvāṁgapūrṇa śabda-kośa]*. Prayāga: Hindī Sāhitya Sammelana.
- VASSILKOV, Yaroslav V.
- [2000] “On the Meaning of the Names *Aśoka* and *Piyadasi*.” *Indologica Taurinensia* 23–24 (1997–1998). *Professor Gregory M. Bongard-Levin Felicitation Volume*, pp. 441–457.
- VAUDEVILLE, Charlotte
- [1955] *Étude sur les sources et la composition du Rāmāyaṇa de Tulsī-Dās*. Paris: Librairie d'Amérique et d'Orient, Adrien-Maisonneuve. [ヒンディー語訳：VAUDEVILLE / BALBIR 1959, 1965]
- VAUDEVILLE, Charlotte / tr.: BALBIR, J. K. (BALABĪRA, Jagavaiṁśa Kīśora)
- [1959, 1965] *Tulasīdāśa racita Rāmacaritamānasa kā mūlādhāra va racanāviśayaka samālocanātmaka eka adhayana*. Prathama bhāga, Dvītiya bhāga. Pondichéry: Institut français d'indologie.
- VERMA, Sudha
- [1998] *Tulasidasa: A Bibliography*. With an introduction by H. Daniel Smith. Delhi: B. R. Publishing Corporation.
- VYAS, Shantikumar Nanooram
- [1967] *India in the Rāmāyaṇa Age. A Study of the Social and Cultural Conditions in Ancient India as Described in Vālmiki's Rāmāyaṇa*.

---

<sup>257</sup> 著者名表記は「Dhirendra Varma」となっている。

*With 126 Illustrations and one Map. Delhi / New Delhi / Chandigarh  
/ Jaipur / Lucknow: Atma Ram & Sons.*

井田 克征

- [2008] 「トゥルシーの物語——女神になった聖なる植物」『アジア遊学』115（特集 縁起の東西；聖人・奇跡・巡礼），東京：勉誠出版，pp. 118–124.

池田 運

- [2003] 『ラーマヤン ラーム神王行伝の湖 ツルシダース著』東京：講談社出版サービスセンター.

古賀 勝郎／高橋 明

- [2006] 『ヒンディー語＝日本語辞典』東京：大修館書店.

坂田 貞二

- [1984a] 「西暦 1869 年刊の石板刷り『ラーム＝チャリト＝マーナス』について」『拓殖大学論集』147, pp. 1–14.  
[1984b] 「『ラーム＝チャリト＝マーナス』の西暦 1705 年写本——筆写者と享受者の対話の記録——」『研究年報』拓殖大学研究所 8, pp. 1–16.  
[1998] 「インドのラーマヤナ」In: 金子 量重／坂田 貞二／鈴木 正崇（編）1998『ラーマヤナの宇宙——伝承と民族造形——』東京：春秋社., pp. 4–48.

阪本（後藤） 純子

- [1996] 「Uttarajjhayāṇa X 1-36d samayaṃ goyama mā pamāyae — 使役法中動態に由来する中期インド語動詞 —」『ジャイナ教研究』2, pp. 17–38.

辻 直四郎

- [1973] 『サンスクリット文学史』岩波全書 277. 東京：岩波書店.  
ドゥヴィヴェーディー, ハザーリー プラサード／（訳：）町田 和彦  
[1983] 「ヒンディー評論 サンスクリット詩人の慣用表現（上）」『インド文学』17, インド文学会, pp. 30–41.

長崎 広子

- [2000] 「『ラームチャリットマーナス』に用いられる韻律」『東海仏教』45, pp. 89(30)–73(46).  
[2011] 「聖者トゥルシーダース伝の変容」『説話・伝承学』19, pp. 159–178.

西岡 直樹

[2002] 『定本 インド花綴り』 東京: 木犀社.

[2003] 『サラソウジュの木の下で インド植物ものがたり』 東京: 平凡社.

マジュプリア, T. C. (日本語訳者: 西岡 直樹)

[1996] 『ネパール・インドの聖なる植物』 <新装版> 東京: 八坂書房. (MAJUPURIA 1988 の日本語訳)

オンライン資料

- 【1】: 「ヒンディー文学巡り」という題のウェブサイト<sup>258</sup>中に、RCM 第 1 巻の日本語訳 (訳者名記載無し) が、三部に分けてアップロード (<http://arigio.web.fc2.com/mypage54.pdf>; <http://arigio.web.fc2.com/mypage55.pdf>; <http://arigio.web.fc2.com/mypage56.pdf>) されている。
- 【2】: 中世アワディー語・ブラジ語文献の、長崎広子教授による電子テキスト (<http://hin.minoh.osaka-u.ac.jp/etext.html>)
- 【3】: Göttingen Register of Electronic Texts in Indian Languages (<https://gretil.sub.uni-goettingen.de/gretil.html>)
- 【4】: Thesaurus Indogermanischer Text- und Sprachmaterialien (<https://titus.fkidg1.uni-frankfurt.de/framee.htm?/texte/texte.htm#Etablelle>)
- 【5】: Digital Dictionaries of South Asia (<https://dsal.uchicago.edu/dictionaries/>)
- 【6】: Cologne Digital Sanskrit Dictionaries (<https://www.sanskrit-lexicon.uni-koeln.de/>)
- 【7】: Internet Archive (<https://archive.org/>)
- 【8】: Lucknow Digital Library (<https://lucknowdigitallibrary.com/>)

\*\*\* \*\*

---

<sup>258</sup> ホームページは <http://arigio.web.fc2.com/> であり、トゥルスィーダースの著作の翻訳へのリンクは <http://arigio.web.fc2.com/mypage3421.pdf> にある。また、同一人物による他のブログとして、<https://gioari.exblog.jp/7585515/> と <https://gioari2.exblog.jp/> がある。最終閲覧時点は、日本時間で 2025 年 12 月 31 日 23:41 であった。